5歳 6歳

完全版

スイス留学大作戦

ボーダレスな世界で生きられる子供たちに

若草まや

目次

プロローグ　10

一章　ことの発端……13

『お受験』とは無縁のプライベートスクール　12
職住一体の生活　14
子育てを戦う同志として　15
助っ人フランク参上す　16
パパの大英断　17
こうして計画が始動した　19
百戦錬磨の学校行脚　20
仲良し姉妹　21
他の子供とどこかが違う　22

出生時の気がかり　23
インターナショナルスクール？　25

二章　学校行脚……29

Kプリスクール開校す　30
神戸のサマースクール　32
途方に暮れて　35
氷解した謎　37
Y先生とK先生　38
泣いてばかりいられない　40
お粗末な現状に背中を押されて　41
柚に起きた異変　42
船場のおばさんの予言　44
前途多難！　幼稚園児の寄宿舎留学　46
持つべきものは同級生の絆　48

サマースクールは冒険の旅のリハーサル　50
スイスのお父さんお母さん　51
柚と聖の弱気　53
子供の内なる不思議な力　54
マルチリンガルの魔法？　56
小さな留学生の旅立ち　58

三章　寄宿舎学校　ラ・ガレン……61

初日の出来事　62
パウラは小さなお母さん　64
嬉しい予感　66
メアン一家　67
寂しさとの闘い　69
土曜の夜が待ち遠しい！　70
美しくて美味しい国スイス　72

ホテル　ヴィクトリア　75
スイスの街角歩きはご用心！　78
行くも戻るも……　80
ガレンにもテロの余波　82
留学実行のための経済学　84

四章　寄宿舎生活の費用明細……87

＊お小遣い　88
＊被服費　90
＊医療費　92
＊スキースクールの受講料　93
＊プライベートレッスンのフィー　95
＊友人宅に招かれた際の滞在費　97
＊小人の金貨は二フラン三十五サンチーム　99

五章　小っちゃなジャパニーズ代表……101
日本代表、健闘す　102
かつて日本にもあった　104
愛しのマミーちゃんに会いに　106
侮れない！　怒濤のお迎えラッシュ　108
ルーヴルへの道　110
ルーヴルの穴場　112
女子高生でいっぱい事件　114

六章　ボーダレス世界の教育論議……117
攻めの子育て、守りの子育て　118
ハッとした一言　120
ガレン式成績表　122
日本語を忘れるか？　123

英語は最初から必要か？ 125
寄宿舎の落とし穴 127
「私、もうガレンに行かない！」 130
幻の父母会名簿 133

七章 武者震い……137

サダームはパリに？ 138
コナン君になった柚と聖 140
ローザンヌでの受難 141
「パパ、お仕事に行ってもいいよ」 144
武者震い 147
アルプスのパラセール 150
夏休みの準備 152

八章　世界で生きられる子供たちに……155
再び、神戸のサマースクールへ　156
柚と聖が最も戸惑うリクエスト　157
サマースクールの終わりに　160
もうストレンジャーじゃない　161
世界で生きられる子供へ　163

検証　五歳と六歳のスイス留学……167
七年が過ぎて　168
二十五歳を指標に始めよう　170
学校だけで完結するボーディングスクール　173
「ボーディングスクールの親業」はやめられない！　175
低年齢対象のボーディングスクール　176
独自の留学環境を作り出す三条件　178

スイスからの撤退 180
逆転の発想 181
低年齢留学と日本語 184
言語教育面での成果 187
母なる言語を心に抱いて 190
どこに目標を置くか 191
低年齢留学とアイデンティティー 192
親子留学を選ばなかった理由 194
低年齢留学のメリット・デメリット 196
日本における低年齢留学の今後 198
インターナショナルスクールって、どんなところ? 201
日本の大学に入れるインターナショナルスクール 204
インターナショナルスクールとボーディングスクール 207
英語のできない親は子供にバカにされるか? 209
世界人として生きる日本人になるために 211

柚と聖から、読者の皆様へ　214

エピローグ（フロム　ダッド）　216

〈特別寄稿〉**LDと才能・個性について**　**松村暢隆**（関西大学文学部教授）　218

あとがき　223

巻末資料　I ～ XX

プロローグ

生まれてすぐに、留学させようと決めた！

二〇〇一年秋、我が家は六年越しの計画をついに実行に移した。

五歳と六歳だった二人の娘たちをスイスに留学させたのだ。

ことの発端は、長女の柚が誕生した翌日にさかのぼる。

初めての出産の感激も覚めやらぬ私の病室に、夫がやってきた。

『世界の名門校』という、買ったばかりの分厚い本を見せながら、

いきなりこう宣言したのだった。

「この子は、日本では育てないよ」

一章　ことの発端

『お受験』とは無縁のプライベートスクール

昭和三十年代前半に東京で生まれ、いわゆる『お受験世代』のハシリであった夫は、それこそ小学校へ行く暇も惜しんで塾通いし、睡眠時間を削りに削って勉強して、御三家と賞賛される私立男子校へ、見事に合格を果たした。

片や、公立校全盛期だった大阪で生まれた私のほうは、塾へも行かずのんきに育った。夏休みは毎年、ガールスカウトのキャンプで海や山へ出かけて真っ黒に日焼けし、同い年の夫とは対照的な少女時代を過ごした。中学生のころには、語学が堪能で外国の話をよく聞かせてくれた父や、冒険心に富んだ性格の母から、「十三歳にもなって独りで海外に行けなくてどうするの！」と叱咤激励（しったげきれい）されて、アメリカに渡らせてもらい、子供なりの視点で異文化に触れる、貴重な機会も得た。

そんな二人が、時を経て、医師免許を手に互いに対等に働きはじめてみれば、夫は、あれほどまっしぐらに突き進んできたにもかかわらず、私のように寄り道をしながら育った者と同じ終着駅であったことに気付いて愕然とし、猛烈な虚しさに襲われたという。

以来、こんな台詞が、彼の口癖となった。

「僕は、勉強するのは嫌いじゃないし、それなりに充実した学生生活を送れたから、あの学校に入ったこと自体は、決して後悔していない。でも、そこに至るまでの、詰め込み式受験勉強に費やした時間やエネルギーが、実に無意味なものに思えるよ。小学生の子供の頭に浮かぶ、一番切実な願いが、朝まで起こされずにぐっすり睡眠を取ってみたい、なんていうことなんだよ。そんなささやかな願望すら叶わないような極限状態の生活を、寝たいときに好きなだけ寝て大きくなった君に理解できるかい？　僕は、自分の子供には絶対に同じ轍を踏ませない。もっと伸び伸びした環境で勉強させて、有意義な子供時代を過ごしてもらいたいんだ」

そして待望の子供が誕生し、いよいよその言葉を、具体的にどんな形で実現するのかを問われる立場になると、彼の目には、『お受験』とは無縁の欧米のボーディングスクール（寄宿舎学校）こそが、まさしく求めていた理想の学校に映ったらしかった。

さらに彼によれば、日本では優秀とされている人物が、言語の壁に阻まれて、国際的には必ずしも芳（かんば）しい評価を得られていない場面を見聞するにつけ、日本の名門校は世界には通用せず、との思いを強くし、英語の必要性を痛感していたことも、大きな理由となっているそうだ。

とにかく、彼の決意はとても固かった。

職住一体の生活

柚（ゆず）の誕生は、私の生活にも、大きな変化をもたらした。

眼科の医師をしている私は、妊娠がわかってすぐに勤務医暮らしに終止符を打ち、出産後まもなく、内科医であった父の診療所の一角を改造して自分の住居兼クリニックをオープンし、開業医となってスタートした。多くの先輩女医の前例を見て、職住一体の開業医のほうが、子育てと両立しやすいだろうと考えたからだ。

しかし、実際に始めてみると予想以上に忙しく、柚は生後わずか一ヶ月にして、一日の大半をお手伝いさんと二人だけで過ごすことになった。当然、母親の私が付き添って、お稽古ごとや塾に通うような時間的余裕はない。このままでは柚に、まともな教育を受ける機会すら与えてやれないのではないか……。

不安が募る私には、プロの教師が朝から晩まで付きっきりでお世話してくれるボーディングスクールが、案外、良い選択肢であるかと思われ、私の心も次第に海外留学へと傾いていった。

子育てを戦う同志として

かくして、夫と私は、柚のために留学大作戦を展開する運びとなった。

私たちは当初、留学させる時期を、柚が十歳になるころにしようと定め、それまでに準備しなければならない項目に関して、周到に計画を練るところから始めた。その際に検討した主な課題は、次に挙げる事柄である。

一、英語の習得
二、留学先の学校選び
三、精神的自立（親離れと子離れ）
四、資金計画

夫も私も、共通の目標に向かって歩き出した同志として、とても張り切っていた。以後六年の間、いくつものハードルが用意された険しい道が待ち受けていようとは、当時の私たちには知る由もなかった。

助っ人フランク参上す

我が家では、英語を身につけるには、できるだけ早期から対策を講ずるべきだと考え、柚が言葉らしきものを発し始めた二歳前に、語学教育をスタートした。ちょうどそのころには、柚とは一歳一ヶ月離れて、次女の聖が誕生し、お手伝いさんは子供二人を任されて、一日中てんてこ舞いのありさまであった。

私は、助っ人を兼ねて、オーストラリア人のフランクという男性語学教師に頼んで、週に数回、家に来てもらうことにした。

フランクに期待したのは、娘たちに英語で接して英会話を教えるという役割であり、彼は十分それに応えてくれた。さらに、私にとって想定外で嬉しかったことに、フランクは大変な子供好きで、お相撲ごっこをして遊んでくれたり、時にはお母さん役まで上手に務めてくれたりした。

柚と聖は、彼が来る日を心待ちにするようになり、ぐんぐん英語をマスターしていった。

それでも、日本語による言葉の発達が年齢に比較して非常に早かった柚は、第一言語が英語になるほどにはならなかったが、聖のほうは、日本語より先に英語で発話し始め、日常の

会話も、幼児特有のたどたどしさながらも、英語が主言語となってしまった。私は当時、この現象を、聖があまりにも小さいうちに、それも長時間、英語浸けの環境に身を置いたためだろう、と楽観的にとらえていたのだが、実はこれが、のちに思わぬドンデン返しを喰らう結果へとつながる、とても重要な伏線だったのだ。それについては、いずれ詳しく述べることにする。

パパの大英断

職住一体の生活は、私が想像していたほど甘いものではなかった。

連日、百人以上の患者さんを相手にしてクタクタに疲れていても、白衣を脱いだ途端、すぐに頭をお母さんモードに切り替えなくてはならない。ドアを隔てた向こう側では、幼な子が二人そろって、「ママー、抱っこ」と飛びつくタイミングを、容赦（ようしゃ）なく待ち構えているのだ。

だから私はいつも、ドアを開ける直前に、大きく深呼吸してから、自分の顔をピシャピシャ叩いて、元気を奮い立たせた。私の姿を見て歓声を上げる娘たちを、代わる代わる抱き上げ、夕飯を食べさせて、お風呂に入れ、絵本を読んで寝かしつける。私にとっても楽しいひとと

きのはずなのに、毎日となると、時にはイライラを隠せず、柚と聖の前で仏頂面をしてしまったり、些細な失敗で怒ったりした。すると決まって、小さな柚が、涙の溜まった目で私をじっと見上げて、「ママ、笑って」と言うのだ。自分でも一生懸命、笑顔を作りながら……。そのいじらしい様子に、私はハッと我に返り、あわてて軌道修正するのだった。

お手伝いさんが帰って、さあ親子水入らず、と思った直後に急患が来て、仕事場のベッドに柚と聖を並べたまま横で診察したり、寒い冬の夜更けに、二人を車に乗せて、子連れで往診に出たこともあった。

そんな日々の繰り返しの中で、私は心身ともにすり減り、疲労感ばかりがどんどん膨らんでいった。

夫はそのころ、勤務医をしていて、早朝から深夜まで、ほとんど留守だった。当直で帰れない日もしばしばあり、協力を頼もうにも難しい状況であった。

やはり子供が小さい間は、育児と仕事の両立なんて無理なのかしら……。

私はしばらく、仕事を休んで子育てに専念したほうがいいのだろうか……。

追い詰められた私が、気力も体力も限界に達したある日、思い切って夫に相談してみたところ、黙って聞いていた彼から返ってきたのは、まったく意外な答えだった。

「よし。僕が、当分仕事を休むよ」

夫と私の頭の中には、当時から常に、数年後に迫ったかわいい娘たちとのお別れに際しての、漠然とした覚悟があった。その瞬間に備えて、親として腹をくくっておくことの必要性を、私たちは強く意識しながら暮らしていた。

夫の爆弾発言は、その延長線上に、ごく自然に浮かんだ無理のない結論だった。少しでも長い時間を子供と一緒に過ごしたい、という気持ちも手伝って、このような選択に至ったらしかった。

それからの夫の行動は素早かった。翌日には所属先の病院と交渉を開始し、勤務形態を週二～三回の非常勤扱いに変更してもらい、それ以外の日は家にいて、お手伝いさんやフランクと交代で、娘たちの世話を引き受けてくれることになった。家計への収入が大幅に減ったのは痛かったが、時間的にはグンと余裕が生まれ、家族みんなが大喜びの『パパの大英断』であった。

こうして計画が始動した

近い将来、必ずやってくるお別れのときに、娘たちが、それぞれの未来を目指して力いっぱい前向きに巣立っていけますように。

そのためには、親も子も、確固たる信頼関係と愛情で、互いに強く結ばれていることが不可欠であり、それこそが精神的自立をうながすのだ、と考えていた私たちは、柚と聖が幼いうちから、できる限り密度の濃い時間を共有しようと心がけた。

長距離の移動に慣れさせるねらいもあって、国内外を問わず、遠出の旅行にも頻繁(ひんぱん)に二人を連れ出した。あたかも、一生分の家族旅行を、たった数年間で全部済ませてしまいそうな勢いで。

また、折に触れ、「あなたたちは、小学生になったら、パパやママとはお別れして、ふたりだけで冒険の旅に出るのよ。いいね、いいね〜。うらやましいなぁ」と言って、マインドコントロールすることも忘れなかった。常日頃から私は、「子供はみんな、神様から可能性という宝物をもらって生まれるの。柚ちゃんと聖ちゃんは、その宝物をピカピカに磨きにいくのが、大切なお仕事なのよ」と、繰り返し二人に聞かせ続けた。

百戦錬磨の学校行脚

それと並行して、世界各国の学校情報を集めることにも注力した。本やインターネットから得る知識は申すに及ばず、種々の留学斡旋会社の開催する説明会には、規模の大小にかかわら

ず、こまめに足を運んだし、どこそこに中学生以下の留学経験者がいるとのうわさを耳にすれば、面識のない親御さんに失礼を詫びつつ電話をかけて、直接お話をうかがったりもした。

そうして集めた情報を元に、めぼしい学校には、あらかじめメールで連絡を取って、休診日や長期の休暇を利用して実際に訪ね、アドミッション担当者の説明を聞きながら諸設備を案内してもらうなど、可能な限り精力的に動いた。私たちはこれを『学校行脚』と呼んでいたのだが、訪問先は六年間で相当数に上る。もしかしたら、夫と私は、日本で一番たくさんの学校を見学した親かもしれないと自負しているほどだ。

仲良し姉妹

学校行脚に明け暮れていた最中にも、柚と聖はすくすくと育って、幼稚園に入園する年齢に差しかかった。

そのころになっても、聖は、相変わらず英語を主言語として使い、日本語での会話はおぼつかないままだった。聖の日常生活全般において、通訳をつとめるのは、いつしか柚の役目となっていった。

一歳一ヶ月のときから、まるで双子みたいに四六時中ずっと聖と一緒に過ごしていた柚は、聖が発話を始めてまもなく、日本語をほとんどしゃべらないことに真っ先に気付いた。

「聖ちゃんは、フランクと同じ、ぐちゃぐちゃの言葉（英語のこと）しかわからないの。だから柚も、ぐちゃぐちゃの言葉で、聖ちゃんにお話してあげるね」と言いながら、自分なりに聖と意思疎通を図ろうと努めた結果、柚はちょっとしたバイリンガルに成長していたのである。

ネイティブスピーカーよろしく、しばしば幼児特有の発音や言い回しの混じる聖の英語が、夫や私にはどうしても聞き取れなくて、癇癪を起こす聖を横目に困り果てていると、いつも柚が、即座に助け舟を出してくれた。

私には、そんな柚が、本当に頼もしく感じられたものだった。それと同時に、柚と聖が仲の良い姉妹に育ってくれたことが、何より嬉しかった。

他の子供とどこかが違う

おそまきながら私は、このころになってようやく、聖が、他の子供とはどこかが違う、と

いう事実を認識し始めていた。

頭の回転が悪いわけではなさそうだった。

運動発達の面でも、それまで特に遅れは見られず、大した病気もせずに順調に成長したはずだった。

ただ、日本語の発話能力が、極端に劣っているように思われた。不思議に、英語でなら年齢相応のセンテンスをよどみなく話せるのに、日本語となると、簡単な単語を断片的につなげて言葉にするのがやっとの状態で、フランクと接する時間が長いというだけでは説明がつかないような気がして、日に日に不安が重苦しく広がっていった。

出生時の気がかり

実は私には、聖(せい)に対して負い目が一つあった。

私は聖を、千六百グラム足らずの未熟児で産んでしまったのだ。

聖という名前は、本来の彼女の出産予定日であったクリスマス（聖夜）にちなんで、彼女がお腹にいるときから、男の子でも女の子でも通用する名称をと考えて、付けたものだった。

しかし、実際には聖は、二ヶ月半も早く、十月に誕生した。直接の原因が、直径二十二センチもの巨大子宮筋腫プラス全前置胎盤の悪条件が合併する妊娠にあったとはいえ、「妊娠中も仕事を休まず続けたせいではないか」と、私は自分を責めた。

長女の柚（ゆず）のほうは、七年もの長い不妊の期間を経て、思いがけなく授かった子供だった。柚の妊娠が判明した際、くだんの巨大子宮筋腫も同時に発見され、産科の主治医から、妊娠したのが奇跡みたいに言われたので、柚の出産後は、夫も私も、再びの妊娠はあり得ないだろうと、完全にあきらめていた。だからこそ、前述したように、柚が生まれて一ヶ月目に、育児をしながらでも仕事ができる環境を整え、開業医として出発したのだ。

ところが、予期せずしてすぐに第二子を妊娠したのには、私自身、驚いてしまった。二回目の奇跡が起こったのである。

喜びはとても大きかったけれど、新しいクリニックを始めたばかりの、軌道に乗るか乗らないかの瀬戸際に、おいそれと休診にするわけにはいかず、私は仕事を続けなくてはならなかった。しかもその上、一歳に満たない赤ん坊の柚がいて、抱っこしたり、かがんで世話をしたりすることも多い。

そんな無理がたたったのか、私は妊娠二十九週でとうとう大出血して、母子ともに危険な容体に陥り、緊急手術によって、未熟児の聖が、お役御免となった子宮と一緒に私のお腹か

ら取り出された。

生後二ヶ月間を保育器の中で過ごした彼女は、小さな目薬の容器ほどの、ほんの五ミリリットルのミルクを飲むのにも、二十分以上かかり、途中で何度も呼吸が停止したのだった。

このような経緯であったから、夫も私も、聖の成育の過程で、何か問題が生じる可能性については、ひそかに危惧していた。ついに、それが現実になったのだと、私は確信した。

インターナショナルスクール？

当初、私たちは、柚と聖が留学するまでに受ける一般教育は、日本の義務教育でいいと考えた。英語さえきちんと身につけていれば、海外の学校でも、それで十分、通用するだろうと楽観していたので、幼稚園や小学校のお受験に向けて、特別な準備は何一つさせていなかった。

それでも柚は、近隣では難関とされるT学園の附属幼稚園を、試みに受験したところ合格し、入園した。聖のほうは、柚と明暗を分け、Tとは別のS幼稚園に入園することになった。

S幼稚園での聖は、たちまち、扱いにくい問題児のレッテルを貼られたかのようだった。

日本では、「他の子と違う」というのは、大変具合の悪いことらしい。先生やお友達とうまくコミュニケーションが取れない聖は、大人からも子供からも異端視され、何とはなく浮いた存在になっていった。

幸い、担任のY先生は、とても理解力のある優しい方で、そんな聖に、根気よく包み込むように接してくださり、そのお蔭で、聖は毎日喜んで通園していたが、親の目から見ても『他の子と違う』聖が、皆に受け入れてもらえるのは、至難の業と思われ、私は次第に、長いトンネルの中に取り残されたみたいな絶望感にとらわれ始めた。

そんなある日、悩み深い私の様子を見かねたのか、フランクがふと漏らした一言が、その後の流れを大きく変える節目となった。

「セイには、インターナショナルスクールが合うんじゃないかな」

インターナショナルスクール？

予想もしなかった選択肢が、福音のように私の頭に響き、暗闇に一条の光が射すのを感じた。

フランクの意見は、こうだった。

「セイは、日本語より英語のほうが上手だし、インターナショナルスクールは個性を尊重する教育方針なので、より正当に評価してもらえるだろう。このまま日本の学校にいると、セイは、留学するまでに、劣等感のかたまりになってつぶれちゃうよ」

それからは、ひたすら聖に合う学校を求めて、日本国内のインターナショナルスクールを視野に入れた、新たな学校行脚が始まったのである。

二章　学校行脚

Kプリスクール開校す

日本にあるインターナショナルスクールは、日本国内に住む外国人の子供を対象にした学校であって、授業は主に英語で進められる。

インターナショナルスクールに関して、いかなる知識も情報も持ち合わせなかった私たちは、すぐに徹底的に調査して、海外居住歴のない日本国籍の生徒の入学を認める学校は、どうやらとても少ないことがわかった。

その狭き門を首尾よくくぐる対策としては、インターナショナルスクールの予備校とも塾ともいえる、特定のプリスクールに在籍して出願するほうが、有利に運ぶらしいことも突き止めた。

それらのプリスクールは、どこも我が家からは遠い距離にあった。私たちは聖のために、通学圏内への転居も辞さない構えで、付近の不動産屋を巡ったりして検討したのだが、引っ越しの大変さを思うと、溜め息ばかりが出てなかなか実行に踏み切れないまま、ズルズルと月日が過ぎていく。

ところがその矢先、夫が、何げなく目を走らせていた新聞のチラシのたばから、近所に新

しく開校するKプリスクールの生徒募集の広告を見つけた。

「やったぞ！　ここなら、引っ越さなくてもうちから通える」と、歓声を上げる夫。聖は、運には見放されていなかったのだ。

私たちは早速、Kプリスクールに出かけて、その場で入学を決め、前日までお世話になった優しいY先生に心を残しつつ、S幼稚園の退園手続きを済ませたのである。

こうして、二〇〇〇年一月、聖は四歳で、Kプリスクールの生徒第一号として、フランクと同じオーストラリア人の女性教師メリッサ先生のもとで、英語による教育を受けることになった。柚もまた、毎日T幼稚園の帰途にKプリスクールに立ち寄り、私の仕事が終わる夜八時までの約束で、聖と一緒に、英語でのプログラムに参加させてもらえることになった。

聖は、Kプリスクールで、まさしく水を得た魚のごとく変身した。

フランクの言葉どおり、メリッサ先生も他の先生がたも、個性を尊重し、長所を見つけて伸ばしてくださる教育方針であり、「他の子と違う」からと言って排除するような雰囲気は、微塵もなかった。聖は、英語が自由に使える嬉しさからか口数が増えて、言語能力のみならず、思考力や判断力などが明らかに向上した。カリキュラムを積極的にこなして、いつしかクラスのリーダー役の存在と評されるほどになった。

柚のほうも、Kプリスクールで過ごす英語浸けの放課後を苦にするでもなく、メリッサ先

生を慕って楽しそうに通い、どんどん語学力を磨いていった。

そのころ、T幼稚園の年長組に進級した柚のクラスでは、母親たちの関心はもっぱら、秋に迫った小学校のお受験に向けられていた。附属幼稚園とはいえ、系列の小学校に進学するにも入試があるので、父母会は、難易度の高いワークブックや模擬テストの話題で過熱する一方だった。そんな空気に馴染みきれない私は、いっそのこと、柚もインターナショナルスクールを受けさせてみようと思い立った。

神戸のサマースクール

その年の夏、私たちは柚と聖を、神戸のとあるインターナショナルスクールのサマースクールに参加させることにした。

サマースクールは、九月から始まる新学年の入学選考を兼ねていて、本来、日本の普通の幼稚園児である柚には受講資格はないのだが、Kプリスクールのカナダ人の校長先生が在籍証明と推薦状を書いてくださったお蔭で、ふたりの出願書類は無事に受理され、私はホッと胸を撫でおろした。インターナショナルスクールの入試においては、出願書類が受理される

かどうかが、既に重要な第一関門なのだ。

猛暑の中、神戸のサマースクールは、四週間の全日程がつつがなく過ぎた。いよいよ選考結果が言い渡される日となり、夫と私は校長室に呼ばれた。実は、この時点で私たちは、聖については、かなりの確率で合格を勝ち取ることができただろうと見込んでいた。柚の方は、五分五分の手応えかと思われた。

しかし、現実は、そんな甘い期待をこなごなに打ち砕くものだった。

アイリーンという名のイギリス人女性校長は、きっぱりした口調で、厳かに話しはじめた。

「まずユズですが、彼女は全然ダメ、対象外です。何故ならば、インターナショナルスクールとは、基本的に、第一言語が英語である外国人の子供のための学校だからです。ユズは、少々英語がしゃべれるとしてもネイティブスピーカーの比ではないし、とっさのときには日本語が優位になる。例えば、ドアに足をぶつけたとします。彼女は『アウチ！』ではなく『痛い！』と叫ぶでしょう？これでは、入学資格はありません。インターナショナルスクールは、『アウチ！』と言える生徒が欲しいのです。日本語を話す日本国籍の子供を教育するのは、私どもの役割ではありません。ユズは、日本の学校に行くべきです」

（ああ、やっぱり柚はダメだったか。）

私たちは、残る聖の合否に、一縷（いちる）の望みを賭けた。

「次にセイですが、英語力の面では、彼女はユズよりずっと問題が少ない。学年も小さいし、インターナショナルスクールの生徒として、何とか入学できるレベルかもしれません」

（やったぁ！）

早合点した私の心の内を見透かすかのように、校長先生は、やや険しい顔つきで言葉を続ける。私の脳裏に、一抹の不安がよぎった。

「ところで私は、セイに接してみて、とても奇妙だと感じたことがあります。どうして彼女は、日本語を話す日本人の家庭に育ちながら、ほとんど日本語をしゃべらないのでしょう。お母さん、セイは生まれたとき、未熟児ではありませんでしたか？」

私はドキリとして返答に窮した。校長先生は、かまわずに続ける。

「私どもは、セイを受け入れるという前提で、サマースクールの期間中、何回も真剣に話し合って検討を重ねました。その段階で、彼女のクラス担任のキャシー先生から、セイがＬＤではないかと心配する声が上がりました。もし実際にＬＤだとすれば、マンツーマンか、それに準ずる少人数での授業形態が望ましく、そういうシステムを持たないこの学校に入れば、その歳月の分だけ、セイにとっては遠回りになると懸念される。どうしたらセイのために一番いいかと考えるならば、彼女の能力を最大限に引き出すようなノウハウを備えた学校を、今すぐ他でさがすべきです。でもその前に、ご両親が急いでしなくてはならないのは、セイを

専門医に診せて、ＬＤかどうかを医学的に判定してもらうことですね」

（聖が……ＬＤですって？）

呆然として声も出なくなった私は、夫に肩を抱きかかえられて、校長室をあとにした。

途方に暮れて

ＬＤというのは、ラーニングディスアビリティーズの略語で、日本では『学習障害』と訳されている。知能は正常であるにもかかわらず、文字の読み書きはできても文脈としてとらえにくいとか、計算は間違えないのに文章題になると意味がわからないとか、ある特定の分野においてのみ、学習困難を呈する状態を総称する呼び名である。ＬＤ児は、マンツーマンで手間をかけて教えれば、困難な課題も、大半のケースで克服することが可能であるとされている。それゆえ、いかに劣等感を感じさせずに学業を習得させるかという点で、精神面のフォローも含め、教育方法に工夫が必要となる。

ＬＤの発症には、何らかの原因による脳の微細損傷が関与しているのではないかと考えられているものの、病態は未だ、はっきりとは解明されていないらしい。

夫と私は、小児科は専門外だが、医学部での学生時代、ＬＤは未熟児で生まれた子供に多いと、確かに教わった記憶があった。

「聖ちゃん、ごめんね。ママのせいだ」私は、頭の中で大声で謝った。涙がどっとあふれた。

夫は、黙ってズボンのポケットに手をやり、青いハンカチを私に差し出した。

私たちは、灼熱の神戸のアスファルトの道を、無言のまま何十分も、あてどもなくフラフラと歩いた。またしても振り出しへ戻ってしまったけれども、今度ばかりはショックが大き過ぎて、体勢を立て直すための意欲すらわかず、私は途方に暮れていた。

ふと顔を上げると、三ノ宮の大型書店の前にきていた。

「とにかく資料を集めよう」

重い沈黙を破って、先に口を開いたのは、夫だった。

「君も僕も、本当はもうとっくの昔から、聖がＬＤかも知れないことは、わかっていたじゃないか。うすうす感じながらも、いや、そうじゃない、聖はＬＤなんかじゃないって、打ち消して打ち消して、今日まで問題を先送りにして逃げていたんだ。とうとう真正面から向き合わなくちゃいけなくなっただけなんだよ」

彼の言うとおりだと私は思った。私は、聖が普通の子供と違うことを、ずっと前から知っていたのに、見て見ぬふりをしていたのだ。それを他人からズバリと指摘されてしまい、余

計に狼狽したのである。

私たちは書店に入ると、教育ジャンルの書棚から、ＬＤ関係の本を手当たり次第に引っぱり出して、購入用のカゴに投げ込んだ。膨大な数の本を選び終えたとき、私の涙は乾き、頭は冷静さを取り戻していた。

氷解した謎

この日買ったたくさんの専門書を、私たちは数日かけて、むさぼるように読んだ。日ごろの聖の行動と照らし合わせて「なるほど」と頷く箇所はいくつかあったが、とりわけ興味深かったのは、言語に関する特徴的な所見についての記載だった。

これには諸説あって、例えば、ＬＤの子供にとっては、母音の数が少なくて限られた音だけで単語が構成される日本語のほうが、子音と母音の組み合わせで音のバリエーションが多様に変化する英語などの言語より、表現しやすい場合がある、と書かれている本もあれば、逆に、単語を並べる順序によって構文のパターンが決まっている英語などのほうが、文法形式が豊富な日本語よりも、理解しやすいことがある、としている本もある。もしかしたら聖は、

後者に当てはまるのかもしれない。

さらにＬＤ児では、それぞれの言語の持つ波長の区域と、処理を担当する脳の側(がわ)の相性が合うかどうかという要素も複雑に絡むらしく、聖がどうして英語はしゃべれるのに日本語は苦手なのか、長い間もやもやと心に引っ掛かっていた疑問が、すっきりと氷解する気がした。

それと同時に、神戸の校長先生がおっしゃった通り、一刻も早く、聖を連れて専門の医療機関を受診しなければならない、と痛感したのだった。

Y先生とK先生

偶然にも、それらの本の著者の中に、見覚えのあるお名前をみつけた。私の出身大学の大先輩で、かつて母校で小児科学の教鞭を執っておられたY先生である。

私は早速、同窓会のネットワークを利用して連絡先を調べ、あらかたの経緯を記した手紙を、Y先生宛てにしたためた。ほどなく先生から、すぐに聖を連れて来るようにと、ありがたいお返事を頂戴した。

こうして、神戸の町をさまよった日から二週間目に、東京のY先生の病院におうかがいす

ることになった。

上京に先駆けて施行された脳波、頭部CT、視機能、聴力などの検査で、聖はいずれも異常を認められず、当日のY先生の診断でも、聖の成長や発達の過程において、小児科学的には何ら問題はなかった旨の説明を聞いて、私たちは少し安堵した。

「聖ちゃんは、現段階ではLDとは言えないのじゃないかしら」と、Y先生は首をかしげておっしゃった。しかし続けて先生は、教育学的観点によるLDの概念は、医学的にとらえるのとは見解が異なるケースがあるとも話され、念のため、病院に隣接する発育相談所におられる教育心理学のK先生を紹介するので、訪ねてみてはどうかとすすめられた。

手厚い対応に深くお礼を申し上げて、診察室を辞去する際、Y先生は、「聖ちゃんはとても幸せね。たとえお子さんにLDの疑いがあっても、関西からこの病院まで、わざわざ駆けつけるご家庭は、そう多くはないですもの」と、ねぎらいの言葉をかけてくださった。私は、感謝の気持ちでいっぱいになりながらも、頭の中で「だって先生、聖がこんなふうに生まれたのは私のせいなんです」と、声にならない訴えを叫び、涙をこらえて部屋を出た。

泣いてばかりいられない

それ以後半年にわたり、夫が付き添って、聖は発育相談所のK先生の外来へ定期的に通った。そうして、先生がたの顔ぶれや毎回の検査の手順に慣れたタイミングを見計らって、判定試験が行なわれた。

その結果、聖は、記憶力や判断力、視覚による思考力などは、正常かむしろやや優れているレベルであったものの、言語による理解力だけが著しく劣っているという、予測していたとおりの診断が下された。試験が日本語でなされたことを差し引いても、私たちが真摯に受け止めなくてはならない、冷酷な事実だった。ＬＤという文字こそ判定報告書のどこにも書かれていなかったが、夫も私も、やっぱり聖はＬＤなのだと思い込み、この時点で覚悟を決めた。

「泣いてばかりいられない」

現状をはっきりつかめたことで、かえって私は前向きになれたように思う。

「こうなったら、とことん聖のＬＤに付き合ってやろうじゃないの」と、むらむらと闘志がわいたのだった。

お粗末な現状に背中を押されて

ところが、やる気満々の私の出鼻をくじく問題が立ちはだかった。私たちが知り得た範囲では、日本には、LD児を対象とする教育機関があまりにも少なく、内容も充実しているとは言い難いのだ。

K先生が、大阪府下で発達障害児の相談を扱う専門の窓口として紹介してくださった、O教育大学の某教授の研究室へも、予約のための電話を何回か入れたのだが、そのつど「ただいま予約が二ヶ月待ちでして、順番がまいりましたらこちらからご連絡します」と、同じ返事を聞かされるばかり。しかも、一応連絡先を問われるので当方の電話番号を申し上げるものの、二ヶ月どころか一年以上待っても（この原稿を書いている現時点においてさえも）一向に電話はかかってこない。

お粗末な国内事情に業を煮やして、海外にまで範囲を広げて調べたところ、欧米では、LDという概念自体が、日本よりはるかに社会に浸透していて、専門教育を行う学校が数多く存在することが判明した。また、特にLDスクールに限らずとも、一般的にどの学校も、一

クラスあたりの生徒の定員が日本より少ないため、一人一人の能力に則した教育内容が期待できるのではないかと思われた。

それを受けて私たちは、柚と聖を留学させる時期について、検討し直すことにした。

それまでは漠然と、柚が十歳になるころを目標にしていたのだが、LD児の聖にとっては、幼児期から小学校低学年くらいまでを、どこの学校でどんな教育を受けて過ごすかが、その後の人格形成や知的成長を大きく左右する分かれ目となることを考慮すれば、いつまでも日本国内にとどまって手をこまねいているわけにはいかなかった。

「聖が小学校に入学する前に、海外へ出してしまおう」

夫と私は、この方針でたちまち一致し、決意を新たにしたのだった。

柚に起きた異変

一方で、柚にも異変が起こっていた。

インターナショナルスクールへの入学の望みが断たれてしまったあと、私はさすがに心配になり、秋に迫った小学校の入試に備えて、にわかに柚を塾へ通わせた。その甲斐あってか、

無事に合格してホッとしたのも束の間、事態は想像もしていなかった方向へと転がってしまう。

この短期間の塾通いが、夫の中に眠っていた『お受験熱』を一気に呼び覚ましたのだ。彼自身があれほど忌み嫌っていた「意味のない詰め込み式受験勉強」のはずなのに、あろうことか、彼は娘の『お受験』にのめり込んだ。

小学校の入試が済んでも、夫は柚に、塾をやめることを許さなかった。やめれば、他の皆と差がついてしまう、という焦りがあるらしかった。

幼稚園児でありながら、小学校二〜三年生の算数や国語の問題を当たり前のように課され、毎週反復されるテストはその場で順位が発表されて、否が応でも煽られ駆り立てられる。小さな子供のうちから、そんな過酷な世界に身を投じることを、感覚的に思い出してしまった夫は、柚の世代にも競争社会が存在するのを知った以上、参戦しないではいられない、しかも、勝たなければならないと言い、私の制止も聞き入れない。

柚のほうも、大好きなパパの期待に背くまいとしてよく頑張り、面白いほど点数が伸びていく。すると夫は、さらに上の順位を狙えと柚に要求し、少しでも解答を誤ろうものなら、人が変わったみたいにすごい剣幕で柚を叱責する……。

夫が子供の面倒を見てくれる時間が長い日常が、完全に裏目に出て、『お受験熱』がどん

どんエスカレートする中で、二〇〇一年四月、T小学校に入学した柚は、急速に笑顔を失い、頭痛や腹痛や嘔吐など、身体の不調を訴えるまでになっていた。

船場のおばさんの予言

「どうにかしなければ」と悶々としていたある日、思わぬ転機が訪れる。

たまたま夫の都合がつかず、私が柚を連れて、塾のある船場に出かけたときのことだ。

柚がテストを受けている間、ひとりで時間つぶしをしていた私は、何の気なしに一件の占い屋に目を留め、吸い寄せられるように入っていった。中には、五十代とおぼしき易者のおばさんがいて、私以外にお客は誰もいなかった。

「あのぅ、子供の学校についての相談なのですけれど……」

日頃は占いなど、滅多に信じない私なのに、そこでは不思議に、いきなり核心が口を突いて出た。

おばさんは、簡潔に子供たちの名前と生年月日だけを尋ねると、しばしうつむいたまま、何やらカビくさそうな古い本のページを繰ったり、数本たばねた細い棒をカチャカチャ鳴ら

したりしてから、おもむろに顔を上げ、私に向かって自信たっぷりに宣告した。

「下のお嬢ちゃんは、なるべく早く親許から離してしまいなさい。彼女は、親にとっては何か心配事がある人なので、親は、そばにいるとつい手助けする。でも本来この人は、親の庇護の及ばない環境のほうが、力を存分に発揮します。自分で道を切り開ける人ですからね」

「えっ？」私は驚いて問い返した。

「親許から離すって、それは、外国へ、という意味に取ってもよろしいのでしょうか？　実は今、留学させる方向で模索中なのですが、まだ五歳ですから不安が大きいのです」

「外国、大いに結構。この人は五歳でも大丈夫。直ちに行かせなさい」と、力強く答えるおばさん。予言はさらに続く。

「上のお嬢ちゃんは、親がガミガミ干渉し過ぎで、ストレスが溜まって口内炎になっている。この人も、一緒に出したほうがいい。この姉妹は、二人だけでおうちを離れても、立派にやりますよ」

「うーん、口内炎ねぇ……」

半信半疑で店をあとにした私が、その足で柚を迎えに行くと、テスト会場から出てきた柚は、私の姿を見つけて駆け寄るなり、「お口の中が痛いの」と言う。ハッとしてのぞいてみると、そこには見事に、重症の口内炎ができていたのだった。

前途多難！　幼稚園児の寄宿舎留学

占い師のおばさんにプッシュされたせいだけではなかったが、この日を境に、私の気持ちは吹っ切れた。いよいよ現実に、娘たちを海外のボーディングスクールに送り出すことを前提に動き始めたのだ。

夫も、おばさんの話が妙に真実味を帯びていたからか、自らの過熱ぶりを反省して、柚に塾をやめさせた。まもなく柚は、生来の明るさと健康を取り戻した。

夫と私は、夏休みまでにふたりの留学先の学校を決定して、まずはサマースクールに参加させ、九月から本格的にやれるかどうか、具合を見ることにした。

当初の計画より早いスタートとなるため、それまでに目星を付けていた学校で受け入れている年齢に該当せず、私たちは再び一から学校探しを開始したのだが、これが意外に難航した。

ＬＤ教育に主眼を置けば、アメリカのほうが学校の数が豊富だけれども、アメリカ人社会では、独立心旺盛なイメージとは裏腹に、小学生くらいの年齢で寄宿舎に入れたりするのは、あまり一般的ではないらしい。ましてや、幼稚園児の聖が入学できるボーディングスクールなど、皆無だった。

聖は、日本語は苦手だが知能の面では問題なく、授業が英語で行われさえすれば理解力はそう悪くなかったので、小さい学年の間は必ずしもLDスクールでなくても大丈夫だろう、と私たちは考えることにした。そこで、とにかく少人数のクラス編成にまず最大の重点を置き、さらに加えて、通学生より寄宿生の割合が高く、予算の上でも折り合う範囲を条件に、アメリカに比べてボーディングスクールの歴史が古く層が厚いヨーロッパ方面に、ターゲットを絞った。

そうすることで、仮に将来LDスクールに入学する場合でも違和感なく溶け込めるだけの、言語的・文化的背景を築けるのではないか、と思ったからだ。どこへどう進むにしても、なるべく壁を取り払っておいてやりたかった。

手始めに、大手の留学斡旋会社に問い合わせてみたが、二人の年齢を伝えた途端、担当者はただ驚くばかりで、「そんな小さい子供が入れるボーディングスクールなど聞いたことがない」と、すげなく断られてしまった。他の数社も同様のあしらいだった。

ならば、せめて経験者にお話をうかがいたいと願っても、幼稚園児の留学のうわさは、いくらアンテナを張り巡らせていても身近には聞かれず、私たちは次第に手詰まりとなっていったのである。

持つべきものは同級生の絆

ところが、突如すごい援軍が現れた。灯台下暗しとでも言おうか、私の大学時代の同級生たちである。

ちょうどその年のクラス会の席で、有志が集まって、同級生全員を結んでメールをやり取りするメーリングリスト（ＭＬ）を立ち上げてくれたことが、私にとっては期せずして大変有益な情報源となる。

この同窓会ＭＬを通じて、柚と聖の留学に関する助言を求めたところ、いくつかの反響メールが寄せられた。

私の母校というのは少々特殊で、医学部単科の女子大であった。すなわち、かつての同級生は、数人の休職者を除いてほぼ全員が、現役の女医である。みんな、フルタイムで忙しく働いているため、時間的にも体力的にも、子供の受験などに付き合えるだけの余裕がないのは、いずこも同じ事情だからか、留学の話題に関心のある人も多く、どのメールも貴重な資料が満載されていた。

その中に、柚と聖の年齢でも入れるスイスのボーディングスクールをすすめてくださった

人がいた。

自身もスイスへの留学経験のある彼女によれば、伝統的にボーディングスクールが根付いているスイスでも、中学校とか高校までを擁する大規模なところは、むしろ幼児や小学生の扱いに慣れていなかったり手がかかるのを嫌い、寄宿舎はあっても小さい学年の子供は入舎できず、近隣在住の通学生しか受け入れてくれないケースがあるそうだ。その点、幼稚園と小学校だけのボーディングスクールなら、柚や聖と同年代の寄宿生ばかりが相手で、先生やスタッフもお世話の仕方を心得ておられるでしょう、との根拠で、四歳から十三歳までの児童が対象の三校を、わざわざリストアップして教えてくれたのである。

これらの学校は、れっきとしたボーディングスクールでありながら規模が小さく、スイスのボーディングスクール団体には所属していない【※注　当時】ので、夫も私もすっかり見落としていて存在すら知らなかった。それだけに、彼女の朗報メールは、我が家に春をもたらしたかのようだった。

私はすぐさまこの三校に、学校案内の送付を希望する内容のメールを書き、一週間ほどで相次いで届いたパンフレットを念入りに読み比べたり、直接国際電話をかけて詳細を確認したりした。そして、私どもの求める条件に最も近かったガレンという学校のサマースクールに、柚と聖を参加させることにしたのである。

サマースクールは冒険の旅のリハーサル

サマースクールは、七月から八月にかけて六週間の日程であった。

目指すガレンは、ジュネーヴから百キロ以上離れたアルプスの山中にあって、私たちは、トーマスクックと名付けられた、馴染みのないフランス語圏の鉄道の時刻表と格闘しながら、国鉄や登山電車を乗り継いで、現地へと向かった。

五歳と六歳の子供にとっては、日本とスイスの距離など、とうてい理解できないみたいで、飛行機でパリを経由して十五時間もかけてジュネーヴに着いたのに、ジュネーヴの鉄道駅のホームでは、五分もすれば乗り慣れた奈良行きの私鉄電車が来るものと信じて、ちょこんと座って待っている。列車に乗ってからも、「ねえ、ママ。次はどこで乗り換えだっけ?」

「ローザンヌ」

「ふうん。あのね、ローザンヌの次はどこで乗り換えか、柚ちゃん知ってるよ。梅田でしょ?」

という程度の認識らしかった。それがかえって、悲壮感を産まずに済んでいたと思う。娘たちの屈託のなさに、夫も私もどれだけ救われたことか!

さて、ジュネーヴからたっぷり二時間で到着したガレンは、アルプスの中腹、標高千二百メー

トルのあたりに位置していた。

広い敷地内は緑豊かで、いくつも点在するシャレー（山小屋式の建物）は花々をかわいらしく飾った窓に彩られている。いかにもスイスらしい外観の学校である。その優しいたたずまいは、私たちの緊張をたちまちほぐしてくれた。

聖が、私の顔を見上げて、念を押すように尋ねてきた。

「ママ、ここは聖の学校？」

「そうよ」

「私、柚ちゃんと同じ学校に行くの？」

「そうだよ、聖」と、今度は夫が答えた。

「わーい、わーい」聖はその場で、嬉しそうにぴょんぴょん飛び跳ねた。

スイスのお父さんお母さん

百戦錬磨の学校行脚のお蔭で、夫と私は、その学校の校風というものを、第一印象で大体かぎ分けられるようになっていたのだが、ガレンからは、清々しく活気のある好ましい雰囲

気が感じ取れた。

校長のメアン先生ご夫妻の温かいお人柄にも魅了された。スイスでのお父さんお母さん役をつとめてもらうには、十分な方がたであろうと得心した。

柚と聖は、背の高いこのご夫妻にぎゅっと抱きしめられ軽くキスされて、親しく迎えられた。ややはにかんだ表情で、順に挨拶と自己紹介を述べる姿を眺めながら、お別れのときが着実にすぐそばまで近付いたことを、私は予感した。

二人は九月から、親の手の届かないそれぞれの世界へ、きっと旅立つのだろう。自分の翼で、力強く羽ばたいて。われわれ両親の出番は、このサマースクールで最後なのだと私は思った。

「パパ、ママ、行って来ます」

にこやかに手を振るや、柚と聖はくるりと背を向け、案内された教室へ、あっけないほどあっさりと消えたのだった。教室の窓からは真正面に、夕日に染まるアルプスの名峰が垣間見え、次の瞬間、バタンと音を立てて無情のドアが閉まった。

「さようなら。元気でね」と、私は小さくつぶやいた。

夫が、目の前のドアをなかば睨みつけたまま、絞り出すような口調で言った。

「行ってしまった……。僕はこの光景を、一生忘れられないだろうな。死ぬ間際に頭に浮かぶ走馬灯に、絶対出てくるよ」

柚と聖の弱気

ガレンでは土日のみ、家族から子供に電話することが許されている。日本へ戻った週末に、娘たちに一回目の国際電話をかけてみた。

機嫌よくやっているだろうという予想に反して、柚は、「パパとママに会いたくて、毎晩涙が出るの」と心細い声で弱音を吐く。聖は、夫と私がまだジュネーヴに滞在していると勘違いしたらしく、「パパとママはどのホテルにいるの？　聖もそこで一緒に泊まりたい」と泣きべそをかいた。

ただでさえ、二人のいない寂しさに堪え難い日々を送っていた私は、それを聞くと、すぐにスイスに飛んで娘たちを連れ戻したい衝動にかられ、居ても立ってもいられなくなった。電話を切るなり、「パパ、今からスイスにお迎えに行こう！」と号令をかけて荷造りを開始した私を、夫はいさめるように言った。

「あと一週間待とうよ。僕は、柚も聖も、必ずこの試練を乗り越えてくれると信じてる。子供が頑張っているのに、親が感情に流されて負けちゃダメだよ」

その顔に苦悩の色が浮かんでいたので、私はハッとした。

そうだった。彼も同じつらさに耐えているのだ。そう思い至った私は、もうしばらく我慢して静観しようと決めた。

そのとき、ふと気付いたことがあった。十代のころ、初めてアメリカに渡る私を、父と母は、励ましの言葉とともに晴れ晴れと送り出してくれたけれど、実は人知れず、このような空虚感や不安の連続だったのではないだろうか。

私は、両親に感謝せずにはいられなかった。かえりみて、当時の自分の体験に照らし合わせて考えると、そんなに深刻なホームシックにもならずに毎日を意欲的に過ごしていた様子が、古い記憶の中から蘇り、柚と聖の弱気も、案外、簡単に解決するのではないかと楽観することができた。

子供の内なる不思議な力

果たして、翌週から事態は一気に好転したのだった。

まったく、子供の順応の速さときたら、目を見張るものがある。たった一週間で、聖はともかく、柚までが流暢（りゅうちょう）な英語で電話に出たのには面喰らってしまった。二人とも、前回とは

ガラリと変わって生き生きした声で、お友達との寄宿舎生活や授業中の出来事など、矢継ぎ早に話してくれる。

良かった！　とても楽しそうだ。ガレンにすっかり馴染んでみんなに溶け込んでいるのがありありと伝わって、拍子抜けしたくらいである。

「なぁんだ。心配して損しちゃった」

夫と私は口々に言い、顔を見合わせて苦笑した。

それからさらに二週間ほど経ったある日、校長先生から、柚と聖がフランス語をしゃべりはじめたことを知らせるこんなメールが届いた。

「日本人留学生はたいていシングルワーズ（単語の羅列）の語学力だと言われるのに、ユズとセイのフランス語はすごい勢いで進歩を遂げて驚いている。彼女たちは、学業面でもよく健闘し、友人関係も良好である。この調子なら、九月から問題なくこちらで過ごせるでしょう」

どうぞ引き続きガレンにいらしてください、とも書き添えてあるのを、私は感無量のうちに読んだ。

「どうやら聖は、フランス語とは相性が悪くないみたいだね」夫がニヤリとした。

実際、柚と聖は、英語とフランス語のみならず、ロシア語やスペイン語、ドイツ語など、さまざまな言語を母国語とする子供らとも、うまくコミュニケーションが取れているらしく、

数人でキャーキャーと談笑したりじゃれ合ったりしながら、にぎやかに電話に出てくるまでになっていた。理不尽な人種差別に対しては、二人一丸となって立ち向かい撃退した挙げ句、やがてそのいじめっ子とも互いに親交を深め、着々と友情を育んでいるそうである。

「親は完全に置いてきぼりね」と愚痴をこぼしつつも、じわじわと嬉しさが込み上げた。五歳と六歳の小さな子供にも、自ら道を切り開くだけの知恵と勇気がちゃんと備わっているのだということを、私は娘たちから教えられたような気がする。

子供は、自分で勝手に親を越えて伸びていく、自分の内なる素晴らしい力で。親はほんの少し、その方向付けを手助けしてやりさえすればよいのだ。私はつくづくそう悟った。

マルチリンガルの魔法？

八月半ば、待ちに待ったお迎えの日がやってきた。

ガレンで、六週間ぶりに会う柚と聖は、日焼けして自信にあふれた満面の笑顔で、夫と私に飛びついた。

泣き笑いで受け止めたそのからだはズシリと重く、二人が大きく成長したのを私は実感し

た。

聖は、その後もずっと、夫と私がジュネーヴに滞在していると信じていたらしく、目をくりくりさせて興味ありげに言った。

「パパとママは、ジュネーヴの学校に行ってたの？　面白かった？　でもガレンにすればよかったのに。聖はガレンですごく楽しかったよ」

「そうね、ガレンにすればよかったわ」私は聖を抱きしめた。

姉妹での日常会話は、英語とフランス語が主流になり、さらに、親には内緒の話をこっそりするときは片言のロシア語を使う、という芸当まで覚えて帰ってきた。

もっと驚いたことには、ガレンで日本語を話す機会などなかったはずなのに、何故か、聖の日本語の能力が著明に向上していたのである。サマースクールの間に、彼女の日本語は、それまでの遅れを全部取り戻したかと思われるほど劇的に上達して、普通の五歳児と比べても遜色ない程度になっていた。この不思議な魔法は、素人考えだが、一国内で多言語が混在する、スイスというマルチリンガルの環境が、聖の言語中枢に刺激を及ぼした賜物であろうかと推測している。

小さな留学生の旅立ち

いったん日本に帰国して短くなった残りの夏休みを一緒に過ごしてから、娘たちの気持ちを確認したところ、案の定、二人とも、「スイスの学校に行きたい」と希望した。

柚が、私の顔をまっすぐにみつめて言った。

「ママは、サマースクールが終わってガレンにお迎えに来てくれたとき、柚を見て泣いたでしょう？　柚ね、ママの涙を忘れないで覚えておけば、ママと離れて寂しくても、スイスでまた頑張れると思うの」

傍らで聞いていた聖が、にっこり笑って小指を差し出した。

「聖、スイスで一生懸命お勉強しまぁす。パパとママにお約束ね、指切りげんまん」

こうして柚と聖は、二〇〇一年九月、満を持して、遠く長い冒険の旅に出発することになった。

東京に住む夫の両親が、日本の学校より半年早くスイスで一年生になる聖のためにと、季節外れのその時期に、あちこちのデパートをさがしまわって買ってくれた、赤いランドセル。これが、何よりのはなむけだった。

聖は大はしゃぎで、真新しいランドセルを誇らしげに背負って、エールフランス機に乗り込んだ。柚も、つい半年前にT小学校に入学したときのピンクのランドセル姿で、意気揚々(いきようよう)として続いた。

新学期の今回、夫と私はガレンまで付き添わず、ジュネーヴ空港で待機する先生に娘たちを引き渡すことにしていた。約束の時間に集合場所に着くと、柚と聖は、仲良しのクラスメイトや先生を見つけて、とても嬉しそうに大きな身ぶりで再会を喜び合い、視線で追う私たちに、おどけた顔で投げキスを一つずつ寄越してから、仲間とともに迎えの車にちょんと収まった。私は、世界レベルでとらえても小さな留学生である柚と聖の、頼もしい旅立ちの一部始終を、しっかりと脳裏に焼き付けたくて、まばたきする瞬間すら惜しんで両眼を見開いていた。

車はすぐさま発進した。あっけなく走り去り、夫と私だけが、空港前の道路に取り残された。

「柚ちゃん！　聖ちゃん！　今度こそ本当に行っちゃったんだ……」

そう思った途端、不意に私は、声を上げて泣き出してしまった。心に張り詰めていた糸がプツンと切れたのか、あとからあとから涙が止めどなく流れた。

夫が、青色のハンカチを手渡してくれた。

「あっ」そのハンカチに見覚えがあった。一年前、神戸の街を茫然自失でさまよい歩いた日

に涙を拭いたのも、このハンカチだった。

あれから私たちは、険しい道程をマラソンランナーみたいに無我夢中で突っ走り、ようやく一つのゴールに辿り着いたのだ……。

しばし私は、青いハンカチを感慨深く眺めてから、夫にうながされて、日本に帰国する便が出発するゲートへと急いだ。

三章　寄宿舎学校ラ・ガレン

初日の出来事

柚と聖のスイスの学校ラ・ガレンは、四歳から十三歳までの子供を対象とした定員八十名ほどの、こぢんまりしたインターナショナルボーディングスクールである。

ヨーロッパ各国やアフリカ、遠くはオーストラリアやアメリカなどから集まった生徒たちは、大半が寄宿舎に入って一緒に暮らしている。アジア圏では、他にインド人の兄妹がいるだけで、ファーイースト（極東）の日本からの、この年齢での留学生は、我が家の娘たちが初めてということだった。フランス人やイギリス人と並んで、多勢を占めるのはロシア人、スペイン人である。

寄宿舎は四人部屋で、柚と聖は景色の良い三階の一室をあてがわれた。大きく開いた窓からは、神々しいまでにそびえ立つアルプスの山々を間近に見渡せるけれども、それ以外には何もない、のどかな田舎である。ルームメイトはロシア人のリザとベラという、柚と聖と同じ年回りの姉妹で、互いにすぐ仲良くなれたようだ。入学時はたまたま、四歳児の生徒が誰もいなかったので、五歳の聖とベラのいるこの部屋が、女の子の寄宿舎では最年少ルームとなった。

柚と聖は、部屋の中に、赤ん坊のころから肌身離さず大切にしていた宝物を、それぞれ持ち込んだ。

柚のそれは、うさぎのアップリケのついたタオルケットである。昔はきれいなピンク色で大判だったのが、見る影もなく小さく擦り切れ、ハンカチほどの端ぎれの中にうさぎの片目だけが残って、薄汚れた灰色のボロ布と化している。柚はこれを、タオルがなまった赤ちゃん言葉のまま、「タージュ」と呼んでいた。

聖のは、かつて私が、真冬の夜間に起き出して彼女に授乳する際に、防寒のために着ていたキルティングのガウンで、いつしか彼女は、これを丸めて抱っこしないと眠りにつけなくなっていた。やはり煮しめたみたいに退色し、ほころびて破れてはいたが、聖もまた、これを自分の「タージュ」と呼び、どこへ行くにもズルズルと引きずって持ち歩いていた。

二つのタージュは、柚と聖にとって、日本のパパやママの匂いのする唯一のお守りとして、両親のいない寂しさを埋めてくれていたに違いない。

リザとベラは、タージュを一目見るなり、「うわぁ、ばっちい！」と拒絶反応を示したものの、あちらも負けずに、壊れかけのすすけた人形や、熊のぬいぐるみのつぶれたのを、宝物と称して持参していたため、「おあいこだね」と四人で笑って、めでたく共存することに落ち着いた。

ところが、初日から聖のタージュが行方不明になったのである。

柚と聖の部屋の世話係のパウラが、古びた上っ張りにしか見えない聖のタージュを、きれいに洗濯してクローゼットの奥深く片付けてしまったらしかった。柚と聖は必死で、大事なタージュが紛失したことをパウラに訴えるが、パウラには、娘たちの言うタージュなるものが、何を指しているかが、さっぱりわからない。ようやく探し当てるまでの四日間、聖はタージュのない心細い夜を、他の三人に慰められながらも、しくしく泣き続けて過ごしたのだった。

パウラは小さなお母さん

パウラは、二十代のスペイン系スイス人の小柄な女性で、スペイン語の他、英語、フランス語、イタリア語を話すテトラリンガルである。

余談だが、スイスの国内では、地方によって、ドイツ語・フランス語・イタリア語、それに少数派のロマンシュ語が使われていて、公共施設の案内や駅のアナウンスなどは、先の二～三種類の言語に英語を加えて表示されるのが普通である。ゆえに、この環境で生まれ育つスイス人にとっては、何ヶ国語かを使い分けることは、決して特殊なトレーニングに基づく突出した技能ではない。多言語は、日常的な必然性からごく当たり前に体得する、生活に密

着したツールに過ぎないのだ。何ともうらやましい限りである。

ガレンには、授業を担当する教師以外に、寄宿舎で生徒の面倒を見てくれる、パウラのような世話係の大人が、何人か住み込みで勤務している。通常は、一人の世話係がいくつかの部屋を兼任で受け持つのだが、取り分け小さい年齢の子供が集められた部屋に関してだけは、各一人ずつ専任でつく慣わしになっており、柚と聖の部屋にはパウラが配属されていた。

パウラの主な仕事は、毎朝女の子たちの長い髪をていねいにブラシでとかして編み込んだり、その日のスケジュールに合わせて着るものを用意して身繕いを手伝ったり、シャワータイムに身体のすみずみまで清潔に洗い上げてくれたり、ホームシックで眠れない子がいれば抱きしめて添い寝したりすることである。

寄宿舎ではいつもそばにいてかいがいしく親身に接するパウラは、柚と聖にとって、時には年の離れた姉であり、若い母親のような存在であるのだった。それでいて、ただ優しいばかりでない。例えば、ベッドメーキングの方法や食事中のマナーなどを躾(しつ)ける際には、一変して厳しい顔つきで甘えを許さず叱る彼女は、柚と聖の生活全般における、最も身近で頼りになる先生でもあった。

パウラの愛情深い指導のおかげで、娘たちは、スイス流の暮らし方を、短期間でスムーズに覚えていった。

嬉しい予感

ガレンでの一日の学校生活は、実に規則正しいものだ。

午前八時までに起きて朝食を摂り、九時から昼食をはさんで午後二時までクラスルームで授業を受ける。それから四時まではスポーツや課外レッスン、その後シャワータイムと夕食が済むと、ホームワークをしたりビデオを観たりして、夜九時には就寝する。

学校のカリキュラムは、ブリティッシュセクション（イギリス方式）とフレンチセクション（フランス方式）の二者から選択でき、入学時に希望したほうのクラスに振り分けられる。両コースとも、パヴィヨンと呼ばれる就学前の子供を対象とした学年から八年生までの九段階の構成となっているのだが、実際には、幼少から入学する児童はもともと少ないことや、六年生とか七年生ともなると大半の生徒は欧米の上級学校に進学してしまうことから、在校生の年齢分布は一様ではなく、十歳前後が最も多くなる傾向がある。

柚と聖は、ブリティッシュセクションの二年生と一年生になった。同級生の人数は、七人と四人で、まるで寺子屋みたいな小さな規模だ。少人数という条件に徹底的にこだわって学校さがしをした成果があったというものである。

先生の目が行き届く中で、伸び伸びと存分に勉強することができるだろう。
そんな嬉しい予感に包まれて、娘たちの学校生活はスタートしたのだった。

メアン一家

ガレンの経営者と学長を兼ねるメアン夫妻には、七人もの子供がいる。一番上のクリストフは、既に大学を卒業してガレンの仕事を手伝っているが、末っ子のバジャマンはまだ十歳で、フレンチセクションに在学中だ。

柚と聖によれば、ムッシュ・メアンは、常に厳格なお父さん、マダム・メアンは、ひたすら優しいお母さんである。

メアン家という仲の良い家族が軸になっているせいか、とてもアットホームな雰囲気のガレンでは、あたかも寄宿生全員が一組の兄弟姉妹みたいに親密だ。そこに、先生がたやパウラなどが加わって、ガレンは巨大な一家を成しているかのように、私には感じられた。

それはまさしく、私が娘たちのために求めていた、理想的な土壌だと思われた。子供が育つ過程においては、できるだけ多くの大人や異年齢の仲間が関わったほうが良い、というのが、

かねてよりの私の持論である。

私自身、自分の両親や三人の姉妹以外に、友人、ガールスカウトのリーダー、家庭教師や学校の先生、アメリカのホームステイ先のご夫妻など、赤の他人ではあるけれども心の支えとなってくれた人びとに助けられながら、たくさんの教えを学び、さまざまな窮地を乗り越えて大きくなった。そんな経験から、子供には、例えば、親に叱られて疎外感に打ちひしがれた時に理屈抜きで味方となって自分を受け止めてくれたり、親兄弟とは違う立場から物事の価値観や判断基準を示してくれたりする人が、身近に複数いたほうが、何か困難にぶち当たっても絶望することなく打開する能力が養われるものだと、私は考えている。

柚と聖にも、そういった環境の中で強く育ってもらいたいと願っているので、ガレンはまさに、うってつけの土壌であったと思えるのだ。

メアン一家の一員に迎えられた柚と聖が、その土壌をどう生かして根を張り芽を出し、どんな花を咲かせるのかは、これから彼女たちに問われる課題であり、夫も私も、興味深くその行く末を見守るのみである。

寂しさとの闘い

かくして私ども親子は、日本とスイスで離ればなれに暮らすことになった。

柚と聖を、これまで情熱を持って育て上げてくれたお手伝いさんは、転居と高齢を理由に、我が家での職を辞して去っていった。思い入れが強かった分、彼女はやや気落ちして見えた。しかし別れ際に、彼女は言ってくれた。

「私が初めてここに来た日、柚ちゃんは生後一ヶ月にもならない赤ちゃんでした。そのころから、この子をいずれ海外の学校に出すのだとおっしゃっていたのを、私は憶えています。当時は、無謀なことみたいに感じて驚いたけれど、ずっとそばで見ていて、ここまでよく準備をして、やっと実現されて、本当に良かったと思います」

フランクは、英語以外にフランス語・ドイツ語・ハンガリー語の心得もあるので、その後も、夫と私の語学アドバイザー兼相談相手として、時々は我が家に通い、ガレンに提出する書類の記載や連絡用メールの原稿作成などを手伝ってくれたりしている。

新しい環境に、日ごとにどんどん馴染んで順応していく娘たちとは裏腹に、置いてきぼりにされた親にとっては、大いなる寂しさとの戦いが始まるわけだが、その試練は予想以上につらく、ちょっとやそっとでは克服し難いものだ。

低年齢での留学について、私があえてデメリットを挙げるとすれば、この点に尽きる。すなわち、かわいい盛りの我が子の姿を目の当たりにできなくなることで、両親の側が寂しさに耐えられるか。これが、最大にして最難関の懸念材料だと思う。私など未だに、同じ年ごろの子供を見かけるたびに、涙がじわっと滲んでくるのだから。

土曜の夜が待ち遠しい！

娘たちがかの地へ旅立ってから、我が家では、飼い犬ばかりが増えて、三匹になった。オールドイングリッシュシープドッグのソバ太郎、ウェルシュコーギーのえりまき、スコティッシュテリアのジジと、大中小そろって、やたらにぎやかで手を取られるけれど、私は犬の世話をすることで、ともすれば滅入りがちな気持ちを無理矢理まぎらわせている。復職して再び忙しくなった夫は、たまの休みには、主のいない子供部屋で、腑抜け状態で空虚感を持て余している始末である。

せめてもの心の拠りどころは、週末のみ許されている、ガレンへの国際電話だ。私どもでは、毎週土曜日の夜にかけることに決めている。

日本とスイスとの時差は、夏は七時間、冬だと八時間あって、日本から夜に電話すると、たいていガレンでは、昼食を食べ終えたくらいである。

まずは「今日のランチは何だったの?」というあたりから、電話は始まるのだが、この返事が振るっている。ボリュームたっぷりのパスタだの、バーベキューだの、ハンバーグステーキだの、美味しそうなメニューが目白押しなのだ。しかも必ず、日替わりのスープやオードブル、焼きたてのパンに、チーズやデザートまでついた、フルコースである。どうやらガレンでは、ランチが一日のうち一番のごちそうで、ディナーはランチより簡素に済ませる習慣らしい。

キッチンにはフェルナンドというイタリア人の専属シェフがいて、三度の食事は彼の手によるものだ。フェルナンドは、学内の掃除や雑用を担当する妻のマルガリータと、フレンチクラスの五年生になる息子のデュランとともに、寄宿舎に住み込んで働いている。彼の作る料理はとても美味しくて、どこの国籍の生徒にも大好評なのだそうだ。

食事の話題が一段落すると、柚と聖は、われ先に受話器を取り合いながら、一週間の出来事を話してくれる。それを肴にワイングラスを傾ける週末の夕餉が、目下、夫と私にとって、ささやかな幸せを堪能するひとときである。食卓に並ぶのは、ごくありきたりのお惣菜だけれど、そんなものでも十分、お腹も心も満たされる。おかげで、大好きだった外食の機会はぐんと減り、すっかり出無精になってしまった。

美しくて美味しい国スイス

ガレンのアカデミックイヤーは、九月上旬から十二月中旬までの一学期、一月中旬から三月下旬までの二学期、四月下旬から六月下旬までの三学期で構成される。

各学期の間は長期休暇であり、ガレンでは、このお休みの時期、生徒は寄宿舎を出る決まりとなっている。日頃ずっと学校に住み込んで働いているメアン一家や教職員・スタッフが休養を取るための、安息日の意味合いを兼ねているからであろう。

長期休暇の過ごし方は、生徒によっていろいろだ。自国に帰る以外に、欧米の他校が開催するサマーキャンプやスキースクールに参加したり、家族みんなでヨーロッパ圏内のリゾート地へ優雅にバカンスに出かけたり、というのもある。

我が家は、時間的にも経済的にも、両親そろって何週間も海外に滞在し続けることは不可能だし、娘たちが小さいうちはなるべく日本語や日本の文化に接する機会を作ったほうがいいと考え、学期ごとに送り迎えをして、休暇は日本で過ごさせる方針とした。その結果、通算すると年間五ヶ月近く、日本にいられることになる。

送り迎えの旅はいつも、三泊四日の強行軍である。日本からスイスへの移動に要する片道

十五時間（乗り継ぎを含む）もの長いフライトを差し引くと、アルプスの山深い奥地にあるガレンとジュネーブを往復するだけで実質滞在日程の大半を消化してしまい、観光や買い物の予定などはほとんど入れられない慌ただしさだけれど、それでも年に六回の頻度で訪れれば、スイスの国内事情も多少わかってくる。

私どもが使う交通手段や宿泊するホテルは、だいたい同じであって、毎度見慣れた牧場や湖、となるはずなのだが、豊かな自然に恵まれたスイスでは、季節によって車窓の風景がガラリと変わり、飽きることはない。色とりどりの花が踊る春、緑あふれる夏、紅葉に包まれた短い秋を経て厳寒の冬になれば、一転して真っ白の雪原が現れる。国土が小さいわりには、起伏に富み表面積が大きいため、ダイナミックな地形を生かした観光スポットも随所にあるようだ。

われわれは主に、ジュネーヴからモントルー周辺にかけてのフランス語圏、三日月型のレマン湖の弧形の並びに位置する地域をうろちょろしている。

隣国のフランスほど知名度が高くないものの、このあたりは、スイスでは名だたるワインの産地だ。中には相当、良質のワインを生産するシャトーもあるらしい。ローザンヌをはさんで点在する、ニヨン、コペイ、エーグルといった沿線の村には、見渡す限りぶどう畑が広がり、歴史を感じさせる古いワイン城が残っていたり、ミシュランに掲載されたレストラン

があったりする。

ちなみに、レストランの格付けで知られるミシュランは、日本ではフランスのものがよく話題になるけれど、スイス版もちゃんと単独で発行されている。我が家では、飛行機の乗り継ぎ時間を利用して、パリのシャルル・ド・ゴール空港の書店をちょくちょくのぞいては、新しい版をせっせと入手している。

それらのレストランの中から、近場のお店を一件ずつ選んで訪ね歩き、美味しいお料理とワインで過密スケジュールの疲れを癒すのを、夫と私は旅の楽しみにしている。

いざ、レストランに入ったなら、フランス語がチンプンカンプンでも、時差ボケでお料理を選ぶ気力がわかなくても、魔法の呪文を知っていれば大丈夫だ。それはとても簡単で、「メニューをお願いします（ラ・ムニュ、シルヴプレ）」と一言、ギャルソンに告げさえすればいいのである。

えっ？　フランス語が読めないのにメニューなんか受け取って、墓穴を掘らないかって？　心配ご無用。日本では、メニューと言えば、例の分厚いお品書きがうやうやしく運ばれてくるけれど、本来、フランス語でメニューとは、日替わりの定食やコースを指すのだ。そのレストランの『本日のお奨め』というわけで、たいていどこのお店にでも用意されている。だから、あとは待っているだけで、テーブルにごちそうが並ぶ（ご参考までに、日本語で使

う〝メニュー〟の意味合いに該当する単語は、フランス語では〝カルトゥ〟)。

しかし、一難去ってまた一難。物価の高いスイスでは、思いのほか食事代がかさむので、注意が必要である。予算を多めにみてお出かけください。

ホテル　ヴィクトリア

レストランの話題に触れたついでに、私どもが常宿としているホテルについても少し述べておこう。

スイスへの送り迎えの初心者であったころは、英語の通じるジュネーヴのシティホテルを拠点にしていたのだが、回数を重ねるにつれ、夫も私も、拙いフランス語を駆使して、知らない場所へでも平気で出入りする度胸がついた。そうこうするうち、いつしか柚と聖がフランス語の達人となって、流暢に通訳してくれるのをいいことに、鬼に金棒、怖いもの知らずのわれわれの行動力は、増長の一途をたどっている。

そんな旅の戦果として、三度目のスイスで、とても素敵なホテルをみつけ、以後、常宿としている。

そのホテルは、館内のレストランがスイス版ミシュランで高い評価を獲得しているにもかかわらず、あまり知れ渡っていないらしく、日本の旅行社が発行するガイドブックには載っていない。ましてや、各国からツアーの団体客が押し寄せたりもしない。

本当は、誰にも秘密にしておきたいくらいだけれど、この際、ご紹介してしまいましょう。

ホテルの名は、ヴィクトリア。

モントルーから標高二〇四二メートルのロシェ・ド・ネーの山頂へ向かう、急勾配の登山電車の、三つ目の駅グリヨンで降りると、徒歩で五分くらいの距離に位置している。この登山電車なるものが、もとより一時間に一本しかないうえ、大変のどかだ。たった三駅の間にも、周辺の牧場からはぐれた牛が線路に寝そべっていたりする。運転手さんがいちいち電車を止めて線路に降りていき、力比べよろしく牛と格闘して、何とかご退散願う、というような番狂わせが突発するため、予定外に時間がかかることになる。ゆっくりと遠ざかる牛の首にぶら下がったカウベルの音が、日本にいるこの瞬間にでもすぐに思い起こされるほど、懐かしく耳慣れた感が、私にはある。

ヴィクトリアという同じ名前のホテルは、ここことは別に、ユングフラウの麓（ふもと）の町インターラーケンにもあり、そちらは四つ星以上の高級なホテルとして日本でもよく知られているそうで、少々まぎらわしいのだが、こちらモントルーグリヨンのヴィクトリアとは、何の関係

もないらしい。

さて、われらがモントルーグリヨンのホテルヴィクトリアは、サービスが行き届き、お料理が美味しい点は、ミシュランに載っているくらいだから、言わずもがなだけれど、他に特筆すべき素晴らしい魅力といえば、バルコニーからの眺めの美しさであろう。

目の前に静まり返ったレマン湖が横たわり、向こう岸には、スイスアルプスやフランス領シャモニーの山稜が、湖面に逆さまの姿を映しつつ、すっくとそびえ立つ。次第に朝日が当たるさまなど、この世のものとは思えない神々しさだ。凛とした荘厳な空気が、眼下を一面に支配するかのようである。まさしく、霊峰とはこのことか、と感動してしまう。

私たちはいつもここで、命の洗濯をする。

ヴィクトリアは、一戸の邸宅を丸ごと使ったシャトーホテルみたいな造りで、どの客室も異なった趣きのインテリアが楽しめ、とても快適である。中でも、バルコニーからの眺めは、六十三番の部屋が最高だと思う。お勧めです。

スイスの街角歩きはご用心！

日本人の私は、スイスの街角を歩いているとき、しばしば、「はてな？」と違和感を覚える物体に出くわす。特に、ジュネーヴやローザンヌ、モントルーなど、大きな都市である場合が多い。

その物体とは？

答えは、犬のウンチである。

美しいスイスの足元には、そこ此処に、ひからびた犬のウンチが無防備に落ちている。これは、まぎれもない事実なのだ。

柚と聖など、初めてスイスに到着した翌朝、ホテルから歩いてジュネーヴの市内観光に繰り出した途端、開口一番、見事に声をそろえて「ウンチ！」と大きく叫んだので、おかしくて笑ってしまった。

スイス人は犬好きが多いらしく、あらゆる種類の犬を、あらゆるシーンで見かける。彼ら彼女らは、大変お行儀良くしつけられ、お利口に振る舞う。あたかも市民権を得ているかのごとく、空港でも列車でもホテルでも出入りが許されるくらいだ。ところが、路上での排泄

に関してだけは、実に野性的でおおらかなのである。

飼い主のほうも、どうやら、ウンチの始末はあまりお好きじゃないようだ。というより、そんなものに頓着している様子は微塵もない。街中には、始末用のビニール袋が入ったスタンドが、あちらこちらに設置されているのだが、実際にそれが使われる現場を、私は一度も目にしたことがない。

根本には、草食農耕民族由来の日本人と、肉食狩猟民族由来のスイス人との、排泄物に対する感覚の違いが横たわっている気がする、なんて書くと、ちょっと大袈裟であろうか。すなわち、定住する者には、きれいに片付ける習慣が、移動する者には、自らの足跡を残す習慣が、自然と身についた結果ではないかと思えるのだ。

他にもびっくりしたことがある。

スイスでは、人前ですごく盛大な音を立てて鼻をかんでも、許されるのだ。たとえ格式の高いレストランで食事中であろうがお構いなしに、この行為は受容されている。老若男女を問わず、である。とびきり美人のお嬢さんでも、平然とこれをやられると、こちらは面喰らってしまう。

そのくせ、コーヒーやスープをズズッと吸い込む音は、どんなに小さくてもご法度であって、ましてや、人前で鼻水をすすり上げるなど、トンデモナイというのだから、何だか腑に落ち

ないような。

ところ変わればマナーの解釈もいろいろだなあ、と感心していたら、いつのころからか、柚と聖も、ブーッと大きな音を立てて鼻をかむようになっていた。はてさて、注意したほうがいいのか、或いは、それだけスイスに馴染んだ証拠だと喜ぶべきなのだろうか？

行くも戻るも……

最初の年、柚と聖をガレンのサマースクールに送り出す直前、日本では、大阪教育大学附属池田小学校で多数の児童が侵入者の男に殺傷されるという、大変痛ましい事件が起きて、人びとを震撼させた。私どもにとっては、娘たちをすぐにでもスイスに行かせてしまおうと決心を固めるに至る、大きな契機となった。

たとえ親元から子供を手放してでも、病んだ日本の社会から遠ざけて海外へ避難させたほうが、安全かもしれないと思われたためだ。

ところが、サマースクールが終わって一旦帰国したあと、九月の新学期に合わせて柚と聖を再びガレンに送り届けた夫と私は、関西空港に降り立った矢先、とんでもないニュースを

耳にして、ガーンと打ちのめされた。つい先ほどまで自分たちがエールフランスの機内にいた間に、ニューヨークでは、航空機を使った大掛かりなテロ事件が勃発していたというのだ。私は、恐怖のあまり凍りついてしまった。日本時間の二〇〇一年九月十二日朝（アメリカ時間九月十一日）のことである。

当日、関西空港の国際線到着ロビーは、無気味なくらい旅客がいなくて閑散としていた。あとから考えれば、アメリカからの飛行機が全便運休になっていたのだから当然である。それとは対照的に、警備はいつになく非常に厳重であったのを記憶している。

かくして、柚と聖の留学生活は、9・11NYテロとともに幕を開けたのだった。

アメリカとヨーロッパは距離的に離れているとはいえ、小さな柚と聖を、親の目の届かない海外に置いてきたのは、誤った選択ではなかったか？

われわれは逡巡し、動揺した。

心配な気持ちでいっぱいの脳裏に、娘たちのいるアルプスの山が浮かんでは消えた。

いよいよ新学期だ、冒険の旅の記念すべきスタートだと、希望に満ちて柚と聖をスイスに送り出したばかりなのに、事態は一転して、連れ戻すべきかどうか、夫と私は真剣に検討しなければならなくなった。

世界中で急速に緊張感が広がる中、不安を募らせながらも、私たちは最終的にメアン夫妻

を信頼して、二人の娘をガレンに託したまま、ひとまず様子を見ることにした。

「もしも大きな戦争が始まって、スイスに危険が及びそうになったら、僕が、どんな交通手段を使ってでも、絶対に柚と聖をガレンまで迎えに行くよ」そう言った夫の胸の内は、悲壮だったに違いない。しかし、日頃から彼の、柚と聖に対する愛情の深さを目の当たりにしていた私には、何よりも安心できる一言だった。彼は必ず遂行するだろう、私はそう信じることにした。

ガレンにもテロの余波

ガレンの父母らの反応は、国によってかなり異なっていた。

まずロシア勢が大挙して引き上げた。もともと数が少ないアメリカ人も、すぐさま帰国した。しばし動向を眺めていたオーストラリア人も、やがてそれに続いた。この年、アラブ人はいなかったので、結局ガレンには、フランス人・イギリス人・スペイン人・ドイツ人などヨーロッパ圏内の近隣国出身者と、わずかとなったロシア人、アフリカ人、インド人の兄妹、それに日本人の柚と聖が居残った。

生徒数はほぼ半減し、寄宿舎のベッドも空きだらけになった。幸い、最年少四人部屋チー

ムの良き相棒であるリザとベラの姉妹が、ロシアに帰らずに留まってくれていたおかげで、柚と聖は、心細くもならずに元気で過ごしているのが、私たちには救いだった。

しかし、テロの影響はこれだけでは済まなかった。

本来、世界一安定した通貨だとされているスイスフランは、地球規模の緊迫した状況下では、俄然強さを発揮するらしい。だからこそ、各国の富裕層が、スイスのプライベートバンクにこぞってお金を預けたがるわけだが、それはわれわれを、学費の高騰という手痛い形で直撃したのだ。

誤解のないように断っておくけれども、生徒数の減少に困惑したムッシュメアンが学費を値上げしたという意味ではない。額面は、三年目に入った現在でも、初年度と同じ設定である。

では、どういうことなのか？

種明かしはこうだ。サマースクールに行かせた当初は、一スイスフラン＝六十五～七十円前後のレートで推移していたのが、イラク戦争が終盤に差しかかるころには、日によっては九十円を越すくらい、スイスフランが日本円に対して大幅に値上がりしたのである。その結果、スイスフラン仕立てのガレンの学費は、額面は変わらなくても、日本から送金する場合、三十パーセント以上も負担が増したのだ。

これは、私どもにとっては大変な誤算だった。この原稿を書いている時点でこそ、一スイ

スフラン＝八十五円前後に落ち着いたとはいえ、テロ後しばらくは高値更新が続き、そのまま行けば、天井がないほど上昇するのではないかと危惧された。我が家の経済は著しく混乱して、翌年以降の学費をどう工面したものかと、スイスフランが高値に振れるたびに頭を抱えたのだった。

ガレンでは、学費は年度の始めに一括か、または前・後期の二分割で納めるのが基本である。スイスにあるボーディングスクールの多くは、ガレンと同様のルールを採用している。

長期にまたがる留学の場合は、世界情勢の不穏にともなう通貨レートの変動も十分に想定して、資金計画を立てなくてはならないのだと、痛感させられた出来事であった。

留学実行のための経済学

留学生活において、資金計画は、非常に重要な懸案の一つだ。

まず思い浮かぶものは、学費である。ここで学費と呼ぶのは、授業料のみならず、食費や寄宿舎の部屋代なども含めた、学校に納める年間の総経費のことで、留学費用の大部分を占める。国によってかなりばらつきがあるものの、あらかじめ決まっている固定費であるから、

各自の条件に合わせて留学先を選択しさえすれば、前もって心積もりをし、準備しておける性質のものである。

ところで、初心者は、留学前の計画段階では、あたかも学費が留学費用の総てであるかのように早合点してしまうけれども、そこには落とし穴がある。日本からの往復の飛行機代や、家族が送り迎えする場合は人数分の渡航費と滞在費も、計算に入れておかなくてはいけない。また、実際に学校生活を送るにあたっては、こまごました予定外の出費を余儀なくされ、資金計画に狂いが生じるため、注意が必要である。

見逃されがちなエクストラフィー（学費以外の費用）について、ガレンの例を挙げてみよう。巻末に掲載した資料の中に、入学時、または新年度の始めに、各家庭で用意して持参するよう、学校から指示される『持ち物リスト』があるのでご覧いただきたい。出発前に一通りの必需品をそろえるだけでも、二人分だと結構な金額となり、我が家にとっては大きな盲点であった。これを見て私など、いきなり気が遠くなりかけたものだ。

実際に学校生活が始まってからも、さまざまなエクストラフィーの負担を覚悟しなければならない。

ざっと考えつくものを書き出してみた。

＊ お小遣い
＊ 被服費
＊ 医療費
＊ スキースクールの受講料
＊ プライベートレッスンのフィー
＊ 友人宅に招かれた際の滞在費

これらの項目については、次章で詳しく述べることにする。
一般的な学費の目安など、スイスのボーディングスクール留学に関する資料は、巻末にまとめて綴じておくのでご参照ください。

四章　寄宿舎生活の費用明細

＊お小遣い

小さい子供ばかりが対象のボーディングスクールにおいては、堅実な経済観念を育むための配慮がなされるべきだと私は考える。ガレンでも、その点は特に重要視されている。

父母らは、各学期の始めに、子供の年齢に則した金額のお小遣いをメアン夫妻に預けておく。必要が生じればそのつど、メアン夫妻から子供に小分けして与えられ、明細は学期の終わりに逐一報告されるシステムである。その使われ方は、分相応でつつましく、納得できるものだ。

そもそも、スイスでの日常生活は、すこぶる健全である。深夜までオープンしているゲームセンターや二十四時間営業のコンビニエンスストアはない。学校の行き帰りに買い食いしてお腹を満たしたりする習慣もないから、お小遣いの出番はあまり多くない。それでも時々、先生や同級生と一緒に近くのスーパーマーケットまでショッピングに行くのを、柚も聖も、とても楽しみにしている。

スイスのスーパーマーケットでよく見かけるのは、コープとミグロであり、めぼしい駅の近くにはたいてい、そのどちらか、或いは両方が出店している。ガレンの最寄りのお店は、

比較的小規模なコープのストアだ。

ショッピングの日は、一～二週間に一度、水曜か土曜に巡ってくる。生徒たちは、待ちに待ったこのタイミングに、折悪しくペナルティを受けて外出禁止とならないで済むよう、その日が近づくにつれ、細心の注意を払って自らの行動を律するというのだから、何やらほほえましい。

柚と聖には、毎回二スイスフランが渡される。リザとベラも同じである。四人は、それぞれ二フランずつを手にして、ウキウキはしゃぎながら、パウラに付き添われてコープに出向き、お気に入りを選んで購入する。二フランとは、日本円にして二百円にもならない金額である。物価の高いスイスでは買える商品は限られているため、子供らは、欲しい物をあきらめることや、何回か買うのを我慢してお小遣いを貯めてから大きな買い物をすることなどを、徐々に学習する。

コープでは、柚は髪止めのピンやばら売りの色鉛筆を、聖はもっぱらお菓子、それも棒付きのキャンディーを一本か二本、好んで買い求めるそうだ。

お小遣いは、ショッピングの日以外に、年二回のメーンイベントである小旅行の際にも支給される。

ガレンでは、一学期と三学期の半ばごろ、フランスやスペインなど近隣国へ、十日～二週

間ほどのショートトリップを行っている。そのときには、スイスフランではなく二十ユーロもの大金をもらって、意気揚々として出かけるらしい。

初年度の一学期に、イタリアへのショートトリップから帰ったところを電話でつかまえて、二十ユーロの使い道について、いったいどんな買い物をしたのか、興味津々で娘たちに聞いたことがある。

柚は、「パパとママへのお土産に、きれいなキャンドルを買ったよ」と言って、われわれを喜ばせてくれた。

聖のほうは……？　いつもコープで買っているのと同じ棒付きキャンディーを、「一箱まとめて買ってきた」と言う。

「一度でいいから箱買いしてみたかったの」と、興奮した声で嬉しそうに白状する彼女に呆れながら、夫と私はお腹を抱えて笑ったのだった。

＊被服費

ガレンでは、授業のある平日は、学校名のロゴの入ったポロシャツやトレーナーを制服代

わりに着用することになっている。このユニフォームの代金は、学費の中に含まれており、毎年新しいものが決まった数だけ支給される。だから、ここで述べる被服費というのは、週末に着る私服と、下着や靴下などの消耗品にかかる費用を指している。

出発前に用意するよう求められる品目には、ユニフォームに合わせるズボンやジャケット、パジャマとガウンの他、最低限の下着がリストアップされている。これらは、日本から運ぶスーツケースに詰められるだけ詰めて持参するのであるが、それでも学期の終わりには、マダムメアンやパウラが現地で買い足してくれた分を清算しなければならない。

内訳は、防寒用のキルティングシャツや分厚いセーターやタイツ（いずれも、出発前の真夏の日本では調達が難しいものばかり）とか、破れたり小さくなったりして補充したジーンズや下着類が主である。

ガレンでは、サイズが合わなくなった衣類は、教会に寄付され、世界中の恵まれない子供にリサイクルするのが常である。その感覚が染み付いたおかげか、スイスへ行って以来、柚と聖が服を大切に着るようになったのは、とても喜ばしい傾向だと思う。

＊医療費

留学中の医療費については、もし万が一、病気やケガで入院する事態が起こったとしたら、海外での費用の負担は莫大であるため、あらかじめ保険に入っておくことは必須である。

ガレンでは、学費を納付する際に、三百スイスフランほどの掛け金を余分に払えば、現地の医療保険に加入する手続きを代行してもらえる。出発前に日本で、海外旅行保険の留学生プランに加入しておくという方法もあるけれども、実際に利用する場合の手順がかなり煩雑そうで私は気乗りがせず、医療保険をガレンにお任せした。幸いにも、未だ保険のお世話になる局面には遭遇せず、掛け捨て状態が続いている。

しかし、医療保険でまかなうほど重篤ではない、日常的なちょっとした症状に対する薬代や、ドラッグストアで購入した各自のシャンプーとか歯磨き粉などの備品の代金が、清算の対象となる。

私どもでは、前項で述べたお小遣いと、被服費、医療費を合わせ、柚と聖の二人分として、一学期当たり千五百スイスフランを、学期の始めにムッシュメアンに預けている。この金額で追加払いが生じたことはなく、大抵二〜三百フランくらいの余剰分が、学期末のお迎えの

際に明細書と一緒に戻ってくる。

いつも二フランのコインしか持たされていない柚と聖は、ムッシュメアンから渡されたお釣りの封筒の中身を、ちらりとのぞき込んでは、「わあ、紙のお金がいっぱい入ってるね！」と、羨望の眼差しで歓声を上げる。その屈託のなさに、私は何となくホッとするのだった。

＊スキースクールの受講料

ガレンのあるヴィラールという町は、スイスアルプスの山中に位置しており、冬場はスキーリゾートとしてにぎわう。登山電車の駅前には、クラブメッドやブリストルなどの大型ホテルが並び、人々は鮮やかな彩りのスキーウェアのまま、スキーブーツの足音をカシャンカシャンとロボットみたいに響かせながら、路上を闊歩する。

そんな場所柄のせいもあって、ガレンでは、授業の一環として学校ぐるみでスキーを履修（りしゅう）している。

一月から始まる二学期は、例年深い雪に閉ざされ、付近一帯には絶好のコンディションのゲレンデができあがる。この時期は連日、二時にクラスルームでの授業を終えると、四時ま

での二時間が、スキースクールに充てられる。教えるのは、学校から依託を受けたヴィラールスキークラブのプロのコーチだ。ガレンの生徒は全員、アルプス育ちの地元の子供らに混じって、レベルに応じた少人数のグループに分けられ、指導を受けることになる。

ウェアと器材はあらかじめ用意するようにと説明されていたので、我が家では初年度、暑い夏の盛りにあちこちさがし求めて何とか一式買い揃え、日本から汗をかきかき運んで行った。しかし、そんな大変な思いをしたわりには、すぐにサイズが合わなくなったり、スクールの規定の機種と異なるという理由で使わなかったりで、結局レンタルのお世話になったため、二年目以降は始めからレンタルを利用するつもりで、ゴーグルや手袋など最低限の道具以外は持参しない方針としている。

このスキースクールの受講料と器材のレンタル費用が、一人当たり三百スイスフランほど計上され、二学期は少しばかり物要りとなる。

柚と聖はそれまで、北海道へ家族で三回スキー旅行に出かけたのと、柚のみT幼稚園で毎年二泊三日のスキー合宿に参加していた程度の経験しかなく、本場アルプスでの水準の高い講習について行けるのかと、私は心配したけれども、それは杞憂であった。

上質のパウダースノーに助けられて、ふたりはめきめきと上達した。特に柚は、初年度のシーズンが終わるころには、この地域の大会の十二歳以下の部で、最年少で三位入賞を果たすま

でになったのだ。

二学期のお迎えのときに、大会を観戦したリザとベラのお母さんから、「ユズはすごい活躍ぶりだったわ。素晴らしいスキーヤーよ」と絶賛され、何も知らなかった私はビックリした。マダムメアンからも、「学校中でユズを応援したのよ」と聞かされるに至って、私までとても誇らしい気持ちになった。

どちらかといえば、おっとりしたのんびり屋さんという感じだった柚のそれまでのイメージが、ガラリと変わった。また、入賞こそ逃したものの、スポーツは苦手だったはずの聖が、よく健闘し、大人でも長いコースを転倒せずに完走したのも嬉しかった。

同時に、柚と聖はもう、着実に親の庇護の下から独り立ちして、自分の足で歩いているのだと、私は思い知らされ、ちょっとだけ寂しさを噛みしめたのだった。

＊プライベートレッスンのフィー

ガレンでは、入学の際に希望すれば、各種のプライベートレッスンをアレンジしてくれる。日本式に言えば、お稽古事か、有料のクラブ活動みたいなものであろうか。

内容は、イタリア語・スペイン語・ドイツ語・ロシア語などの語学とか、テニス、乗馬、スノーボード、スキー、ピアノ、ゴルフ、バレエにダンス、柔道や空手まであり、その中から自由に選ぶことができる。

これらのレッスンのフィー（料金）が、一学期ごとに三百スイスフランほどかかる。

柚と聖は、一年目はまだ小さかったのと、まず学校生活に慣れるほうが先だと考えて、プライベートレッスンに関しては、何もチョイスせず見送りにしたのだが、二年目からは、彼女たちが自分からやりたいと言い出したため、始めさせることにした。

動物好きの柚は、乗馬を選んだ。週に一回、学校から車で送り迎えをしてもらって、近くの練習場で受講するそうだ。性に合っているのか、とても楽しんで続けている。

おませな聖は、テニスに決めた。動機はやや不純であって、憧れのカッコイイ男の子がテニスをやっているから、というものだ。それでも、持ち前の負けん気の強さで着実に腕を上げ、こちらも毎週のレッスンを心待ちにしている。ただし、お目当ての男の子と仲良くなれたかどうかは、定かではない。

＊友人宅に招かれた際の滞在費

ガレンには、少数ではあるが、毎日自宅から通学している生徒（デイスチューデント）がいる。また、イタリアやフランスなど近隣国の生徒や、両親が仕事でジュネーヴやローザンヌに赴任中の生徒の場合は、平日は寄宿舎で寝泊まりし、週末は家族の住む自宅に帰るというパターンの、半寄宿生（ハーフボーダー）も何人かいる。

クラスメイトと打ち解けるにつれ、土日のお休みを利用して、デイスチューデントやハーフボーダーの生徒のご家庭からお招きいただく機会が増えてくる。こちらからガレンに電話をかけても、

「柚と聖は、インビテーションに行っちゃって留守ですよ」と、肩透かしの目に合うこともしばしばある。

インビテーションの名目は、ヴィラールの近場でバースデーパーティーをするから、という日帰りのお誘いもあれば、宿泊をともなうステイオーバーや、遠出のファミリーキャンプにご一緒させてもらったりすることもある。それらの経費は、ほとんどが招待した側の、純粋な好意による負担でまかなわれるらしいけれど、ガレンでは、先方のご家庭に対して、招かれる子供に、お土産代わりのちょっとしたプレゼントを持たせたり、交通費程度の現金を

渡したりするケースが多い。

その費用が、一回のインビテーションにつき、四十スイスフランくらいで、お小遣いその他として預けてある千五百フランから、学期末に清算される。

われわれは、ガレンのペアレンツの中では最遠の地に住んでいるので、柚と聖はもっぱら招かれてばかりで滅多にお返しができないが、留学して二年も経った秋、柚の誕生日にたまたまスイスに居合わせた折に一度だけ、ホテルヴィクトリアのランチに、クラスメイトを招待したことがある。楽しそうな子供らとは裏腹に、ホストの立場でおもてなし慣れしていない夫と私は、この日、それはそれは気を遣い、くたびれ果ててしまった。

よそのお宅でも、こういうお金では買えないボランティア精神のもとに、インビテーションが成り立っているのだろうと思い当たり、いつも柚と聖をあたたかく招いてくださるご家庭に、感謝の念を深めた一日であった。

＊　小人の金貨は二フラン三十五サンチーム

二〇〇一年九月にガレンに入学した柚と聖は、まもなく相次いで誕生日を迎え、七歳と六

歳になった。

メアン夫妻からバービー人形が贈られ、フェルナンドの心尽くしのごちそうやケーキを食べて、みんなに祝ってもらったのがよほど嬉しかったのか、誕生日の電話に出た聖の声は、とても弾んでいた。

「あのね、小人さんもプレゼントをくれたのよ。二フラン三十五サンチームも！」と、聖が得意げに言った。

「え、何それ？」と私。

よく聞けば、誕生日の前日、グラグラしていた聖の乳歯が一本抜けたそうだ。日本ではこんなとき、丈夫な新しい歯に早く生え替わるよう願いをこめて、抜けたのが上の歯だったら下向きに、下の歯だったら上向きに、「エイッ」とばかりにお庭に投げたりするのだが、スイスの風習はちょっと趣が異なっている。

スイスでは、抜けた歯をハンカチに包んで、夜、枕の下に入れて寝るのだ。すると、眠っている間に、どこからか小人がやってきて、こっそり金貨に替えてくれる、という言い伝えがあるらしい。

パウラから小人の話を聞かされた聖は、その晩、半信半疑で小人を迎える準備をして寝てみたところ、翌朝、自分の誕生日に目が覚めると、枕の下にはジャラジャラと、コインが置

かれていたのである。

その額、二フラン三十五サンチーム。

聖が大喜びで、棒付きキャンディーを買いにコープへ走ったのは言うまでもない。満面笑顔の聖が見えるような気がして、私は心の中で、「パウラ、ありがとう」と、そっとお礼を告げたのだった。

五章　小っちゃなジャパニーズ代表

日本代表、健闘す

メアン夫妻やパウラらに支えられて、柚と聖は、ガレンの生活にどんどん溶け込んでいった。リザとベラはもちろん、他にもたくさんいる寄宿生全員とは、兄弟姉妹みたいな親密さである。毎晩パジャマ姿でリビングルームに集まっては、就寝時間まで仲良くじゃれ合って過ごしているらしかった。

私が、スイスのボーディングスクールスクールを選んで良かったと思うのは、「スイス人の生徒が少ない」という点である。すなわち、学校内で自国民が圧倒的大多数を占めることがなく、他国から来た生徒が、いわゆる『お客さま』の扱いにならずに済むので、互いに対等な接し方ができるのだ。こんなボーディングスクール、スイス以外にあるだろうか？

寄宿舎はあたかも、一人一人の子供の母国の、さまざまな慣習や文化の交差点のようで、まさしく生きた社会学習の場である。

柚と聖は、そこで聞きかじった知識を、いつも電話で教えてくれる。私にとっても、興味深いひとときだ。

「インドの人は、手でご飯を食べるんだって。どっちの手で食べるか、決まっているのよ」

「ロシアの冬はとても寒くて、風が吹くと凍えてしまうんだって」
「アフリカでは、おうちでダチョウを飼ってる人がいるんだって」
「オーストラリアやアルゼンチンは、夏と冬が、スイスとは逆なのよ。それからアルゼンチンでは、スペイン語をしゃべるんだって」……
ざっとまあ、こんな調子である。
ところで、ある日、たまたま柚が持っていた写真に、みんなの関心が集まる出来事が起こった。
柚の日本の家はどんな建物なのか、と誰かに問われて、柚は、いつも持ち歩いている自宅の写真を公開したという。その写真は、庭で放し飼いしている大型犬のソバ太郎が、門から身を乗り出しながら、どーんと真ん中に陣取っていて、その背後に、我が家の全景がオマケみたいに写っていた。
それを見たクラスメイトのジャンポールが、いみじくも言ったそうだ。
「OK、柚。僕にはわかったよ。ここに写っている建物には、たぶん馬と犬が寝ているんだね。で、人間の住んでいる家の写真は持ってないのかい？」
普段はとびきり気配りの利く心優しきジャンポールに、悪気があったわけではない。日本の家を見たことがない彼は、自分の知識の範囲で感じたままを、率直に述べたに過ぎないのだ。

私は急に心配になった。柚は、ジャンポールに何と答えたのかしら？　私だったら、馬小屋と間違えられるほど小さな家に住んでいる自分を恥ずかしく思い、曖昧に生返事をして、そそくさと写真を片付けてしまうだろう。

でも、柚は違っていた。胸を張って、ジャンポールにこう説明したという。

「いいえ、これが私の家なの。日本人はたいてい、こういう形式のおうちに住んでいるのよ。それから、馬を飼うのはあまりポピュラーではないから、お庭に馬小屋のある家は、日本には滅多にないわ」

ジャンポール他、居合わせた一同は、柚の答えを聞いて、「ふうーん、そうなのかあ」と感心し、初めて見る日本の家をしげしげと眺めたのだった。

世界の国がギュッと凝縮されたミニ地球のような寄宿舎で、柚は日本代表として立派に役目を果たしたと、私は思った。そして、つい先ほど、日本の小さい家を卑下して、恥ずかしいと考えた自分自身を、大変恥ずかしく感じたのだった。

かつて日本にもあった

毎週末の電話で、寄宿舎生活の様子をこまごまと聞いているうちに、私は、かつて日本にも、ガレンと似たボーディングスクールが存在したことを思い出した。

全寮制の旧制高校がそれである。

私の父は、戦前から戦後にかけての教育制度の変遷期に、旧制高校を卒業した。それから半世紀を経た現代における、柚と聖の寄宿舎生活は、私が幼少のころから、父に何度も聞かされた旧制高校時代の話と、いつしかオーバーラップしていた。

多感な青年期を、日本中から集まった若者同士が切磋琢磨しながら学び舎で過ごす有意義さや、兄弟がいっぱいできたみたいな寮生活の楽しさを、父は熱っぽく語ったものだった。語学教育にも力が注がれていたはずだ。ドイツ語やフランス語の原著で読んだ本を、若き日のよすがとして、父は生涯、壁一面の書棚にしまって、時折なつかしそうに手に取っていた。

旧制高校は、文科と理科のコースに分かれてはいたものの、全人教育にウェイトが置かれていたおかげで、たとえ理科であっても語学が堪能で哲学の造詣深く芸術を愛でる卒業生が輩出されたそうである。

戦後、『教育の平等』を重んじるあまり、旧制高校に代表されるようなユニークな学制を、日本はあっさりと切り棄て、現実には平等でない社会で生き抜く術を、子供らに教える教育内容ではなくなってしまった。それが、今日の日本の国際競争力の低下に結びついているの

ではないか、という気がしてならない。

柚や聖の年代が大人になって二十一世紀の世界をたくましく渡って歩くための、大切な礎（いしずえ）となる教育システムを、新たに確立することは、もはや日本では途方もなく困難に思えて、残念である。

愛しのマミーちゃんに会いに

欧米の学校では、ショーアンドテル（show and tell）と呼ばれる授業形態を日常的に取り入れているところが多い。

ショーアンドテルとは文字通り、見せて（ショー）話す（テル）という意味だ。与えられた一つのテーマに関して、生徒が独自に題材を選んで、調べたり勉強したりした事柄を、クラスルームで提示して発表するものである。個々の発表の内容に基づいて、生徒同士で質問や議論を交わしたり、教師が知識を補足したりして、授業が進められる。

一般に日本人が苦手とされる、プレゼンテーションやディスカッションの能力は、欧米では、低学年から始まるショーアンドテルで培われるのだと言われている。

ガレンでも、カリキュラムに沿って系統立てて学ぶ形式の授業と並行して、ショーアンドテルが毎週活発に展開される。

一学期のある週、柚のクラスのテーマは、『エジプト』であった。担任のクレアが、エジプトを紹介するビデオを教室で上映し、生徒たちはそれぞれ、エジプトについて何か研究して、後日、皆の前で成果を披露するのである。

柚は、クレアのビデオに出てきたミイラ（英語ではマミー）の映像に、強く惹かれたらしい。そこで、ミイラの成り立ちや保存の仕方について詳しく調べたそうだ。

そこから親近感が嵩じたのか、以来、柚は、恋い焦がれたように「マミーちゃん、マミーちゃん」と呼ぶほど、ミイラに夢中になってしまった。一学期の終わりが近付くころには、彼女はついに、「マミーちゃんの本物を見てみたいわ。ねえママ、どこかでマミーちゃんに会えないかしら?」と言い出した。

「ええっ、マミーちゃんに会えるところ? でも、まさかエジプトまで行くわけにはいかないし……」

困惑しつつも、何とか柚の願いを叶える方法はないものかと、考えあぐねた挙げ句、

「あ、そうだ!」私は一計を案じた。

九月に娘たちをスイスに送った帰途に夫と立ち寄った、パリのルーヴル美術館に、ミイラ

が展示してあったことを思い出したのだ。偶然にも、十二月のお迎えの際、飛行機の乗り継ぎの都合上パリでつぶさなければならない時間は、たっぷりあった。

「よし。マミーちゃんに会いに、ルーヴルへ行こう！」

これが、一学期の残りの期間中、われわれの合い言葉になったのである。

侮れない！　怒濤のお迎えラッシュ

十二月になった。クリスマスまで二週間と迫ったこの時期、関空から乗り継ぎ地のパリへ向かう長距離路線の飛行機は、観光シーズンのはざまであったのと、テロの影響で旅客が激減したのとで、後方の座席などは横一列を独り占めできるくらい、ガラ空きの状態だった。

けれども、パリへ着いた途端、様相は一変する。

十二月中旬のヨーロッパは、例年、クリスマス休暇を前に、大規模な民族移動が始まるのだ。特にスイスでは、あまたある寄宿舎学校が一斉に冬休みに入るため、鉄道の駅や空港は、子供を何人かずつ連れたファミリーと、彼らが押す、うずたかく荷物が積まれたカートで、ごった返すのである。

夫と私はこの現象を、『お迎えラッシュ』と名付けているのだが、たかが子供のお迎えと侮るなかれ。お迎えラッシュと重なると、ヨーロッパ圏内の主要都市間を往復する短距離路線が、たちまち満席続きになってしまうことも珍しくはない。

私どもでは、初年度の十二月に柚と聖をスイスに迎えに行くとき、そんな厳しい事情も知らず直前までのんきに構えていたら、お迎えラッシュの巨大なうねりに巻き込まれ、波間に漂う木の葉のごとく弾き飛ばされて、ジュネーヴからパリ行きのエールフランスがなかなか取れずに、大変苦労した。その教訓を生かすべく、二年目以降は、九月の時点で、一年分の送り迎え用の航空券を、全て予約してしまっている。

一般に、ボーディングスクールでは、年間の行事日程があらかじめきっちり決まっていて、先を見越した予定が立てやすく、一年も前から航空券を手配しておくことが可能なのだ。座席さえ確保すれば、ひとまず安心というわけである。

ついでに書き加えておくと、我が家では、送り迎えに利用する航空会社を、いつもエールフランスと決めている。パリ〜ジュネーブ間の便数が多いのと、機内食やサービスが気に入っているせいもあるが、他にも理由がある。同じ航空会社を繰り返し使うほうが、フライトマイルを貯めやすいからだ。

エールフランスのマイレージサービスの偉大なところは、関空〜ジュネーヴ（パリ乗り継ぎ）

の往復で十万円を切るような格安航空券であっても、相応のフライトマイルが記録されることである。おかげで、日本とスイスを往復するうちに自然とポイントが貯まり、年に一回か二回は無料航空券をゲットできる。少しでも経費を削りたい身には、とてもありがたいシステムなのだ。

また、保護者の付き添いのない小さな子供の一人旅向けに、関空や成田からジュネーヴまで、エールフランスのスタッフが身近にサポートしてくれるサービスもあるそうなので、毎回の送り迎えが難しいご家庭には朗報であろう。

【※注　マイレージプログラムやサポートサービスなどは、随時内容が変更される可能性がありますから、詳細につきましては、航空会社に最新情報をお問い合わせください。】

ルーヴルへの道

三ヶ月ぶりにガレンで娘たちと再会した私は、今度は泣かなかった。

柚と聖は、背も髪も伸びて、こころなしか大人っぽくなり、ひとまわりもふたまわりも成長した様子が、明らかに見て取れた。私は胸が詰まって言葉もなく、ただ力いっぱい我が子

を抱きしめた。

傍らでは、「おう、元気だった?」と、夫が照れくさそうな笑顔で娘たちに声をかけ、飛びつく二人をガシッと受け止める。

帰国の用意はすっかり整っていた。前もって日本からパウラに電話して、冬休みの間、スーツケースは使わないので学校に置いたままにしてもらえるよう、頼んであったからか、最小限の着替えと宝物のタージュだけが、コンパクトなデイパックにまとめられていた。

柚と聖は、パウラに向かって「I miss you ～」と大袈裟に泣きまねして見せ、しばしの別れを惜しんだ。

「さあ、行くぞ」夫が娘たちをうながし、われわれはメアン夫妻に手を振りながら、ガレンをあとにした。

ほんの少し前までは、柚と聖そのものが大きな荷物であったのに、今や二人とも、デイパックを軽々と自分で背負って、すたすた早足で歩き始めたことが、私にとっては新鮮な驚きだった。

この朝、パリからジュネーヴに来たばかりの夫と私は、お迎えラッシュのあおりで、同じ日の午後にトンボ返りでパリへ飛ぶ便しか、飛行機の座席が確保できなかった。そのため、ガレンからジュネーヴ空港へ戻るまでの時間にあまり余裕がなかったが、小走りで電車を乗

り継ぎ、すんでのところでパリ行きの搭乗時刻に間に合った。以前の柚と聖の足取りだと、離陸までにジュネーヴ空港に到達できなかったに違いない。

その代わり、パリのシャルル・ド・ゴール空港に隣接したホテルにチェックインするや、全員バタンキューであった。

翌朝、われわれはホテルを出て、オペラ座行きのリムジンバスでパリ市内へと向かった。お目当てのルーヴル美術館は、オペラ座から歩ける距離にある。

ルーヴルでは、ガラスでできたピラミッド型のゲートを入る際、空港みたいにセキュリティー検査を受けなくてはならない。その短い列の最後尾に、四人で並んだ。

本物のマミーちゃんと対面したとき、柚がどんな反応を示すのか、私はとても楽しみでワクワクしていた。

ルーヴルの穴場

セキュリティー検査を終えて館内に進むと、チケット売り場やインフォメーションカウンターが設けられたロビーに出る。

しかし、われわれは、すぐにチケットを買って入場したりしない。実は他にも目的があるのだ。

じれる柚を説き伏せて向かった先は、チケットブース脇の、隠れ穴場のレストラン、グラン・ルーヴル。ここは、グルメの都パリでも評判が良く、知る人ぞ知る名店と言われている。ガラスで仕切られたフロアに、落ち着いた調度品や白いクロスの掛かったテーブルがゆったりと配置され、やや場違いなほどの格式の高さを感じさせる。

だだっ広いルーヴルを探険するのにそなえて、まずは腹ごしらえというわけだ。ランチタイムだからか、われわれみたいなお子ちゃま連れの東洋人でも咎められずに、中央の席まで案内してもらえた。

ここでも例によって、美味しいワインとお料理で、柚と聖の一学期間の奮闘をねぎらい、慌ただしかった昨日のジュネーヴ往復の疲れを癒す私たちであった。

いよいよお腹がいっぱいになったころ、マミーちゃんを目指して突進を開始した。ルーヴルでは、突進しないとなかなか目的の場所に至らない。それくらい広いのである。

エジプト関連の展示フロアは、人がまばらで空いている。他のお客の存在を気にせずマイペースで見学して回れるので、私は好きだ。

愛しのマミーちゃんは、あたかも柚を待っていたかのように、ひっそりとガラスケースの

中に横たわり、周囲には誰もいなかった。

「マミーちゃん」

柚は駆け寄り、興味深げにじっと目を凝らして眺めている。そしておもむろに、フランス語で詳細に書かれた傍らの解説を、熱心に読み始めた。満足そうなその顔が、あたりの静けさとは対照的に、どんどん上気していくのがわかった。

「連れてきて良かったね」

こちらもワインで上気した顔で、夫と私はそっと目配せしたのだった。

女子高生でいっぱい事件

ところで、ルーヴルからの帰り際、出入口のピラミッドの下にあるトイレで、私と柚・聖は奇妙な光景に遭遇した。

女性用トイレのドアを開けると、中は、おそろいのセーラー服を着た日本の女子高生の一群で占拠されていたのだ。近くにもう一ヶ所あるトイレものぞいてみたが、そこも同様だった。

最近では、パリへ修学旅行をするのだろうか。

セーラー服には不似合いの茶色い髪をした彼女たちは、しきりに「退屈だ」「だるい」「うざい」といった会話を、大声でぺちゃくちゃ繰り返していた。そして、用が済んでも手洗いの鏡の前に集団で陣取って、お化粧を直すのに余念がない。そのため、トイレはいつまで経ってもいっぱいで、何人かのマダムがドアを開けては顔をしかめて肩をすくめ、あきらめた様子で出ていった。彼女たちは、まるで周囲の人間が見えていないみたいに無視して、居座り続けている。ルーヴルでの貴重な見学時間の大半を、トイレで仲間と固まって過ごすつもりかと思われた。

やっとわれわれの順番が回ってくると、個室の中には、美しく印刷された日本語版の説明パンフレットが無残に破り捨てられ、細かな切れ端が床を埋め尽くして所狭しと散乱していた。

女子高生の傍若無人な振る舞いは、柚と聖の目にも異様に映ったらしい。

柚が不安げな表情で、私の耳もとで小さな声で尋ねた。普段なら私に対しては日本語を使うのに、珍しく英語だった。

「ママ、あの人たちは日本人なの？」

「そうみたいね」

「じゃあ、柚と聖も大きくなったら、あんなふうになっちゃうの？」

その問いに答えようとした私を遮って、聖が、鼻息荒く柚に向かって英語で叫んだ。

「ノー！　私はならないわ。柚もならないわよ、絶対」

そして聖は、慰めるように柚の背中を抱き、ふたりは何事かを囁き合って、ぷりぷりしながらトイレを出ていった。

女子高生は呆気に取られて、一斉にこちらを注視している。

娘たちの後ろ姿を急いで追いつつ、私はつぶやいた。

「うん。ならないと思うよ、きっと」

六章　ボーダレス世界の教育論議

攻めの子育て、守りの子育て

柚と聖を、この年齢でボーディングスクールに入れたことに対して、われわれ両親に向けられる反応は、日本とヨーロッパでは、まるで異なる。

日本ではたいてい、「そんなに小さいのに、かわいそうに」と否定的にとらえられ、時には、親の役割を放棄しているかのような批判めいた言葉を浴びせられたりする。

ところがヨーロッパでは、「とても賢明な選択をしましたね」と、やたら賞賛される。

私はここにも、草食農耕民族由来の日本人と、肉食狩猟民族由来のヨーロッパ諸国の人びととの、感覚の違いを嗅ぎ取ってしまうのだ。

その昔、日本では、一ヶ所で定住して作物を育て、食べる糧(かて)を得ていた。家族総出で農作業をする際には、小さい子供も背中にくくりつけたりして身近に置き、周囲の皆が声をかけ目をかける。気心の知れた地域仲間全体で面倒をみるという風潮があった。

片やヨーロッパ諸国は、獲物を求めて移動する。一家の主が狩りに出ている間は、子供は何日もお留守番、といった時代背景がある。たくましく生きる力を与えるためには、ライオンが、かわいい我が子をわざと谷底に落として這い上がらせるみたいに、突き放して遠くか

ら見守る子育てが行われたであろう。伝統と歴史を誇るヨーロッパのボーディングスクールは、そんな風土の中で、必然的に生まれ、根付いたのだと、私は考える。

今やスイスでは、ボーディングスクールは、観光や金融と並んで、国を代表する産業の柱になっている。

個人主義的なスイス人も、われわれが子供をボーディングスクールに行かせている親だと聞けば、すぐさま相好を崩して親しく話しかけ、あたたかくもてなしてくれる。空港の入国審査でも、ボーディングスクールのスチューデントビザが添付されたパスポートを柚と聖が提示すると、厳めしい顔つきの係官が、にわかに愛想良くなったりする。それくらいボーディングスクールは、スイスにおいては重要なポジションを占めているらしいのだ。

インターネットが急速に普及したここ十数年で、世界はかつてないほどの、ボーダレス社会に突入した。情報、通貨、言語などのボーダレス化により、人びとは、どこの国にいようが、それらを自在にやり取りする時代になった。その動きにともない、日本では、年功序列や終身雇用といった、農耕定住型のシステムが崩れ、地域社会のつながりも薄れて、ヘッドハンティングという言葉に象徴されるような、狩猟移動型の社会形態に様変わりしつつある。

教育に関しても例外ではなく、学校も先生も生徒も、もっともっとボーダレス化が進められるべき曲り角に来ているのかもしれない。

すなわち、これからは日本でも、欧米の学校みたいに、実力のある先生はどんどん引き抜かれる、生徒の側も先生や学校を自由に選べる、そんな方向に流れていくのではないかと、私は予想している。

ハッとした一言

柚と聖がスイスに留学していることを知った人から、よく聞かれる質問に、「寂しくないの？」というのがある。

関心を持ってお尋ねくださる方には申し訳ないが、私はこれを、一種の愚問だと考えている。だって、寂しいに決まっている。かわいい盛りの小さい子供を遠くに手放して、寂しくない親がいるだろうか。子供にとってもまた、同じであろう。

だから、そう問われるといつも、顔は笑って受け流しても、心の中では、何と答えたらいいのか戸惑い、「どうしてそんなわかりきっていることを聞くの」と、つい突っ掛かりたくなってしまう。

私ども一家四人が、寂しさに辛くも耐えていられるのは、それと引き換えにしても、行き

たい、行かせたい、と強く思えるくらい、スイスでの学校生活が充実しているからである。

最初の一学期が終わった十二月、日本から二人を迎えに行き、関空に着いたとたん、「スイスに帰りたい、パウラに会いたい」と聖が泣き出した。二学期が始まる一月に現地へ送ったときには、ジュネーヴ空港に降り立つや、「ああ、スイスの匂いがする」と、柚が心底ホッとした表情でつぶやくに及んで、親としては、やや複雑な心境であった。けれども、柚と聖にとっては、スイスで過ごすことが、もはや完全に彼女たちの生活の大きな部分を占めているのだと、喜ばずにはいられなかった。

一月の出発直前、いつもながらのお別れに弱気になった私が、

「二人とも、もうスイスはやめにして、日本で学校に通ってもいいのよ」と言ったら、すかさず聖が、真剣な眼差しで、キッパリと言い切ったものだ。

「聖も、ママと会えないと寂しいよ。でもやっぱり聖は、スイスに行きます。だって聖、ガレンでお勉強、頑張らなくちゃいけないんだもの。だって、最初にママとお約束したんだもの」

(あー、そうだった……)

私は、小さな聖に、とても大切なことを教えられた気がした。

ガレン式成績表

その言葉通り、彼女はよく努力し、担任のフィオナがつけた成績表には、どの科目も及第点が並んでいた。

ガレンの成績表は、十から一までの十段階評価である。科目によっては、八・五とか七・五とかの表記もあるので、実際は二十段階かもしれない。内容のほうも、例えば、英語とフランス語は、『話す』『読む』『書く』『綴る』に『文法』を加えた五項目、また算数は、『数』『図形』『計算』の三項目に分けられ、各項目についての評価とコメントが、ビッシリ書かれている。テストの順位も明示されており、かなりシビアだが、将来、よその学校に出願する際には、この成績表のコピーがそのまま内申書（成績証明書）となることを考えれば、必然なのだろう。

その他の評価対象科目としては、地理、歴史、科学、コンピューター、美術、音楽、ホームワーク、スポーツなどがある。さらに学科以外に、寄宿舎における行動や、クラスルームでの態度といった項目がある。次の学期で学ぶ課題に向けてのアドバイスも、細かく書き添えられている。担任教師にしてみれば、これを人数分こなすだけでも相当の仕事量のはずだ。

成績表を丹念に読むと、柚と聖が普段、学校でどのように振る舞い、どのように勉学に打

ちこんでいるかが、つぶさにわかる。成績表は、一学期あたり中間と期末の二回、一年間では合計六回発行され、学期ごとのお迎えのときに二枚ずつ、ムッシュ・メアンから親に手渡される。子供にとって、ちょっぴり緊張する瞬間であるのは、いずこもご同様らしい。

日本語を忘れるか？

もう一つ、しばしば聞かれる質問として、「日本語を忘れちゃうんじゃない？」というのがある。また、よく似た質問で、「英語もフランス語も日本語も、全部を並行してやったら、結局どれも中途半端にならない？」というものも。

私は、これらに関しては、否定できると確信している。

わかりやすく説明するために、仮に、人間が一種類の言語を使いこなせるキャパシティーを、百としてみよう。質問してくださるかたがおっしゃりたい主旨は、「英語と日本語を半分ずつ使う生活が続いた場合、どちらの言語も、半分の五十ずつしか修得できないのではないか、まして、三ヶ国語であれば三分の一ずつ、四ヶ国語なら四分の一ずつの能力になってしまうのではないか」という懸念であろう。

ある一定の年齢以上においては、この説は真なり、と言えるかもしれない。現に、多くの日本人は、他言語で会話するとき、まず頭の中で、話したい内容を日本語の構文にし、それを外国語に訳した言い回しを思い浮かべてから、初めて声に出して発音する、というプロセスを経るのだそうだ。裏返せば、その時点で獲得している日本語力を超えるほどの言語能力を、他言語で身につけるのは、至難の業ということになる。そこに記憶力の減退も加わると、長い間海外で暮らしているうちに、土台となる日本語自体があやしくなってしまうケースもあるだろう。

ところが、柚と聖の年齢だと、どうやら言語の消化経路がまったく異なるらしい。頭の中でいちいち訳す段階が、すぽんと抜け落ちてしまっているみたいなのだ。英語で聞かれれば英語の応答が、フランス語で話しかけられればフランス語の返事が、即座に口を突いて出てくるのである。そして尚かつ、日本に帰ればふたりとも普通に日本語をしゃべっている。私の推測では、おそらく瞬時の思考そのものがそれぞれの言語でなされているに違いない。

柚と聖だけに限らず、ほぼ同年代のガレンの生徒たちもみんなそうなのだが、このくらいの子供は、言語能力も記憶力もまさに無尽蔵であって、一ヶ国語が百だとしたら、二ヶ国語で二百、三ヶ国語で三百、四ヶ国語では四百、或いはそれ以上までも、キャパシティーを自在に広げることが可能であるかのように、私には思える。

では、その境界となる年齢は、一体いくつなのか？

語学教師をしているフランクの感覚的見解によれば、答えは十歳前後だそうだ。実は、夫と私がはじめに計画を立てた際、柚と聖を留学させる時期を十歳頃と決めていたのは、このフランクの持論が根拠となったからにほかならない。

これは、低年齢での海外留学で得られる、非常に大きなメリットの一つだと、私は考えている。

英語は最初から必要か？

語学の習得という観点においては、もう一つ、この年代ならではの面白い特徴がある。

私はかつて、十三歳で初めてアメリカへ行ったとき、同年代のアメリカ人とは『英語で会話はできても友人にはなかなかなれない』状態がしばらく続いて、ストレスを感じた覚えがある。

ところが、柚と聖の年齢だと、十三歳の私とは違って、言葉が通じようが通じまいが、まず『友人になる』ほうが先に来ちゃうのである。善くも悪くも、他人と距離を置いて付き合うなん

てこと、この年ではできないのだから。これが、小さい子供のすごいところであり、強みでもあるわけだ。

柚と聖は英語を話せるようになってからスイスに渡ったが、ロシアやスペインあたりからは英語もフランス語もまったくしゃべれない子供がいきなり留学してくる。つまり、柚と聖が最初から英語で話せたかどうかなんて、ガレンでの友人作りには、結果的にあまり関係なかったのである。

小さい子供というのは、言葉が通じなくてもお構いなしに、会ったその瞬間から、相手に対して好奇心全開、一気にお友達モードに入るのだ。そして相互に、何とかコミュニケーションを図ろうと努めた挙げ句、ロシア人やスペイン人が英語を話し始めるのを待たずに、柚と聖のほうが先に、ロシア語やスペイン語を片言ながら操れるようになったりする。反対に、ロシアやスペインの子供は、柚と聖の愛唱歌である〝たこ焼きマンボ〟を流暢に口ずさむことなど、すぐに朝飯前となる。モスクワのリザとベラの家では、長期休暇で姉妹が帰ると日本語が飛び交うそうだ。

これは、十三歳の私にはとうてい築けなかった、この年齢だからこそ得られた友人関係だと、痛切に思うのだ。

そういう意味では、小学校三〜四年生までの留学は、中学生や高校生以上で初めて留学す

るのとは、かなり事情が異なっているといえる。極論すれば、現地語をろくに話せない状態で海外へ出ても、たいてい平っちゃらなのである。

寄宿舎の落とし穴

では、十歳を過ぎて留学する場合は、どうだろうか。

大きい年齢の子供は、やはりある程度、英語力を身につけてから海外に行かせるか、ESL（英語が第一言語ではない生徒を対象にした英語の補講）のある学校を選ぶほうが、スムーズに運ぶのではないかと思われる。或いは、現地語が話せないまま、ESLも受講せずにいきなり留学するのであれば、思い切って日本人が一人もいない学校に単身で飛び込むのも、意外に得策なのではないかと私は考える。

これには、次に述べるような苦い体験が反面教師となっている。

二学期になるとガレンには、NYテロの直後にいったん母国に引き上げていた生徒が、ぽつりぽつりと復帰した。新たに入学する生徒も数人いて、寄宿舎は少し活気を取り戻した。

フレンチセクションの新入生の中に、Aちゃんという、十一歳になる日本人の女の子がいた。

彼女は、三十年前にお母さんがスイスの小学校に留学していたご縁で、柚と聖より一学期遅れてガレンに入ることになったのだが、Aちゃん本人は、それまでずっと日本の学校で教育を受けており、日本語以外はほとんどしゃべれなかった。

こういうケースでも、言語の面だけを論じれば、Aちゃんは、もちろん大人よりはうんと早く、英語もフランス語もマスターするはずだ。しかし、彼女は、『現地語を話せないために友人ができない』現象で、言語をマスターするより前につまずいてしまったのである。

言葉が通じず、しかも学年の中途での入学である。それが響いて、同年代の生徒から相手にされない状態がしばらく続いたことが、Aちゃんをパニックに陥れた。メアン夫妻や担任のムリエルは日本語が理解できないので、日本語でしかコミュニケーションが取れないAちゃんとは、意思の疎通がなかなか図れず困惑していた。

そんな経緯から、Aちゃんは次第に、日本語が話せる柚に、ボーディングスクールでの生活を全面的に頼るようになる。

朝から晩まで、Aちゃんは柚のそばから離れなくなった。授業中も、柚がAちゃんの教室に頻繁に呼ばれて、通訳の役割をつとめていたそうだ。

けれども、柚にも当然、自分のクラスメイトや聖と行動をともにしたい気持ちがあるので、Aちゃんの意に常に沿えるとは限らない。

そうこうするうち、問題が生じた。

窮地に追いこまれたAちゃんは、何とか柚を従わせる方法がないものかと知恵を絞り、とうとう実力行使に出たのである。

柚が、わずかでもAちゃんと別々に過ごすそぶりを見せようものなら、焦った彼女は、柚に対して、ちょっとした暴力を振るうまでになった。また、「先生に告げ口したり、言う通りにしなかったら、柚ちゃんのパパとママがお迎えに来られなくしてやるからね」と、日本語で脅したりもする。

大人の感覚だと、単なるハッタリだとわかりそうな内容なのだが、小さい柚にとっては、パパとママがスイスに来なくなる恐怖は、私などが想像する以上に切実なものであったようだ。

柚は、ストレスを溜めながらも誰にも言えず、じっとAちゃんの言いなりになる毎日を、二学期いっぱい我慢した。日本語のわからない先生がたの目には、とても仲良しだと映っていたらしかった。

迂闊(うかつ)にも、われわれも、普段と変わらない電話の会話からは気付いてやることができなかったのである。

「私、もうガレンに行かない！」

のちに柚から聞いたところでは、聖だけは、柚をかばって、何回かAちゃんに立ち向かったものの、身体の大きなAちゃんにかなうわけもなく、二人まとめてやられてしまったという。

しかし、二学期のお迎えのとき、マダム・メアンがにこやかに宣告した一言が、この生活に終止符を打たせる糸口になった。

「ユズとAちゃんは、すごく仲が良くて離れたくないらしいから、三学期から同じお部屋で寝られるようにしましょうね」と。

今度は、柚と聖がパニックに陥る番だった。

日本に帰国して春休みを過ごしている間も、浮かない気分で人知れず悩んでいたのだろう。スイスに戻る日が迫ったころ、ついに柚が、意を決したように切り出した。

「私、もうガレンに行かない！」

すると聖が、「私も！」と続けて言い、ふたりそろってオイオイと涙を流しはじめたので、私はびっくり仰天して尋ねた。

「どうして？　一体何があったの？」

柚と聖が訴えるには、ガレンで勉強するのはおもしろいし、クラスメイトや先生は大好きだ、スキーも楽しいから、スイスへは行きたいのだけれど……、でも Aちゃんがいると、柚は他の誰とも自由に遊べない。聖も、柚に近付こうとすると、「あっちへ行って」と小突かれて排除され、柚とおしゃべりすらできないの……。

「何故、ママにもっと早く教えてくれなかったの？」と私が問うと、

「だって、そんなことしたら、パパとママをスイスにお迎えに来られなくすると言われたんだもの。私、それが一番悲しかった」と答えるなり、柚はワッと泣き伏した。

一部始終を聞きながら、私の胸は痛んだ。

柚、聖、ちっとも気付いてやれなくて、ごめん。鈍感ママの私は、心底情けなかった。

「マダム・メアンが三学期からAちゃんと私を同じお部屋にするって言ってたでしょ？　だったら私、もうガレンには行きたくないわ」

柚が最後にそう結んだのを受けて、直ちにマダム・メアンに宛て、夫がメールを書き送った。ガレンに適応できずに荒れるAちゃんを、友情で支えるには、柚はあまりにも幼くて荷が重いのではないかと、相談するためだ。

ほどなくマダムから、大変驚いた様子で、次のような内容の返信メールが届いた。

ユズとAちゃんがとても仲良さそうだったため、にわかには信じられないが、事実とすれば、

見逃していたのは学校の手落ちで、申し訳なかったこと。部屋替えは白紙に戻し、柚と聖は今まで通り、リザやベラと同室とすること。以後はAちゃんのフォローにも十分に注意を払うので、心配せずにガレンに来てほしいこと……。

柚と聖は、そのメールを読んでもまだ不安が拭えなかったらしく、自らスイスに国際電話をかけ、絶対に部屋替えをしない旨、ムッシュ・メアンからも言質を取り付けて、やっと落ち着いたのだった。

このことは、孤独感や苛立ちの持っていき場がなかったAちゃんにも、良い結果をもたらした。事情を知った先生やクラスメイトが、柚の通訳を介さず、Aちゃんに努めて直接話しかけるようになったからだ。

その甲斐あって、Aちゃんはぶち当たっていた壁を乗り越えた。めきめきと語学力を磨いて、みんなと打ち解けていった。

一連の経過をAちゃんサイドから考えると、もっと早く、こういう環境が整うことが待たれていたのだ。つまり、なまじ最初から、日本人の先住民(柚と聖)がいなかったほうが、Aちゃんの自立という観点においては望ましかったのではないかと言える。

元来、聡明で朗らかなAちゃんは、今では同年代の友人も増えて人気者となり、ガレンで和やかに過ごしている。柚と聖も、そんなAちゃんを実のお姉さんみたいに慕い、ようやく

本当の仲良しになれて、一件落着したというわけである。

幻の父母会名簿

ところで、生徒たちの間でこういう揉め事が起こったとき、双方の親の話し合いで解決したらどうだと思われるかもしれない。

しかし、ガレンにはＰＴＡ組織や名簿がなく、同級生のフルネームでさえ把握するのは難しい。柚も聖も、他の生徒については呼び名（通称）と国籍ぐらいしか知らないのだ。生徒の間で相互に自宅の住所や電話番号を教え合ったとしても、この年齢では、正確に書いて伝えることが（本人はそうしているつもりであっても）難しい場合も多く、経験的には、あまりあてにできたものではない。

スイスのインターナショナルスクールでも、中学校や高校を擁する大規模なところは、ペアレンツデーを設けて、父母らが親睦を深める機会を積極的に作る学校も珍しくはないのに、ガレンでは、親同士のつながりは実に希薄である。送り迎えの際に、たまたまその場に居合わせた人とだけ、軽く会釈する程度の関わり方だ。入学式や卒業式もない。

これには、二つの背景が考えられる。

最も影響が大きい要因として、ヨーロッパ諸国において脈々と継承されている、クラスとかヒエラルキー（身分・階級）の概念がある。

前にも書いたが、ガレンは世界一、低年齢の生徒を対象にしたボーディングスクールであって、最年少だと四〜五歳から在籍している。ヨーロッパやロシアには、代々、この年齢に達した子供を例外なくボーディングスクールに入学させるような、特殊な家系というのが、確かに存在するのだ。

それはすなわち、王室関連や貴族の血筋であったり、暗黒社会の系譜をまとめるグランマフィアであったりする。

世界中の富が集まるスイスのプライベートバンクは、顧客の秘密を完璧に守る口の固さで有名である。それと同様に、スイスのごく一部のボーディングスクールには、セキュリティーを維持する目的で、徹底した秘匿（ひとく）が求められる。

だからなのか、ガレンでは、父母の名簿は公開されず、現実に連絡の取りようがないのだ。

もう一つの要因として、インターナショナルスクール、つまり多国籍であることが挙げられる。

生徒たちは邪心なく付き合っていても、親同士となれば、他国民に対して偏った固定観念

が無意識に潜在していることがある。また、揉め事の受け止め方や処理の仕方に、お国柄による違いがあらわになることも。それがもとで、いらぬ誤解や感情の行き違いが生じて、単純に済みそうな些細な出来事が、予想外にこじれて大問題に発展したりする可能性も懸念されるらしい。

そのため、生徒たちのトラブルの解決に際しては、学校側に全幅の裁量権が委ねられているのである。

七章　武者震い

サダームはパリに？

三学期は、四月の下旬に始まった。

娘たちをスイスに送るころ、ヨーロッパではちょうど、この年のイースターの連休が重なった。軒並み閉店状態となったジュネーヴの繁華街では、誰もいないショップのウィンドーだけが、色とりどりの卵飾りでディスプレイされ、やたら華やいでいる。

歩き尽くしたはずの広場にも、この時期は、一夜にして突然、見慣れぬ移動遊園地がしつらえられたりする。柚と聖が顔を輝かせて、「カルーセルに乗りたい」とせがむので、ちょっと寄り道してみた。

カルーセルとは回転木馬の意味なのだが、スイスの移動遊園地では、回転するのは木馬だけとはかぎらない。うさぎやカエル、バイクやフェラーリ、果ては、聖の大好物の棒付きキャンディーの箱まで、全部一緒くたにグルグル回っていて、奇想天外というか、すこぶるポップである。（キャンディー屋さんがスポンサーなのかも？）

普段は大人ばかりが目に付くジュネーヴの街角に、いったいどこから湧いて出たのか、目を疑うほど大勢の子供らが、はしゃいで戯れている。

のどかな風景を眺めながら、私は、平和の有り難みをあらためて噛みしめた。というのは、今回スイスに到着するまでの道中が、いつになく大変なものものしい雰囲気だったせいだ。とりわけ、パリのシャルル・ド・ゴール空港は、かつてないレベルの厳戒体制が敷かれていた。

迷彩服を着て、本物の機関銃を背負った兵士が、至る所で徒党を組んで警戒にあたる。女性兵士も混じっているのを見て、ただ事ではないと感じたのか、柚は「怖い」と震え上がった。すると聖が、わけ知り顔でさらりと柚をなだめた。

「みんな、サダームを捜しているのよ。こんなにたくさんの兵士がいるんだから、私、サダームはきっとパリに隠れていると思うわ」

「そうかなあ。前にジャンポールが、ロンドンも兵士でいっぱいだったと言ってたけど」と、柚が反論する。

このところ、イラク戦争は激しさを増していたが、肝心のサダム・フセインが杳として姿を現さないため、アメリカを先頭とする連合軍は、フセインの行方捜しに躍起になっていた。また、実体の見えない敵が、いつどこで画策するかわからないテロに対しても、国際社会はピリピリ張り詰めていた。

日本にいると、そんな緊迫した空気に、じかに触れる機会は少ない。しかし、アラブに近いヨーロッパでは、子供にもキナ臭い異変を敏感に嗅ぎ取れるくらい、イラク問題は日常の

生活に浸透しているらしかった。

コナン君になった柚と聖

その証拠に、春休みで日本にいるときも、柚と聖は、イラク戦争を報じるCNNのワールドニュースの映像にとても関心を示し、毎日食い入るように真剣に画面を見ていた。

大人びたその様子は、七歳と六歳の子供とは思えない。カルーセルを見つけて嬉しそうに駆け寄る無邪気さとは、まったくアンバランスで別人みたいだ。まるでテレビアニメの、未来少年コナン君になってしまったかと、錯覚するほどだった。コナン君は、本当は高校生であるが、悪者の一味に体が小さくなる薬を服まされて小学生に変身させられてしまい、その姿のままで、次々に出くわす謎の事件を解くカギを推理する、名探偵である。

フセインが実際にパリに潜伏しているかどうかはさておき、ガレンでのインターナショナルな環境は、マルチリンガルを育てるのみならず、思考の面でも、年齢や国籍を瞬間的に飛び越えてワープする能力を養うのかもしれない。　或いは、四方を海に囲まれた日本と違って、さまざまな民族や文化や言語と大陸続きで接することのできる、ヨーロッパの地理的特異性

の為せるわざだろうか。

あどけなかった幼少時の娘たちの、屈託のない笑顔を思い浮かべながら、成長を素直に喜ぶ気持ちと、もうしばらく小さな子供のままでいてもらいたい気持ちとがせめぎあい、私は複雑な心境で、くるくる回るカルーセルを見つめていた。

ローザンヌでの受難

実は、パリの空港で武器を持つ兵士を見て柚が怯えた原因として、他にも気になる過去の出来事が思いあたり、私の胸は痛んだ。

それは前の年の八月、ガレンに入学するきっかけとなった最初のサマースクールの終わり際に、柚と聖を迎えにいった帰路に起きた。

その日は、飛行機の出発まで少しまとまった空き時間を、ローザンヌでつぶすことにした。ローザンヌは、スイスの金融の中心を担う都市であり、外国から赴任しているエリート銀行マンも多い。そのせいか、ジュネーヴよりもスノッブな空気が流れているように感じられた。

通りがかりの庶民的なレストランに入っても、子連れの東洋人である私どもに一瞥(いちべつ)をくれ

るなり、空席だらけにもかかわらず、「どのテーブルも埋まっているから」と断られ、体よく門前払いされたりした。

仕方なく駅前のマクドナルドで食事を済ませ、高台にあるノートルダム寺院を見学しに訪れた。そこから徒歩で駅に戻る途中、急な下りの坂道で、事件は起きたのだった。

夫と聖が並んで歩く後ろを、私と柚が手をつないで歩いていた。少し先の大通りに出るまでの間に、もう一本の細い道が合流する箇所がある。そちらの道を、ブロンドの髪をした大柄な白人の男が、急ぎ足でやってきた。

ちょうど合流のところで、男が、柚と私を追い越した。と、そのとき、柚とつないでいた私の手に、何か衝撃が伝わった。あわてて柚を見やると、固く目をつぶってガタガタ震えている。次の瞬間、柚が「ウワーン！」と、火でも点いたみたいに大声で泣き出した。

男がすれ違いざま、柚の頭に、ゲンコツを力まかせに振り降ろしたのだ。

「イエローモンキーはサル山へ帰れ」と、日本人を侮蔑するひどい言葉を添えて。

異変を察知した夫が、すぐに走って男を追いかけたけれども、路地に逃げられ見失ってしまった。

叩かれた頭の痛みもさることながら、浴びせられた英語の意味がわかる柚には、二重のショックだったらしく、夫に抱き上げられた格好のまま駅に着いても、かわいそうに、しば

らくは泣きじゃくってばかりで、ものも言えない状態であった。

この悲しい体験を通して、きっと柚は学んだのだ。罪もなき子供にまで及ぶ、人種差別の理不尽さ、根の深さを。異国の地は、一刻たりとも気を許して歩けないくらい、危険に満ちていることを。

日本という、単一民族・単一言語の、類い稀なる温室国家に保護されているうちは考えもしなかった、グローバルな厳しさに触れ、そこから危機を回避して身を守る術の必要性を、本能的に感じ取ったに違いない。

海外では、誰も助けてはくれない。頼りになるのは自分だけ。

幼いながらも、そう悟った柚は、もはや、ただ無邪気なだけの子供ではいられなくなったのだろう。われわれ家族にとっても、大きなトラウマとなった残念な事件ではあったが、柚はその教訓を経て、目覚ましく成長したのだと、私は信じたい。

さて、これで終わったのでは、良い印象のないローザンヌがちょっと気の毒なので、ローザンヌの名誉回復を兼ねて、後日譚（ごじつたん）を書き添えておく。

私どもが、再びローザンヌに足を向けたのは、それから一年半後。レマン湖を横断して対岸のフランス領エヴィアンに行く、定期航路の船に乗るためであった。そのころには、柚と聖はすっかりフランス語をマスターしていて日常会話は不自由しなかったし、夫と私も場数

を踏んだ分、いくらか毅然と、隙を作らず注意深く振る舞えるようになっていたと思う。

するとどうだろう。あんなに嫌な街だったはずのローザンヌが、嘘みたいに一変した。人びとは親切だし、レストランではにこやかに応対してくれる。

郷に入っては郷に従えじゃないけれど、快適な居心地を求めるならば、新参者のこちら側も、それなりの近付き方があるものだと、私は痛感させられた。そして、初回のローザンヌでのショッキングな出来事を振り返るにつけ、私が冴えない身なりで油断し切って無防備に歩いてさえいなければ、柚は、まんまと暴漢の標的になったりせず、頭も心も傷つかずに済んだだろうにと、悔やまれてならない。

「パパ、お仕事に行ってもいいよ」

学期の始まる日に生徒たちが集合するミーティングポイントは、ジュネーヴ空港の一階到着ロビーの片隅に位置する。そこには誰でも自由に使えるテーブルと椅子が何組も常備されているので、待ち合わせするのにとても便利なのだ。

いつもたいてい、メアン家の跡取り息子のクリストフと、パウラやパトリスら数人のスタッ

フが、到着ロビーで待ち構えていて、国際線の飛行機が着くたびに、ゲートから現れるガレンの生徒に声をかけ、ミーティングポイントの椅子に次々と手際良く座らせる。各便の到着時刻がまちまちなので、早めに着いた生徒は、全員がそろうまで二〜三時間程度そこで待ってから、みんなでスクールバスに乗ってガレンへ移動する。

スイスのフランス語圏にあるボーディングスクールは、多くの学校が、同じ日に同じ場所を生徒のピックアップに利用するため、ジュネーヴ空港の到着ロビーは、寄宿生の親子とお迎えの学校関係者でごった返している。

でも、ガレンの場合は、山のように巨大な体躯のパトリスが、人混みから頭一つ分、抜きん出てランドマークとなり、真っ先に見つけることができる。パトリスを目指して人波の中を突き進めば、彼の麓には、小柄なパウラがセットでくっ付いている、という仕組みなのだ。

この朝早くスイスに着いた私たちは、イースターでにぎわうジュネーヴの街をぶらぶらしてから、お昼近くになって、空港のミーティングポイントへ柚と聖を送り届けた。

パトリスの姿が目に入った途端、娘たちは彼めがけて走り出したい衝動にかられたのか、ソワソワし始めた。ついに我慢の尾が切れるや、

「パパ、ママ、じゃあお別れね」と柚が手を振り、

「パパ、もうお仕事に行ってもいいよ」と聖が投げキスをして、ふたりは一目散にダッシュ

する。

聖がこう言ったのには深い意味があった。

私がクリニックを開業してしばらくは、夫が休職して育児を手伝ってくれたので、聖は、赤ちゃんのときから父親が家にいるのが当たり前みたいな環境で育った。プリスクールへも夫が送り迎えしていたからか、すっかりパパっ子である。

ガレンに留学後も、長期休暇で日本に帰国したおりなど、復職した夫が朝、出勤しようとすると、聖は違和感があるらしい。「パパ、何で聖を置いてお仕事に行っちゃうの？」と駄々をこねて、手こずらされたりする。そのパパに、自分がスイスに出かけて留守の間は、ずっと家にいてくれなくても大丈夫よ、とメッセージを伝えたわけだ。

夫は黙って苦笑している。

大男のパトリスは、柚と聖が「ボンジュール！」と駆け寄ると、決まって高々と抱き上げてくれるので、二人は彼が大好きだ。パトリスの両手にぶら下がらんばかりにまとわりついて、積もる話を聞いてもらおうと、順番の取り合いっこが始まる。パトリスは、腰を大きく折り曲げて覆い被さるように、ふたりの休暇中の出来事報告に耳を傾ける。そばからは、先に到着して待ちわびていたリザとベラが、弾丸みたいな勢いで、嬉しそうに柚と聖に抱きついてくる。泣き虫のリザとは、短い休暇のあとでも涙の再会となり、柚が笑いながらリザの顔を

のぞき込む……。

夫と私は、目の前で毎回繰り広げられる一連の光景を、完全に傍観者となって見届けてから、そっと場を離れる。娘たちに背を向けて遠ざかりつつ、時折、それとなく後ろをうかがってみる。しかし、柚も聖も、こちらを振り返る気配はまったくない。

「これで良かったのだ」と、なかば安堵しながらも、視界の中の二人が豆粒ほどの大きさになるあたりで、私は寂しさがこみ上げて、やっぱり少し涙ぐんでしまう。すると、夫が言った。

「柚と聖には、確信があるんだよ。いつでも振り返りさえすれば、両親は絶対に自分を見ている、ってね。だからこそ安心して、われわれから離れてもこちらを振り向きもせずに、駆け出していけるのじゃないかな」

この七年間、子供と真剣に対峙して、揺るぎない信頼関係を築いた、彼ならではの言葉が、私の胸にしみじみと沁みたのだった。

武者震い

長女の柚は、成長するにつれて自分を取り巻く状況がわかってきたせいか、今回は意味深

な発言を残して旅立った。

ある日、彼女はこんなことをつぶやく。

「私ね、ガレンにいると突然、私は何故、日本でパパやママと一緒にいるんじゃなくて、スイスに聖ちゃんとふたりでいるんだろう、って考えちゃうときがあるの。そんなふうに考えるのはいけないかなあ」

「ううん、ちっともいけなくなんかないわよ。そうやって、なぜかしらって考えるのは、柚が大きくなった証拠なんだから。たくさん考えて、答えを思いついたら、ママにも教えてちょうだいね」

私は咄嗟にそう言ったけれど、いったいどんな答えを出してくるだろうと、心の中ではドキドキした。

また別の日には、次のようにも。

「私、学校が始まるときスイスに着くと、どういうわけか、必ず身体がブルンと震えるの。そうやって一度震えたあとは、不思議に、寂しくても頑張ろうって思えるのよ。去年の九月にガレンに転校してから、いつも同じなの」

「あ、それはね、日本語で、武者震(むしゃぶる)いっていうのよ」

「むしゃぶるい？」

「うん。何かに挑戦する直前に、ブルンと一つ身震いして、やる気を奮い立たせる瞬間って、誰にでもあるのよ。そうやって、私はこれから頑張るぞぉー！って、自分で自分に気合いを入れるのね」

「ふーん。武者震いって名前が付いているんだ」

妙に感慨深げな納得顔で、柚は頷いた。

（そうだったのか……）夫と私は、顔を見合わせた。小さかった六歳のころから、武者震いをして、自分なりに気持ちを切り替えていた柚。親の知らないうちに、孤軍奮闘してきたんだなぁ。

私たちは、そんな柚の健気な一面を垣間みて、いじらしくてたまらず、今回は余計にお別れが堪えたのだった。

子育ての目標を、子供が親を越えるところに置くのであれば、この時点で我が家はもう、とっくに追い越されていると思った。しかし、夫と私の子育ての目的は、それでは達成されない。柚と聖が、真に自立した人間に育ってくれること。これこそが、我々の求めている最終ゴールである。

私は、結構な高齢で子供を産んだので、一般的な順序から考えると、柚と聖は、両親との永遠の別離が普通の家庭より早くやってくるはずだ。厳しい現実を、否が応でも余儀なくさ

れるだろう。それまでに、独りでも強く生きられるだけの、生命力・精神力・生活力を、十分に培ってやることが、親にできる、せめてものつとめだと認識している。

この責任感が、夫と私を駆り立てている原資なのかもしれなかった。

二人分の学費に圧迫されて超緊縮財政となった私どもでは、柚と聖に豪邸や大金を遺してあげられる目処は立たないけれど、親が生きているうちに最良の教育や経験を与えるやり方が、我が家流の財産分与であり遺言状だと、いつか彼女たちはきっと理解してくれる。ひたすらそう信じて、亡父から受け継いだ築三十年の年季の入った旧式診療所で、せっせと働く私である。

アルプスのパラセール

三学期は短い。正味二ヶ月間である。

あたり一面の銀世界で毎日スキーをしていた二学期とは対照的に、美しい春を迎えたヴィラールは、可憐な高山植物の花と緑で埋め尽くされる。

暖かな陽気に誘われて、ガレンでも、生徒たちが興じるスポーツは、より活動的なものへ

と移り変わる。

ある日の電話で、聖が興奮気味に言った。

「今日はパラセーリングをしたのよ。聖、上手にできちゃった」

「へえ、いいなあ」と、うらやましそうな夫。

ウィンタースポーツほどには知られていないが、雪のない季節のスイスは、パラセールなどウィンドスポーツのパラダイスである。雄大なアルプスの景色にボーッと見とれていると、突然その静寂を破って、山頂からいくつものカラフルなセールや、時には気球までもが、続々と降ってくることが、しばしばある。

そのようなお国柄であるから、学校のカリキュラムには、この系統のアクティビティーや、ロッククライミングとかアスレチックコースのハイキングなど、スイスならではの地形を生かしたスポーツがふんだんに取り入れられる。

おかげで、運動音痴の聖でも、スポーツ万能少女に変身を遂げるわけだ。しかも、彼女の感想はいつも、「聖、上手にできる！」なので、「本当かなぁ？」と眉唾ながらも、思わず笑ってしまう。けれども、柚に聞くと、あながち嘘でもないらしい。

四歳の時にＬＤかもしれないと指摘されて以来、学校で劣等感の塊になってしまうのではないか、消極的な子供に育ちはしないか、と危惧された聖は、そんな心配をよそに、持てる

能力を最大限に発揮して、伸び伸びと成長している。

パラセールを背負い、スイスの大空にふわりと舞う柚と聖の姿を想像するまでもなく、夫と私の視界の中には常に、翼を広げて自由自在に自分の空で羽ばたく娘たちがいる。アルプスの風に祝福され人生の着地点もうまく見定めてくれるよう、願う私であった。

夏休みの準備

そうこうしているうちに、私は、娘たちの夏休みの過ごし方について、そろそろ具体的に考えなくてはならないことを思い出した。

三学期は短くて、二週間ほどのショートトリップと、学年末の試験やお別れパーティーが済むと、すぐにお迎えとなり、柚と聖は日本に帰ってくる。その後、三ヶ月も続く長い夏休みが控えているのだ。

メリハリをつけるために、夏休みを三つの期間に区切り、何をさせるか、計画を立ててみる。夫と検討した結果、まず前半の一ヶ月は、日本国内のインターナショナルスクールのサマースクールに参加し、真ん中の一ヶ月は水泳教室に通い、後半の一ヶ月で漢字をマスターする、

というプランに落ち着いた。

水泳教室と漢字は、近所のプールの講習と、自習用の参考書を与えることで解決したが、問題はサマースクールだ。家から通える学校は三校あり、どこにするか、早めに見当をつける必要があった。

日本のインターナショナルスクールが主催するサマースクールの申し込みは、たいてい五月いっぱいで締め切られる。

実際に開かれる時期は、多くは六月末から四週間ほどだ。内容は、英語と算数、スポーツ、コンピューターなどの授業の他に、水族館や動物園への遠足とか、地元の私立小学校との交歓会があったり、学校によっては二泊三日のキャンプが盛り込まれていたりと、通常のカリキュラムとは異なるイベントがいろいろと予定され、夏休みらしいスケジュールとなっている。そして最終日には、サマースクールの集大成ともいうべき歌や寸劇の発表会が行われるのが定番だ。

柚と聖は、前年の夏休みはガレンで過ごしたので、日本のインターナショナルスクールのサマースクールに参加するのは、神戸の学校以来二年ぶりとなる。そこでは前回、予想もしていなかった聖のＬＤを示唆され、あまりにも無知な親であった夫と私は、真っ暗闇に突き落とされたのだった。

けれども、それがきっかけで、われわれはＬＤに関して猛勉強して、余計な回り道をせず最短距離で聖に合う学校を見つけ出し、絶望の淵から這い上がることができた。

柚と聖がスイスへ留学してから一年、順調な成長ぶりを目の当たりにするにつけ、私は神戸の学校に対して、言葉には尽くせないくらいの感謝の念を、心密かにふくらませてきた。今回のサマースクールの機会に、どうしてもあのときの関係者の方がたにお礼を申し上げたい気持ちが、ふつふつと湧いていた。

「そうだ。もう一度、あの学校を訪ねてみよう」

門前払いされるかも知れないと懸念しながらも、私は恐る恐る、神戸のインターナショナルスクールに、サマースクールの申し込みの電話をかけたのだった。

八章　世界で生きられる子供たちに

再び、神戸のサマースクールへ

二年前、聖の担任として、彼女の問題点をズバリと見抜いてくれたキャシー先生は、当時と同じく、サマースクールの主任をつとめておられた。校長のアイリーン先生や事務室のN嬢ともども、柚と聖をよく覚えていてくださった。

私は、あれから娘たちがスイスへ留学した経緯をざっと説明し、あらためてサマースクールに参加を希望する旨、お願いした。すると、キャシー先生は快諾し、「ユズとセイがスイスから帰ったら、すぐに連れていらっしゃい」とおっしゃった。その上、今回も聖の担任を引き受けていただけるという。ありがたいお話に、私は受話器に向かって深くお辞儀した。

聖というのは、ことごとく先生運に恵まれる不思議な子だと思った。

六月下旬に、柚と聖は日本に帰国した。

私は早速、二人を連れて、神戸のインターナショナルスクールへキャシー先生を訪ねた。柚と聖は、キャシー先生との再会を、とても喜んだ。

聖にとっては、ここはガレンの次に好きな学校である。二人は、ガレンの一年分の成績表や授業で使ったワークブックなどを持参して、充実した寄宿舎生活の様子を、楽しげに先生

に報告した。

「九月からまたスイスに戻りたいの？」という先生の質問には、二人とも、少しも躊躇せずうんうんと頷きながら「イエス！」と元気良く答えた。

先生は目を細めて微笑み、私に向かってこうおっしゃった。

「ユズもセイも、ガレンに行ってから、素晴らしく成長している。特にセイが、算数をすらすら解いたり、長文を正しいスペルで書いたりするほどになっているのが、私には驚きでした。お母さん、とうとうセイに合う学校を見つけましたね。よくやったわ」

「いいえ、先生のお蔭です。その節は本当にありがとうございました」

私は、心を込めてお礼を申し上げた。偉大な教育者であり、我が家の恩人でもあるキャシー先生に、ずっと言いそびれて持ち越したままだった感謝の気持ちを、ようやく直接伝えられた。そのことが、何よりも嬉しかった。

柚と聖が最も戸惑うリクエスト

真夏の神戸で、再びサマースクールが始まった。柚と聖はこの学校で、たくさんの友人を

作り、夏休みを大いにエンジョイした。

ある日、お迎えで一緒になった日本人のお母さん方と雑談していると、誰かが言った。

「柚ちゃんと聖ちゃんは、姉妹の間でも日本語は一切使わずに、英語とフランス語だけでお話ししているって、うちの子から聞いて、驚いちゃったわ。どうやったらそんなふうになれるの？」

そう問われて、私は一瞬、返答に窮してしまった。その場で長々と説明するのも面倒なので、「小さいから、日本語を忘れるのも早かったんでしょ」と、笑ってかわした。しかし、私の脳裏には、柚と聖が、スイスに渡る前から英語でしか会話ができなかった（聖が日本語を使えなかった）過去が、昨日のことのように鮮明に蘇った。

あのころはどうしていいかわからないほど悩みが深かったのに、あとになるとそれが生きてこうやって評価されるわけだから、おかしなものだ。何が良くて何が悪いかという価値観なんて、所詮（しょせん）は表裏一体なのだ、マイナス因子だって何でもプラス因子に転じるチャンスや方法があるに違いない、と感じたひとこまであった。

幸い、スイスに留学するのとタイミングを同じくして、聖の日本語はめざましい進歩を遂げ、今ではまったく問題なく駆使できるまでになっている。それが証拠に、日本に帰っている間は、柚と話すときこそ英語が主であるものの、夫や私との会話は終始、日本語だけで成り立っている。

ところで、言葉に関して、柚と聖が帰国中によく受けるリクエストは、しばしば彼女たちを戸惑わせる。それは、「柚ちゃん、聖ちゃん、ちょっとフランス語で何かしゃべってみてよ」というものだ。

口にするほうは、社交辞令のつもりで気軽に言うのかもしれない。或いは、日頃あまり馴染みのない言語に対して興味津々といったところなのか、日本の人は実に頻繁に、この台詞をおっしゃる。

けれども、まさに国際的な環境で生きる柚と聖にとっては、他国語で話すことは、もはや、特技ではなく、単なるコミュニケーションの手段に過ぎないのである。だから、彼女たちのフランス語は、フランス語による会話が成立している流れの中でしか引き出されない。

わかりやすい立場に置き換えて考えてみよう。日本人が海外で、現地語で会話をしている際に、相手の人から、前後の脈絡もなくいきなり「ちょっと日本語で何かしゃべってみてくださいよ」と声をかけられたとしたら、どうだろう。何を言ったらいいのか、即座にひらめいてすらすら話せる人など、少ないと思う。大半の人は、グッと言葉に詰まってしまうのではないだろうか。

そういうわけで、柚と聖は、このリクエストを受けるたびに、困った表情で苦笑を浮かべ、ただ無言で肩をすくめる以外に、為すすべがないのである。

サマースクールの終わりに

楽しく通った神戸のサマースクールは、いよいよ最終日を迎えた。講堂で行われた発表会のステージを見終えて、キャシー先生にお別れを告げると、先生は柚と聖を抱きしめ、「さようなら。また来年もいらっしゃい」と、言ってくださった。

その後、われわれは三ノ宮の大型書店に向かった。

ここは以前、夫と私が絶望感に打ちひしがれながら、LDに関する本を片っ端から買い漁ったお店である。あのどん底の日から二年、今回は、柚と聖のたっての希望でやってきた。

二人は張り切って、夏休み明けにスイスに持っていく本を選んだ。買い物カゴをのぞくと、英語で書かれた『ハリーポッター』のシリーズが数冊、フランス語訳の『千と千尋の神隠し』、それに、アニメのポケットモンスターのフランス語版まで入っている。日本語のものが含まれていないところに、寄宿舎のみんなと回し読みするためという意図がうかがわれる。

「もういい加減にしろ。これでおしまいだぞ」と夫がストップをかけたが、まだ他にも買いたい本があると言って、柚と聖は辞書の売り場へと移った。どうやら、こちらのほうが主目的であったらしい。

そこで二人はさらに、英英、英仏、英独、英西、英露、英伊の辞書を、カゴの中にポンポン追加する。ガレンの同級生の母国語を勉強して、彼らをもっと理解し親しくなりたいから、どうか全部買ってね、とねだられ、仕方なく財布を緩める。

果たして九月の新学期、柚と聖はそれらの本を一冊残らずバッグに詰めた。ずっしりと重くなった荷物を運ぶのは、夫の役目である。

「本当にしっかり勉強しろよー」と、彼が娘たちに念を押したのは言うまでもない。

もうストレンジャーじゃない

三ヶ月間の夏休みが終わり、娘たちは嬉々としてスイスに旅立った。

夫と私は、いつもと同じエールフランスで、ジュネーヴ空港まで二人を送ったのだが、最初の年と明らかに違うのは、「もはやわれわれは現地でストレンジャーじゃない」と、強く感じたことである。

ジュネーヴの市街はもちろん、乗り継ぎのパリの空港や時間つぶしに入ったカフェですら、ガレンのクラスメイト親子や、先生がたと出くわす機会が相次いだ。夫と私にとってはまっ

たく見ず識らずの外国人から、いきなりにこやかな笑顔で、「ユズ！　セイ！　元気だった？」と、再々呼び止められ、娘たちがそこここで肩をつかまえられてハグされる。

「パパとママ？　ボンジュール！」などと握手を求められるに至って、私は、柚と聖が着実にかの地にたくましく根っこを張って、子供なりの知恵と勇気で立派に社会に溶け込んだことを、つくづく思い知らされた。スイスにはもう、ふたりが親の手を離れて自力で築いた生活基盤が、揺るぎないものとなってしっかり形成されているのである。

まだたった百三十センチと百二十センチほどの身長しかない小さな娘たちが、私には、とてつもなく大きく頼もしく感じられ、まじまじと見直してしまった。

生徒の入れ替わりが激しいインターナショナルスクールにおいて、柚と聖は、送り迎えの回数を経るうちにだんだん古株の生徒となり、空港の待ち合わせポイントでも不馴れな新入生をさり気なくサポートしてあげられる余裕が出てきた。

二年目に入る娘たちのスイス暮らし。

親も子も、すっかりこの日常のペースに慣れて、何事もなく平穏にさらさらと、これからも日々が続く気がしている。夫と私は、もうとっくに柚と聖に追い越され、さらにぐんぐん引き離されていくのが、嬉しくもあり、もどかしくもあり、といった心境である。

子供って本当にすごいエネルギーを秘めているものだと、送り迎えをするたびにあらため

て認識させられる。

そう！　環境さえ整えてやれば、いくらでも伸びてくれるのだ。われわれが最初のサマースクールで抱いたその直感は、以後も裏切られることなく、今や確信に変わりつつあった。

世界で生きられる子供へ

かつて私は、父方の祖母から、苦労話を繰り返し聞かされたものだ。終戦直後の物資も乏しい中で、学費を工面して、息子である私の父を、大阪から遠く離れた静岡の旧制高校にやるのが、いかに大変だったかを。

その父は、新幹線のなかった時代に、ほぼ一日がかりで、実家と寮を往復していたという。時は移り、祖母も父も故人となった現代においては、柚と聖が、父と同じ所要時間で、日本からスイスまで通学している。まさに、ボーダレス化のもたらした恩恵である。

その昔、親族の間ではパイオニアと称された祖母の血が、脈々と受け継がれて私にも流れているのを、はっきりと自覚する一方で、当時とは比べ物にならないくらいの利便性を享受する娘たちが、ちょっと羨ましくもある。

けれども、どれほど隔世の感はあろうとも、旅立つ子供を見送る親の思いは普遍的であるはずだ。おそらく、六十年前の祖母の心情と、何ら変わりないものであろう。

さて、柚と聖が大人になるころには、どんな世相になっているのか。輸送手段のさらなる発達にともない、海外に進出する日本人はもっと増え、小さい年齢での留学も、それほど珍しくなくなっているかもしれない。

夫と私が、一大決心のもと、五歳と六歳の娘たちを送り出したスイス。

柚と聖の二人だけでスタートしたガレンの日本人は、徐々に仲間の輪が広がり、二年後には六人になった。インターナショナルスクールから来たケースもあるが、多くは普通の日本の小学校に通っていた子供である。みんなそれぞれ、家族の深い愛情に支えられ、自分の翼で勇ましく羽ばたいて、冒険の旅に飛び出したのだ。

先日ジュネーヴの街角で、たまたまお知り合いになった日本人の年配のご婦人は、柚と聖の頭から足先まで、しげしげと眺められ、「へえー！　スイスには、こんなに小っちゃくても入れてくれる寄宿舎学校があるんですね」と、びっくりされていた。でも、彼女がタダモノじゃなかったのは、驚くだけでは済まさず、その年の夏、小学生のお孫さんを三人も、ガレンのサマースクールに参加させたところである。

ボーダレスの未来に、世界で生きられる子供へ。果てしない可能性を求めて、実行力のある人は既に着手し始めているのだ。

前の項で、「このままさらさらと平穏に月日が経つのではないか」と私が自分で書いたことが、実は幻想（願望？）に過ぎないのだと、私にはよくわかっているつもりである。柚と聖はこれから、まだまだ未知の大海へ漕ぎ出していくのだということを。いくつもの岐路があるに違いないということを。

しかし、困難にぶつかり迷うたびに、夫と私はきっと絆を強くして立ち向かうだろう。柚と聖の秘めたる未曾有のパワーに励まされながら。

親は、子供で二度生きる。

あなたは、自分の子供になりたいですか？

検証　五歳と六歳のスイス留学

七年が過ぎて

我が家の二人の娘・柚と聖は、今から七年前、五歳と六歳のときに、スイスのボーディングスクール、ラ・ガレンに旅立ち、日本に住む私ども両親とは離ればなれの留学生活が始まった。幼・小児を持つご家庭で最近流行の親子留学とはまったく異なる、この年齢の子供だけ単独の正規留学は、年上の仲間とともに六歳でアメリカに出発した津田梅子と並び、日本人としては最年少ではないかと言われている。

夫と私にとってはもちろん、心配の連続だったし、寂しさに堪え難い日もあったけれど、娘たちもこの試練をよく乗り越えてくれた。ガレンでの学校生活が、それだけ素晴らしく、充実していたからであろう。

殊に、幼稚園児から小学校中学年くらいまでの小さな子供だけを対象とした、スイスに独自の、特定のインターナショナルボーディングスクールは、大変こぢんまりした少人数の規模である上、あまり表立った生徒の募集を行わないため、日本ではその存在すらほとんど知られていないが、語学のみならず各教科全般にわたって、とてもこまやかで質の高い教育を施してくれる。また、アルプスの壮大な自然に囲まれセキュリティーとプライバシーが守ら

れた環境の中、国籍や階級にとらわれないこの年代の子供同士ならではの、素朴で温かい交流や、伸び伸び生き生きとしたふれあいを通して、吸収し学ぶものはいかに大きく意義深いことかと、私どもでは日々実感する次第である。スイスにおいては、五歳と六歳が、留学を開始するベストエイジであったのだとさえ、今でも思うほどだ。

柚と聖は、実り多き幼少時代をガレンで三年間過ごしたあと、スイス留学を終えて帰国し、日本国内にある歴史の古いインターナショナルスクールに転入した。前の章までは主に、ガレンでの最初の一年間に照準を合わせて、留学するに至った経緯も織り交ぜ、心に残った出来事や娘たちの言葉など、折々のエピソードを拾い集めて書き上げた。

それらを通じて私が伝えたかったのは、ガレンでの二人の様子もさることながら、幼い我が子を遠い外国に旅立たせるに至る、親の覚悟、託す思い、それに応えて成長する子供を見るたびに湧く喜び……、すなわち、ひと言で表現するならば、『親の心意気』のようなものである。だからこそ、実際の留学生活を描写する部分も、あえて子供の目線に軸を移すことなく、あくまでも親の視点にこだわった。

ちなみに、夫が唯一この本の中で執筆を担当した『エピローグ』の、「フロム　ダッド（父より）」の署名は、彼が常々、スイスにいる娘たちと英文でメールをやり取りした際に用いていたのを、そのまま引用したものだ。彼にとっては、娘たちに贈るいくつもの想いがにじみ

出る、万感を込めた呼称である。

二十五歳を指標に始めよう

夫と私の子供時代は、暗記と詰め込みが主体の受験社会であった。私たちはその中で揉まれながら、ともに医学部を卒業し、医師として働いている。

しかし、我が子を育てる親の立場になってみれば、自分と同様の軌跡をなぞらせるだけでは、これからの時代を渡って歩くには不十分だと感じた。そこで、子供の教育を考えるにあたり、娘たちが二十五歳になったころの社会状況を想定することから始めた。

グローバル化が進み地球上のあらゆる距離がさらに縮まっているであろうその時代に、世界人として生きられるためには、次のような能力が求められるのではないかと考えた。

- 発想力・創造力
- 暗記した知識でなく、論理に基づく思考力
- 本質を見抜く力（問題発見力）

- 情報検索力
- 問題解決力
- 独自の結論を導き出す考察力
- 他人を納得させうるプレゼンテーション力
- 世界語としての英語力（＋第二外国語力）
- ＩＴ能力
- 人脈（を得る）力

娘たちをそういった面で育み鍛えてくれる学校をさがした結果、年齢が離れ文化も異なる子供が一緒に生活するボーディングスクールが最も適していると思われた。そのため、長女が誕生した直後から、「ボーディングスクールに留学させる」という目標を定めて準備をスタートしたのだった。

とはいえ、日本の学校が最初から眼中になかったわけではない。学校行脚の過程で、いくつか見学に出向いたりもした。二日しかないお休みの間に、静岡と東京と沖縄の学校をハシゴしたこともある。しかし、娘たちを託すには至らなかった。

私は、日本の学校には二つの問題点があると考えている。

一つめは、実際に行われている教育内容が、（進歩しているだろうと期待したものの）先ほど述べた能力を獲得しやすいようには設定されていない現状。

二つめは、人びとの平等意識が強く、出る杭は打たれがちな社会風潮の中、上昇志向というものが、健全な意欲を開拓し、地道な努力を引き出すための、プラス要因として評価されるとは限らない雰囲気。

これらがネックとなって、伸びたい・伸ばしたい才能を秘めた個人を、ぐんぐん伸ばせるような環境の整備が、十分になされていないと感じるのだ。

以上は、あくまでも我が家の例に沿って論じたに過ぎない。何をゴールに定めるかは、各家庭で異なるだろう。けれども、いずれの場合でも、子供が大学を卒業し社会に出るころ（二十五歳くらい）の世界を念頭に置いて計画することは、重要なポイントではないかと、私は考える。

子供が現在、

- 十五歳なら、二〇一八年の世界を。
- 十歳なら、二〇二三年の世界を。
- 五歳なら、二〇二八年の世界を。
- ○歳なら、二〇三三年の世界を。

どのような人間になっていてほしいだろうか？
どのような能力が必要とされるだろうか？
……そのころにフォーカスを合わせ、教育プランを組み立てよう！

学校だけで完結するボーディングスクール

我が子をボーディングスクールに留学させたメリットとして、「学ぶべき課題が学校だけで完結」したことが挙げられる。これは一見、簡単みたいだが、ゆとり教育が導入されて以来、公教育への信頼性が揺らいでいる日本では、なかなか達成しにくい気がする。

最低ラインにそろえて均された公教育を補うために塾が台頭し、お受験ブームが低年齢化するさなか、二児の母親となった私には、『子供の保育と仕事』のみならず『子供の教育と仕事』をいかに両立させるか、という悩みが、大きくのしかかった。※塾やお稽古事の予・復習のサポートと送り迎えをするため、仕事の合間を無理してやり繰りし何とか都合をつけるのに、たくさんの時間と費用とエネルギーを消耗した。しかし、思い切ってボーディングスクールに留学させたおかげで、この問題はすっきり解決できた。

余談だが、私のように仕事を持つ母親にとっては、公教育と、塾やお教室との、ダブルスクール構造が当たり前になった現在の日本で、いくら『子供と保育と仕事』の両立が図られ、それを少子化対策だと唱えられても、片手落ちの感が否めない。『子供の教育と仕事』の両立が難しいところが、働く女性に産むことを躊躇させている要因ではないかと私はにらんでいるからだ。保育園や学童保育の受け入れ人数枠が広げられようとも、「どうやら子供を安穏とそんなところに預けたまま仕事をしていて済むはずがなさそうだぞ」と、多くの女性が勘付き、「仕事を続けたい私には、お母さん業はつとまらないわ」と怖じ気づいているのではなかろうか。

ガレンでは、放課後になると担当教師が専属でホームワークを見てくれたし、お稽古事に該当するプライベートレッスン（課外授業）もいろいろ用意されていた。プライベートレッスンを受け持つのはガレンのクラス担任の先生ではなく、プロの講師なりインストラクターなりが定期的にガレンを訪ねるか、或いは各スポーツ専用施設までガレンのスタッフが生徒を送迎していた。その上、本場アルプスの気候を生かしたスキーやスケートなどのウィンタースポーツが必修科目として正規のカリキュラムに組み入れられ、生徒たちは冬場の午後をほとんど毎日ゲレンデで過ごした。アルプスの良質な雪は、インドやアフリカなど暑い地域からやってきた生徒をも、いっぱしのスキーヤーに育て上げる。

このように「学ぶべき課題が学校だけで完結」した結果、母親が家で『教師』を兼ねる必

要がなくなる。子供と接する時間はたっぷり「本来のお母さんの役目」に徹することができて、母子関係にゆとりが生まれる効用がある。

お受験が幅を利かせる社会で生きる日本の幼児や小学生は、学校でも塾でもおうちでも、四六時中まわりは『教師』だらけで、息が詰まる毎日を過ごしているのではないかと危惧される。仕事の有無にかかわらず、母親が日常、「我が子にお勉強を教える」という役割から解放されれば、時間的にも精神的にもどれだけ緊迫しない母子関係が築けるかと、私は自らの経験をかえりみて痛感している。家庭にまで『教師』は要らないと思うのだ（もちろん、親が当然担うべき「しつけ」や「人生の先輩としての教え」などを伝授するのは別問題であるが）。

「ボーディングスクールの親業」はやめられない！

ガレンのプライベートレッスンに端を発して、柚はビオラと乗馬、聖はバイオリンとテニスを、その後も続けている。姉妹のビオラとバイオリンは、現・在籍校のオーケストラに加えてもらえる程度の腕前になった。英語やフランス語とともに、楽器やスポーツもまた世界中で通用する雄弁なツールとして、彼女たちの行く先々で身を助けてくれている。

ボーディングスクールの学費を維持するのは、どこの親にとっても大変で、なかなか厳しいものがある。我が家も例外ではないが、娘たちのために貴重な時間と経験を買ったのだと考えることにして、散逸することのない財産を持たせてやれたと満足している。

「時間を買う、経験を買う」その醍醐味は、いったん取り憑かれるとハマッてしまうほど奥が深く、計り知れないものだ。子供を通じて見聞するボーディングスクールの世界は、あたかも自分がまったく別人になって人生を一から生き直しているかのような刺激をもたらしてくれる。ひとたびボーディングスクールの親業を経験してみれば、誰もがそんな魔力を実感なさり、のめり込まれることだろう。

低年齢対象のボーディングスクール

二〇〇一年に留学を開始した当時、五歳と六歳の女児のボーディングを受け入れてくれる学校は、われわれが調べた限り、世界に三校しかなかった。そのどれもがスイスである。【※注 男児にも対象を広げれば、五歳以上ボーディング可の学校が他にイギリスにも一校、存在した。】

柚と聖がガレンに入学したとき、二人が配属されたブリティッシュクラス二学年分の生徒

の合計人数は十一名（一年生四名・二年生七名）であった。これら十一名の生徒の母国語は、英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語・インド（ヒンディー）語・スペイン語・日本語の、七ヶ国語に及ぶ。

といっても、言語の面だけ取り上げれば、日本国内を含む世界中のインターナショナルスクールでも珍しくなく、もっと多言語・多国籍の学校もあるだろう。それに、何ヶ国から生徒が集まろうとも、学校の授業は英語とフランス語だけで行われ、それ以外の言語の介在はないのだから、「母国語なんてあまり関係ないのでは？」というご意見が出るかもしれない。

でも、ガレンのすごいところは、単なるインターナショナルスクールでなく、低年齢だけ対象のボーディングスクールだという点である。

ガレンの生徒は、ボーダー（寄宿生）が大半を占めている。ボーダーの中には、英語が母国語であるイギリス人やアメリカ人、フランス語が母国語であるフランス人の生徒が含まれているが、全体の人数に占める割合はさほど多くないし、年齢が小さいので、ネイティブスピーカーでない生徒も気後れせず溶け込むことのできる人間関係が、見事に築かれている。

英語もフランス語もほとんどできない状態でやってきた子供ばかりが、一日二十四時間ずっと一緒に生活するのだ。大きい生徒なら、言葉が通じない最初のうちは黙りこくってやり過ごしてしまう場面でも、臆することを知らない小さい子供は黙っていない。日常のあらゆる

シーンで、何ヶ国語もの母国語が声高に飛び交うことになる。しかも自国民であるスイス人の生徒の比重は極端に少なく、どの子もみんな、お客様扱いにならず優劣のない立場で、お互いを認め合いながらそれぞれに個性を発揮し主張する。彼らが英語やフランス語という共通言語を持つまでの過程で、独特の強い絆が作られるのだ。

こんなボーディングスクールが、スイス以外に存在するだろうか？

イギリスにもアメリカにもオーストラリアにもカナダにもフランスにもボーディングスクールはあるけれど、たいていはネイティブスピーカーの自国民の生徒がたくさんいるところへ、英語やフランス語が第二言語である少人数の外国人留学生が、お客様として迎えられる（加えてもらう）格好であろう。

独自の留学環境を作り出す三条件

このような状況から、「低年齢」「スイス」「ボーディングスクール」という三つのキーワードがそろったとき、他の条件で留学するのとは違う、特別の成果が得られるのを、私は実感している。

ただでさえスイスのボーディングスクールは、自国民の生徒の影響がほとんどなく、どこの国から来た生徒にとっても対等の友人関係を結びやすいというメリットがあるところへ、さらに、知識の吸収力や環境への適応力が高く他人に対して物怖じせずに関われる低年齢という特徴が重なると、

「この年齢だからこそ」

「スイスだからこそ」

「ボーディングスクールだからこそ」

実現する留学環境が生まれる。

たとえ、スイスのボーディングスクールスクールであってももっと年齢の大きい生徒ばかりがいる学校だとか、或いは、小さい生徒が対象でもボーディングスクールでなく通学生ばかりのインターナショナルスクールであったならば、状況はかなり異なるのではないだろうか。これらの点で、低年齢対象のスイスのボーディングスクールは、中学や高校くらいから留学する生徒を、広く募ってたくさん受け入れる世界中のボーディングスクールとは、成り立ちを異にしていると思うのだ。

さまざまな言語的・文化的背景を持つ多国籍の小さい生徒が、寝食をともにして生活する中、低年齢対象のスイスのボーディングスクールで子供らが獲得する能力は、とても大きい可能

性を秘めている。具体的には次に挙げるようなものである。

- 異なる年齢・言語・文化の人々と、即座に交流できる能力（コミュニケーション能力のみならず、自信や度胸も含む）。
- 世界語としての英語能力、プラスアルファとしての第二・第三外国語能力（フランス語・ドイツ語・ロシア語など）。
- いつでもどこでも気後れせずそつなく振る舞える社会的素養。
- 「同じ釜の飯」の仲間同士から、将来、多彩な人脈につながり得る人間関係。
- グローバルに通用する上級学校に進学できる学力（或いは、そこに至るまでの、日々の勉学習慣とスキル）。

スイスからの撤退

ガレンを、三年間過ごしたところでひと区切りつけたのには、ある理由があった。

それは、ガレンがとても小さな規模の学校であったこと。最初のうちはその特徴が長所と

して生き、教師やスタッフの目がよく行き届いてお世話もきめこまかく丁寧にしてくれる良さにつながったのだが、年月を経て柚と聖が予想以上のペースでぐんぐん成長し非常に伸び盛りの時期を迎えたとき、ガレンの規模の小ささが、学業面でも、お友達との活動面でも、もの足りなくなってしまったのである。そこで親としては、より大きな器となるべき受け皿（学校）を新たに見つけてやる必要性を痛感したことが、大きな理由だった。

すなわち、我が愚娘たちをそこまで伸ばしてくださったガレンの力は、本当に偉大だったのだと思う。柚も聖も、ガレンにいたおかげで、毎日机に向かってコツコツ勉強する習慣と、あらゆるスポーツをそつなくこなす体力や持久力が培われた。これらは、その後もずっと彼女たちの強みとなって、学校生活を円滑に送る一助を成している。ガレンは、柚と聖があの年齢で留学するには最も適した学校であったと、今でも私は信じているのだ。

逆転の発想

「次に進学する学校をどうするか？」

娘たちが八歳と九歳になったとき、このテーマを突きつけられた夫と私が、成長に見合っ

た規模の受け皿をさがすことと並んで重要視したのは、言語の問題である。

スイスは地域によって、言語分布が異なる。ドイツ語、フランス語、イタリア語、そしてごく少数の人たちの間でロマンシュ語が使われる。ガレンは、フランス語を公用語とするフランス語圏に位置していた。

ガレンでは、授業が英語で行われるイギリス式カリキュラム（ブリティッシュセクション）と、フランス語で行われるフランス式カリキュラム（フレンチセクション）の2つのクラスが、どの学年にも設けられていて、いずれかを自由に選択できる。我が家の場合は、あとあとの進路を考慮し、ブリティッシュセクションのクラスに決めた。

しかし、ブリティッシュクラスでも、外国語の必修科目としてフランス語の授業時間がかなりたくさん配されていた。また、放課後や週末は、寄宿舎で、フランス語を話すスイス人スタッフが常に身近にいてこまごまと面倒を見てくれたので、フランス語に触れる機会はとても多い。

「一年もいれば、英語だけじゃなくフランス語も上手に話せるようになるわよ」と、入学時にマダム・メアンがやさしい笑顔でおっしゃったのを、私は当初、半信半疑で聞き流していた。けれども、本当に一年後には、「あの言葉はうそじゃなかった！」と実感する羽目になったのである。

そんな特殊な言語環境で三年間過ごし、娘たちが英語とフランス語をうまく使い分けられるようになるにつれて、足りないものがあることが気にかかり始めた。それは、『日本語力』であった。

柚と聖はスイスに留学中も、学校が長期休暇になるたび自宅に戻って過ごしていたせいか、日本語で「話す」ことは、まったく問題なくできていた。しかし、「読む」ことと「書く」ことを、系統的に補う必要があるのではないかと思われた。

「このへんでいったん日本に帰して、日本語の読み書きを学ばせたほうがいいかもしれない」と、夫と私の意見が一致した。そこで、次の進学先の候補として、とある日本国内のインターナショナルスクールが、にわかに浮上したのだった。その学校では、通常の授業は英語で行われるが、エレメンタリー（小学部）はどの学年も毎日一コマずつ、英語が話せる日本人教師による日本語クラスの授業が必修となっている。しかもミドルスクール（中学部）に上がれば、日本語と並行して、フランス語の選択授業も追加できるカリキュラムであるのも魅力だった。

「母国語を身につけてから外国語を」としばしば言われる順序とは、百八十度逆転の発想で、まず先に外国語のほうから入った柚と聖だったが、ここで特筆すべきは、スイスから帰国時、二人はまだ八歳と九歳。言語習得の臨界期には未だ至らず、スポンジみたいに旺盛な吸収力

を保ち、母国語の読み書きをマスターするのに十分、間に合う年齢だと、私たちは考えたのだった。

低年齢留学と日本語

「低年齢で留学させた場合、日本語力を伸ばしにくい点をどう考えるか？」というご質問をよく受ける。これは、「日本人としてのアイデンティティーが危うくなるのではないか？」というご質問とともに、私が講演をさせていただく際などに必ず聞かれる二大定番のクエスチョンである。この機会に、私なりの回答を整理しておきたい。

二十世紀は、世界は国境を有する国の集まりと考えられていた。二十一世紀は、国境を越えたリージョンの集合体で活動する時代になったと思う。ビジネス的には、もはやリージョンさえ超えて活動している。そのうねりを経て、娘たちが大人になるころの社会においては、何国人かということより、個々の人間が世界人としてどれだけ通用するかが問われるのではないかと、私は考えている。

ＩＴの発達にともない、地球上の距離感が急速に縮まった現代では、英語は、単なる英語

圏の一言語（日本人にとっては一外国語）に留まらず、世界語（グローバル・イングリッシュ）の地位を確立した。そうなると、英語で思考し英語で表現することが、世界人たるべき必須の能力として、何国人に対しても要求される。英語が母国語でない国民にすれば、母国語の他に英語も習得しなければならないという、多大なハンディを背負う時代がやってきたのである。

世界語として必須な英語スキルを我が子に学ばせるにあたり、夫と私は、「日本語を身につけること」と「英語をツールとして使いこなせるようになること」は、どちらかを優先すればどちらかが手薄になるといった表裏一体のものではなく、特に、言語の臨界期を迎える前の低年齢の間であれば、どちらも同時進行で伸ばすことが可能であるに違いないと考えた。

その前提のもと、娘たちの英語力と日本語力をもろとも一緒に養うための方策として、「日本語環境で英語を習得すること」と「英語（或いは英語を含む多言語）環境で日本語を身につけること」を比較した場合、両親ともに純粋日本人の私どもにとっては、後者のほうが、より効率が良さそうに思われ、そちらを選ぶに至った。

仕事上の海外転勤など期待できない状況にあった我が家では、娘たちを後者の環境に置いてやるためには、小さな年齢でありながらも留学という手立てを取るしか、実現し得なかったわけだが、日本語を維持する観点から言えば、それがかえって幸いしたのではないかと私

は推察している。

というのは、海外留学は転勤と異なり、年間で通算約五ヶ月もの間、長期休暇で日本に帰国して過ごせるからだ。

学期中は日本語を一切使わない代わりに、休暇中は、夫も私も、柚と聖に日本語で接しているし、彼女たちも両親には日本語を使って会話する。つまり、もっと正確に表現するならば、スイス留学期間を通して娘たちには、「英語／フランス語環境で日本語を身につける」というよりは、「英語／フランス語環境と日本語環境とを、（混ぜこぜにするのではなく）それぞれメリハリよろしく切り替えて、いずれかの言語にどっぷり浸る生活が交互に与えられていた」ことになる。

その結果、われわれ両親は、柚と聖に英語を習得させるために家で英語を使う必要が、まったくなかった。彼女たちがいてもいなくても、家では普段通り日本語で話している。また、英語以外の一般的な学業に関しては、ガレンで年齢相応の課題をちゃんと（英語で）修めているから、一年のうち五ヶ月もある休暇中の自宅学習の時間は、もっぱら日本語の補講や読書に専念できた。

つまりスイス留学中は、授業は英語で受け、寄宿舎ではフランス語を使い、休暇で日本に帰国したときは日本語で話し、日本語の読み書きを家で教えて覚えさせていた。その延長線

として三年後、日本語力をより強化したいと考え、日本国内のインターナショナルスクールに転入させることにした、というわけである。

言語教育面での成果

その後四年が経過して振り返ってみると、私どもの判断は適切であったのだと確信を深めている。

クラスルームにいるときは英語で、フランス語圏ではフランス語で、そして家庭では日本語で。娘たちは、英語とフランス語と日本語を、年齢相応の子供なりの表現ではあるものの、状況に即して、実に器用に切り替えて使い、複数の言語を混同することはない。あたかもそれぞれの言語が、別々の引き出しに整然と収まり、用途に応じて無意識のうちに単独で素速く取り出されているみたいに。私にはそう感じられてならないのだ。

以上のような経緯から、「低年齢」「スイス」「ボーディングスクール」を満たす条件下での留学が、我が家にもたらした言語教育面での成果をまとめてみると、概ね、次の三つになる。

●一話者一言語のメリット――娘たちに接する大人はみんな、それぞれ一言語のみを用いてきた。学校でも家庭でも、一人の話者が、複数の言語をかけ持ちで教える必要がなかった。そのおかげで、イギリス人は英語を、フランス人はフランス語を、日本人は日本語を、などという区別が、理屈ではなく感覚的に、はっきりと刷り込まれて、前述したみたいな瞬時の言語の切り替えを可能にしているのであろうかと、私は勝手に推測しているのだが？

●ネイティブスピーカーのメリット――母国語も外国語も、各言語のネイティブスピーカーによる働きかけが可能であった。

●家庭におけるメリット――私たち両親は、娘たちが生まれたときから一貫して、日本語のみで接するよう、徹してきた。家庭内では現在も、自然体のままの日本語で、たくさんの会話が交わされる。英語は英語話者に、フランス語はフランス語話者に、役割をゆだねられた賜物である。

しかも我が家では、繰り返し述べてきたように、「先に母国語をしっかり身につけてから外国語を」とよく言われる順序とは、まったく逆転の発想で、母国語である日本語より英語の

ほうをまず優先し、その上フランス語も並行して学ぶ環境に、日本語が確立していない娘たちを旅立たせた。

スタートがごく低年齢であったため、三年間のスイス留学を終え、日本語の読み書きを補強する目的もあって日本国内のインターナショナルスクールへ転入させた時点で、二人ともまだ言語の臨界期に達しておらず、日本語力を取り戻すのに間に合うタイミングであったことが、その後の可能性をグンと広げたと思う。

娘たちがスイスから帰国直後に、「柚と聖の一番使いやすい言葉は何語かしら？　例えばご本を買うとしたら、何語のが買ってもらいたい？」と試みに問うたところ、柚は「英語」、聖は「フランス語」と答えたのを、私は印象深く覚えている（聖のフランス語贔屓は、スイスにいる途中からフレンチクラスに移りたがって困ったほどだった）。それくらい、当時は日本語以外の言語が、彼女たちの第一言語になっていたのである。

けれども、日本国内のインターナショナルスクールでは幸運にも、とても素晴らしい日本語の先生に巡り会い、毎日一コマ設けられた日本語の時間に、一番弱かった書く力を引き上げていただいた。ホームワーク（宿題）の量は半端じゃなく多くて、とても苦労したけれど、その甲斐があったと喜んでいる。

このように、言語面での逆転の発想がプラスに転じたのも、低年齢留学ならではのメリッ

トではなかろうかと考えている。

母なる言語を心に抱いて

あれから月日が流れた現在、学校の課題を英語でこなしてきた影響か、柚と聖が好んで手に取る出版物は、英語で書かれたものが圧倒的に多くなった。二人とも寝言を英語で発するので、毎夜の夢は英語で見ているに違いない。インターネット環境も英語に設定して使っている。

嬉しいことや悲しいこと、腹立たしいことなど、咄嗟の事態が起こった際の感情の動きは何語が担当しているのかと聞いてみたところ、「うーん、英語のときも日本語のときもあるかな。いつも頭の中ではどちらかなんて意識せずに使っているから、よくわかんない」そうである。

しかし、われわれ両親と娘たちを結ぶ言語は、スイス留学の前も後も変わらず、ずっと日本語である。親子ともども、日本語でなされる意思疎通に不便を感じることなく、良好なコミュニケーションを保てている。

親子をつなげる確かな言語（我が家の場合は日本語）が、夫と私にとっても、娘たちにとっても、『母なる言葉（母語）』なのだと思う。日本語を心の母語に持てたことが、日本人とし

てのアイデンティティーを危うくせずに済んでいる一因であるのかもしれない。インターナショナルスクールという、日本国内でありながら比較的フレキシブルな言語環境に軟着陸させてやれたことも、彼女たちを日本語嫌いにさせないためにはいい方向に作用したような気がする。

柚も聖も、「母語は何？」と問われると、ためらいなく「日本語です」と胸を張って答える子供に成長した。

どこに目標を置くか

日本でバイリンガル教育を実践しようとすると、あたかも「完璧なバイリンガル」或いは「完璧な日本語を身につけた上でのバイリンガル」を目指すのでなければ意味がないかのような物言いをする人に、しばしば出会う。

「完璧なバイリンガル」って、何だろう？　そもそも、日本で教育を受けた日本人の中に、「完璧な日本語」を駆使できる人が、どのくらいいるのだろうか？

夫と私は、娘たちが「完璧なバイリンガル（或いはマルチリンガル）」になるような教育を

求めているわけではない。

「世界中のどこへ行っても、即、学年相応のクラスで授業を受けられコミュニケーションが取れる」程度を目標に、これまでやってきた。言語はあくまでもツールであって、目的ではないからである。

娘たちのガレンやインターナショナルスクールの同級生を見回しても、どの子のレベルでなら「完璧なバイリンガル」派のお眼鏡にかなうのか、私にはよくわからないが、我が子も含め、「完璧」ではないにしろみんながそれなりに、母国語の他にグローバル・イングリッシュのスキルを獲得し、上記目標は難なくクリアして、セミリンガルではつとまらないインターナショナルスクールの課題を困らずにこなしている。

それで十分だと、私は考えている。

低年齢留学とアイデンティティー

次に、「日本人としてのアイデンティティーが危うくなるのではないか?」という、定番のご質問に対する私なりの見解を述べたいと思う。

私は現時点で娘たちを観察する限り、逆に何故「危うくなる」のか、（いろいろ実例があることは存じ上げているものの）実感としてピンとこない、というのが正直なところだ。彼女たちはそれくらい見事に、「自分は日本人」で育っているのである。

そこに至る要因の一つとして、小学校の高学年や中学校で留学するよりもっと小さかった年齢、つまり非常に刷り込まれやすい時期に、スイスのインターナショナルボーディングスクールという、世界の国家がギュッと凝縮された環境に置かれ、一日二十四時間ぶっ通しで多言語・多文化の子供たちと寝食をともにしたことが挙げられる。対等（ここが肝心である）に人間関係を築く中で、劣等感にさいなまれず自信を持って、「自分は日本人」として振る舞い、「自分は日本人」として尊重され認められる日常であったことが、ごく自然に、彼女たちに「日本人」としての誇りを抱かせる結果につながったのではないだろうか。

これこそが、「低年齢」「スイス」「ボーディングスクール」という三つのキーワードがそろったとき、他の条件での留学とは違った効果が期待できるのだと、私が説く所以である。

もう一つには、物心ついたころには既に多言語環境に放り込まれていたせいで、日本語を使う日本人という民族の独自性が、外からの視点で感覚的に染み付いているためか、とも私は感じている。二人とも、日本語や、日本人である自分の立場を、とても自然に受け入れているように見えるのだ。

娘たちの日本人としてのアイデンティティーを危うくせずに済んでいる要因を、あくまでも我が家のケースとして分析してみたが、さらに、「親子留学をあえて選ばなかったこと」も、大きなポイントではなかったかと推察している。

親子留学を選ばなかった理由

娘たちを五歳と六歳でスイスに旅立たせるにあたり、我が家は「親子留学」を選ばなかった。あらかじめお断りしておくと、私は、親子留学そのものを否定するわけではない。例えば、学校見学を兼ねたごく短期のお試しステイや、英語の習得自体を目的とした滞在であれば、むしろ取っつきやすく手軽な留学形態と言えるかもしれない。けれども、私どもの場合は、子供を長期的に海外で教育することを最初から想定していた。

つまり、留学というある意味とても非日常的な状況が、娘たちにしてみれば一時的な異文化体験や夢物語で終わるのではなく、彼女たちの中で日常の生活として消化されなくてはならないのだと考えたわけだ。そのためには、親が一緒になって日常を逸脱しないほうがいいと、夫と私は判断し、あえて親子留学を選ばなかった。

片親が海外に付き添って非日常の夢物語（少なくとも親にとっては）を子供とともに過ごしてしまうと、日本に帰国して日常（現実）に戻ったとき、「あれ？　お母さん（またはお父さん）、海外にいたときと何か違う人みたい」という事態になり、子供は戸惑うのではないかと懸念したのだ。現実の生活とのギャップは、留学期間が長ければ長いほど、大きくなるような気がする。

私はこれからの時代、アイデンティティーは国家や民族よりも個に帰する部分が大きいと思っているので、必ずしもことさら「あなたは日本人」と娘たちに強調して刷り込むことはしなかった。しかし、「母国への誇り」を保ち「自分の家や家族への安心感」に支えられて成長することは、個のアイデンティティーを育むために不可欠であろう。それらに裏付けられてこそ、躊躇なく異国に飛び出し、そこにいる人びとと対等にやっていけるからだ。

「母国への誇り」を持たせられるよう、我が家では娘たちに、折に触れ意識して、日本人の美徳や日本語の美しさなど日本の良い点を語って聞かせたり、日本の歴史を教えたりしてきた。

「自分の家や家族への安心感」を子供に抱かせるためには、すなわち、「親がぶれないこと」に尽きると私は考える。いつでも家に帰りさえすれば、両親はそこで普段と変わらぬペースで生活を営んでいる、汗水垂らして働き日々の糧を得て、食卓を囲み取りとめのないありふ

れた会話をしている、子供を愛し成長を喜び休暇で戻るのを心待ちにしている……。そんな繰り返しを目の当たりにし脳裏に焼き付けることで、子供は、留学して過ごす歳月を、自分にとっての日常（現実）の生活として消化できるのではないかと思う。

地に足の着いた日常をありきたりに生きる親の姿から、何かを学ぶも良し、反面教師にするもまた良し。そこにこそ、個のアイデンティティーが形作られる素地があるのだと、夫と私は信じて、親子留学ではなく子供だけの単独留学を実行した。ただし、娘たちがあれだけ小さいときに決断を下すことができたのは、年齢の近い姉妹二人セットであった影響も大きかったかもしれない。

我が家が親子留学を選ばなかったのは、日本人としての国家的なアイデンティティーを育むようにと意図したためではなかったが、結果的にはそのおかげで、娘たちが、日本語や、日本人である自分の立場を、自然に受け入れる背景の一つとなり、個のアイデンティティーを確立する過程に一役買うのではないかと、私は予想している。

低年齢留学のメリット・デメリット

以上、述べてきたことを元に、低年齢ならではの海外留学のメリット・デメリットを、私が感じたままにまとめて列挙しておく。

●メリット

① 学年が小さいと入学時にさほど高い英語力を要求されないため、「入れる学校」ではなく「入りたい学校」に軸足を置いた学校選びが可能となり、名門校にも手が届きやすい。

② 言語・文化・生活習慣・学習カリキュラム・人間関係など、いずれの面においても、最も垣根が低い年代なので、比較的早く、異なる環境を受け入れ適応できる。しかも、（これが意外と大きいのだが）クラスメイトのほうでも受け入れてくれやすい。

③ 学年が小さいほどつぶしが利く。もし万が一、急遽、日本に帰国する状況になったとしても、（滞在年数にもよるが）日本国内の私立小学校は、帰国子女扱いで途中編入を認めてくれるところがあり、まともにお受験しなくても、帰国子女ルートの別枠で私立のお受験校に受け入れてもらえる場合がある。また、（これも滞在年数によるが）相応の英語力と空席があれば、インターナショナルスクールに転入できるケースもある。最低限、日本の公立小学校（義務教育）には必ず戻れるので、帰国後の受け皿がなくて路頭に迷うことからは、確実に免れる。

●デメリット

① とにかく、親が寂しい（子供はすぐ慣れる）。この寂しさは、子供が小さければ小さいほど、大きいような気がする。克服するのは超大変！

② 幼いころからずっと海外に留学させて教育を受けさせる場合、先が長い年齢だけに、教育費の生涯負担総額が大きくなる。お金がかかる。

③ 何らかの形で、日本語の補講が必要となる場合が多い。

日本における低年齢留学の今後

ここ数年で、子供の教育の選択肢を、私どもみたいに早くから海外に求める動きが、急速に広がってきたように感じる。二〇〇七年九月には、ニューズウィーク日本版で『十歳からの留学』という特集記事が組まれ、我が家のケースも取り上げていただき、大きな反響を呼んだ。巷にあふれる留学雑誌は、軒並み『小学生の留学』を見出しにアピールしている。各種留学セミナーが参加対象者に掲げるターゲットも、どんどん低年齢化しているそうである。

その背景に、日本の公教育への信頼性の揺らぎが横たわっていることは間違いないだろう。

他方、それとは別の意味合いで、むしろ教育力が高いと思われる条件がそろっている家庭ほど、切実な問題を抱えていることにお気付きだろうか。

その問題とは、時間の壁である。

親世代が子供であった三十年前と比べて、母親の有職率は格段に上がっている。自らはお受験の荒波をかいくぐって高学歴・高キャリアとなった女性が、同様のバックグラウンドで育った男性と結婚して、共働きで家計収入はそれなりにあるけれども、次世代の子供を、自分たちの成功パターンになぞらえて教育しようと考えた場合、目の前に大きく立ちはだかるのが、この壁なのだ。

こういう家庭では往々にして、母親が忙し過ぎて、子供のお勉強を見てやったり、塾やお稽古事の送り迎えをしたりの手間を割くことができず、かといって、自分のキャリアもあきらめたくはない……。

そんなジレンマでもがく中、塾とお教室がフル稼働するダブルスクール構造や、親が支えて一緒に戦わなければ勝てない従来の受験システムしか選択肢がない現状を、何とか打開できるような、新しい解決策が望まれているのだと思う。

上記のような家庭が、グローバル化がいっそう進む世界情勢を鑑み、日本の進学校ではなく、

全人教育を施してくれる海外のボーディングスクールに我が子を託したいと願うケースが増えている。しかしその場合、またしても、もう一つの強固な壁が立ちはだかる。

それは、英語の壁である。

日本人の子供は、相応の学力を保持していても、英語の壁が厚いせいで、特に大きい学年になるほど英語圏のボーディングスクールにはなかなかすんなり受け入れてもらえない、という悲しい現実があるのだ。

学校によっては、アプリケーション（出願）の段階で、日本人と聞いただけで英語力に関する警戒心を露骨に表して難色を示すアドミッション担当者もいるほどだ。それは決して彼が日本人に対してことさら意地悪だからでも何でもなく、実際に子供をボーディングスクールに入れてみると、乏しい英語力ではハードな授業にとてもついていけないことを純粋に憂慮した結果なのだと、よく理解できる。

「でも、英語力をつけたければ、インターナショナルスクールが日本国内にもあるでしょう。いずれ海外の学校に行きたいお子さんは、まずそこに入れば？」

――確かにあるけれど、子供を海外へ出す準備段階として日本国内のインターナショナルスクールを志願したとしても、こちらもまた、純日本国籍だとかなりの難関である。だからといって、

「それなら、親子留学に付き添ってお子さんの英語力を磨けば？」

――と思っても、先に述べた時間の壁に阻まれて、一定期間スケジュールを空けたりすることもままならないのが、こういう家庭の悩みどころなのだ。

将来的には海外の名門ボーディングスクールを目指したい、でも日本のインターナショナルスクールには入れない、日本の学校からだと英語力がともなわないために門前払いを喰らってしまう……。

そこで、時間の壁と英語の壁の両方を一挙に打開する解決策を兼ねて、希望する留学先に比較的受け入れてもらいやすい「低年齢留学」を、我が子に持たせるグローバルな学歴の第一歩として選択されるケースが、今後ますます増加するだろうというのが、私の予想である。

インターナショナルスクールって、どんなところ？

二〇〇四年の秋、新学年のスタートとともに、柚と聖は神戸のインターナショナルスクールのエレメンタリー（小学部）に転入した。ガレンという小さな器を出て、より大きなステージへと、順調に歩を進めたのだった。

この学校は幼稚部からハイスクールまである伝統校で、エレメンタリーは一学年五十名前後（一クラス十数名×三クラス）だ。全校生徒およそ八百名という人数に見合うだけの広い敷地に、明るく立派な校舎が建ち並び、申し分のない環境である。大らかで居心地のいい校風に助けられ、娘たちはすぐさまクラスに溶け込んだ。

ガレンからこの学校に移ってみて予想外に良かったのは、社会性が育まれる過渡期の娘たちにとっては実にタイムリーに、アジア人のお友達がたくさんできたことである。スイス時代はほとんど馴染みがなかったアジアの国々の生徒と親しく触れ合う機会を得て、アジアの一員である日本や、日本の国民である自分というものを、より強く意識し自覚するきっかけとなったようだ。

本来の帰国の目的であった日本語の授業も、幸い、とても素晴らしい担当教師とのご縁に恵まれ、めきめきと力を付けていった。残念ながらその先生はのちに退職してしまわれたが、娘たちの恩師の一人として、今もずっと私の心に残り、感謝の気持ちがこみ上げてくる。

放課後は塾にお任せ（？）の日本の学校と違って、毎日のホームワークの量がとても多いことは、ガレンにも日本のインターナショナルスクールにも共通している。この学校では、学年始めの父母会で、ホームワークをフォローするためのマニュアルを記載した冊子が配られたりして、親がホームワークを手助けする（指導する）のが当たり前という感覚である。

親の手に負えない場合は、個別にチューター（家庭教師）を雇ったりするケースもあるそうだ（ちなみに、ガレンなどボーディングスクールでは、その役目を、ホームワーク専用の教師が担ってくれる）。

ホームワークは、クラス担任からだけでなく、日本語教師からのも課される。日本語のホームワークはよく練られた内容だったが、クラスのと合わせるとあまりにも膨大で、子供ながらに負担が大きかったのだろう。ある日、柚が、「今日ね、クラスのみんなで相談して、日本語の先生に、ホームワークが多くてキツイから減らしてくださいって交渉したの」と言うので、「ついに音を上げたか」と私は苦笑してしまった。交渉は成立したらしく、その日から彼女は、睡眠時間をいくらか増やして確保できるようになった。

ハードなホームワークのおかげか、二人とも塾要らずである。普段の大変さと引き換えに、週末や長期休暇は、宿題のデューティーはなく完全にフリーなので、家族でスポーツや旅行をするのにも、存分に時間を割くことができる。

日本の学校と異なる点といえば、ホームワークを手助けする以外にもう一つ、親に要求されるものがある。それは、「送り迎え」だ。基本的に、行き帰りの通学時における子供の身の安全を維持するのは、学校ではなく親の責務だとされている。

この学校では、スクールバスが配備されているし、スクールバスを使わない家庭は、車や

電車で父母らが送り迎えをする。学校から近い距離の通学には自転車も認められているが、いずれの方法を採るにしろ、送り迎えの交通手段や迎えにくる保護者に関しての詳細情報を、入学時に親が書面で学校に届け出る決まりになっている。

送り迎えを要求するからには、学校側も時間厳守を貫く。日本の学校みたいに、課外活動で予定外に遅くなったり、ましてや朝練などはなく、学校は毎日ピッタリの時間に始まりピッタリの時間に終わる。

電車を乗り継いで帰宅する柚と聖は、この学校に通い始めてから、一日たりとも電車一本分すら狂わず定時に家に到着するのは見事だし、セキュリティーの面からも安心できる。先生や学校側が生徒のためにさまざまな面で細心の注意を払い気を配っている様子が、親の私どもに如実に伝わり、信頼を寄せるに値する素晴らしい学校だと思っている。

日本の大学に入れるインターナショナルスクール

柚と聖が転入したインターナショナルスクールは、前述のごとくハイスクールまで擁している。ハイスクールを卒業した生徒の大半は、欧米の大学に進学するが、ごく少数ながら日

本の大学に進学する生徒もいる。

一般に、インターナショナルスクールは日本国内にあっても日本の学校法人とは扱われないため、卒業生の日本国内での進学先は、従来ならばＩＣＵや上智など、インターナショナルスクールから九月入学を特例で受け入れている大学に限られていたが、近年は門戸がぐんと広がった。

平成十四年から、「一定の基準」を満たしたインターナショナルスクールの卒業生には、日本の大学への入学資格が与えられるようになったのである。「一定の基準」の定義については、文部科学省・中央教育審議会大学分科会で定められている。

現在、日本国内にあるインターナショナルスクールのうち、この基準に照らし合わせて、日本の大学への入学資格が認められているのは、以下の十六校だ。

- 北海道インターナショナルスクール
- 東北インターナショナルスクール
- コロンビア・インターナショナルスクール
- セント・メリーズ・インターナショナルスクール
- アメリカンスクール・イン・ジャパン

- クリスチャン・アカデミー・イン・ジャパン
- 聖心インターナショナルスクール
- 清泉インターナショナルスクール
- サンモール・インターナショナルスクール
- 横浜インターナショナルスクール
- 名古屋インターナショナルスクール
- 大阪インターナショナルスクール
- カネディアン・アカデミー
- マリストブラザーズ・インターナショナルスクール
- 福岡インターナショナルスクール
- 沖縄クリスチャンスクール・インターナショナル

これら十六校のハイスクールの卒業生は、各大学の行う入学試験にパスすれば、日本の大学に進学することができる。ただし、実際にパスするためには、当然ながら日本語や日本式の受験勉強を独自に強化せねばならないという現実があるので、注意されたい。

インターナショナルスクールとボーディングスクール

インターナショナルスクールとボーディングスクールはよく混同されがちなのだが、私は、両者はまったく別物だと考えている（スイスだけは例外で、たまたまボーディングスクールがインターナショナルスクールの性質も兼ね備えている特殊なケースである。ただし逆は真ならず）。

そして私どもは、どちらかといえば、インターナショナルスクールよりもボーディングスクールで受ける教育にこそ、意義を見出している。

日本では近年、インターナショナルスクール人気が過熱傾向にある。しかし、インターナショナルスクールを志願される父母らの多くが、「英語の習得」そのものを目的とされているように感じる。

そういうご両親に、問いたいことがある。

●インターナショナルスクールで行われている教育と、日本のそれとの違いを十分に認識

し理解していますか？

● お子さんをインターナショナルスクールに行かせたあとの進路を、どう想定されていますか？

「英語の習得」そのものを目的としてインターナショナルスクールに目を向けられる方はしばしば、これら二点の問いかけに対して、曖昧なお答えしか返ってこない。そして逆に、明確な回答がすぐさま出せる方には、私は「日本国内のインターナショナルスクールだけでなく、海外のボーディングスクールもぜひ選択肢に入れてください」とおすすめしたい。

既にインターナショナルスクールに在籍している日本人の子供が、途中から海外のボーディングスクールに留学するケースは、実は決して少なくない。「英語の習得」そのものを目的としている方から見れば、「元の学校にいたって英語をマスターできるのに、どうしてわざわざ試験を受けてまで他の学校に？」と不思議に思われるかもしれない。けれども、「英語は目的ではなくツール」ととらえ、その先にある目標（我が子に英語を持たせてそののち何をさせたいのか？）をはっきり見据えておられる方にすれば、「当然」の選択肢の一つになり得るわけだ。海外のボーディングスクールでうまくやっていくためには、「英語は目的ではなくツール」として使いこなせることが前提条件である。

「日本国籍でありながら、日本国内のインターナショナルスクールへの入学」を切望するのは何故なのか、英語は目的なのかツールなのか、我が子に与えたい教育は何なのか。

今一度、じっくり熟慮の上、整理してみられることが大切だと思う。

英語のできない親は子供にバカにされるか？

「子供が英語を話せるようになったら、英語ができない親をバカにするのではないか？」と心配なさる声を、たまに耳にする。

しかし、これぞまさしく、「英語はツール」ではなく「英語は目的」というとらえ方であればこそ、起きる現象なのだ。「英語は目的ではなくツール」だと、感覚的に理解して留学した子供は、「自分のできる言語ができないから」という理由で、親をバカにしたりはしない。

仮に、親がバカにされるとしたら、原因は、「英語ができないから」ではなく、「英語をツールとして語って聞かせるための、考えや信念を持たないから」ではないだろうか。たとえ日本語であっても、きちんと自分の考えを語り信念がぶれない親を、子供は決してバカにしないと思う。

そもそも、子供が親をバカにするような事態が本当に起こったとしたら、それはもはや子育ての失敗だと言わざるを得ない。留学させるかさせないかより以前に、親子関係そのものに問題をはらんでいないか、検証したほうがいい。最も身近で無償の愛を注いでくれる大人を平気でバカにする、その子を育てたのは他ならぬ自分なのだと知るべきだ。

余談ながら、まことしやかに語られる数々の『留学の失敗事例』のうち、この「留学させるか否かにかかわらず遅かれ早かれ何らかの形でひずみが現れたであろう親子関係そのものの破綻に起因する諸問題」が、あたかも「留学の失敗」であるかのようにすりかえられてクローズアップされるケースは、案外、多く含まれるのではないかと感じることしきりである。そういう意味から、留学とは親子関係の総決算である、と言えるかもしれない。

さて、「英語は目的ではなくツール」だという感覚を、無意識のうちに子供に刷り込むには、具体的にどうすればいいのだろう。

「私は子供より英語が下手だから」と、本来ならば大人がしゃべる場面で親は貝になって話さず、子供に頼り切ったりしていないだろうか？　私の経験では、娘たちの英語やフランス語は、発音は私よりはるかにうまくても、（特に彼女たちが小さかった間は）内容的には所詮は子供の英語（フランス語）である。

年齢相応の言い回しで時にはウィットも交えて楽しんで会話することは大人の特権と心得

て、大人がしゃべる場面では、たとえ少々下手な発音でも親が毅然としゃべるのだ。学校へのお手紙も、親が辞書を引きながらでも自分の言葉でしたためよう。多くは、それでちゃんと伝わる。

そして、日本語でいいから、常に我が子に語り聞かせられるポリシーを備えている、そういう親であり続けたいと、私は心掛けている。

世界人として生きる日本人になるために

この春、知人から電話をいただいた。ご子息が、うちの夫の母校に合格されたそうだ。その学校は、東京都内にある私立中・高の男子校で、「御三家」と呼ばれるうちの一つである。

片や、ご父君である知人は、関西の雄である超難関私立校の出身だ。朗報に接し、さぞお喜びであろう胸中を察して、「おめでとうございます」と申し上げると、電話の向こうは意外にも、浮かない声。

「それがね、今やこの学校の高校生のトップ集団は、東大ではなくハーバードを志望している生徒が珍しくないらしいんだ。うちの子も、もしハーバードに行きたいと言い出したら、

どうしたらいいかわからなくて困っちゃうよ。僕らの時代とは変わったんだねえ」……。

相前後して、別の知人宅の、やはり超難関といわれる私立女子校の現役高校生からも、「東大より、ハーバードなどアイビーリーグに進学したいのだけれど」と、相談が寄せられた。

これまで日本では、我が子を成功パターンへ導くためには、お受験は避けて通れないと考えられていた。幼少時からハードなスケジュールをものともせず塾に通い、成長期でありながら常に睡眠不足と戦い、親も子も必死になって有名私立や国立の小・中学校を目指した。行く手にそびえているのは、東大を最高峰とする学歴ヒエラルキーであり、その頂点を制覇することが、幸せをつかむ絶対的な方法だと信じられていた。けれども、このとらえ方は、もはや限界にきているのではないだろうか。

何故なら、仮にお受験を勝ち抜いて東大を卒業できたとしても、世界レベルでは一蹴されてしまう現実があるのを、多くの日本人が悟り始めたからである。もはや、日本のスタンダードでは、世界と伍することは難しくなってしまったのかもしれない。

世界に伍する日本人を産み出すための教育を考えるとき、これからは必然的に、グローバルスタンダードを見据えなくてはならない。そこで不可欠なものは「世界語としての英語（グローバルイングリッシュ）」であり、しかも「英語でものを考える力」を自然体で身につけることである。

我が子をスムーズにグローバルスタンダードの教育のレールに乗せるために、多様な試みが展開される中で、低年齢から始めるボーディングスクール留学の需要はますます高まっていくと予想している。

娘たちが成長する近未来には、「世界人として生きられる日本人」としてのアイデンティティーを持つ大人が、たくさん生まれることだろう。昔ながらの日本の村意識の下では、相容れずノーサンキューであった、これら新しいタイプの「自分は日本人」という誇りが、ひょっとしたら、翳りが囁かれる日本の国力を取り戻す一助になり得るのではないかと私は期待し、また、これを受け入れ、生かせる日本でなければ、とも強く念じている。

Dear readers of this book,

Thank you for reading our book. We are glad that you read this book for your children's education and future. When we first came to Switzerland, my sister and I were scared and thought it was a big, tough challenge. But when our community started with many other different people, we got used to it. Even though it hard for us, we still did it together. If we weren't together, we would have cried all day till school ended. But the teachers and many other people helped us to feel warm and welcome. I would like to thank all those people. My sister and I had a great experience and that helped me learn and communicate with other people.

Sei

柚と聖からのメッセージ

Dear readers of this book,

First of all, we are pleased that so many people are reading this book about our life. We felt great about sharing our life to many readers. As you might have noticed, we were in every chapter together. If we weren't together at the same school, we might have cried every day. But we didn't. Whenever one of us was sad, the other would comfort her. When one of us were happy, the other one would be happy too. That was because we were together all the time; in classes, at lunch, recess, bed time, free time, and also in activities. And since we were in the same class for about two years, we helped each other out and discussed our homework to each other. We still remember that clearly in our heads, and we wish the memory would never fade away. Of course, we still remember all the kind staffs, that helped us whenever we needed help. And we would like to say congratulations to Clare and Christophe for becoming the new principal of La Garenne, and we would also like to congratulate all the staffs that have had a son or a daughter while we weren't there. We hope that others will experience the same as we did, just like we spent our memorable three years at La Garenne. And we would like to say special thanks to our parents for taking us to La Garenne, where we will never forget our experiences.

Yuzu

エピローグ

「子供には獲物を与えるより、獲物のとり方を教えろ」と、どこかに書いてあって甚く共感を覚えた。

現代の日本の親は、子供がかわいそうだからと成人してもそのまま家に住まわせ、食事まで与えて子供の生存能力を奪い、フリーター生産に余念がない。もう少しまともな親でも、自分もしくは周りの成功体験の再生産である。

一つの会社や業界の好調期の寿命は、かつては三十年と考えられていたが、現在は長くとも十年程度ではないかと言われている。その説からすれば、会社や業界の成長カーブが、親の時代にピークになっているところを目指すのは、負け組パターンである。たとえ東大を出たとしてもそれだけでは下士官、その頭の上に外資系から落下傘でアイビーリーグ出身者が将校として天下るというのが、僕が予想している十年後の日本だ。まずは今、我々はどこに立っているのかを知ることが肝心だと思う。

進化論では、世の中が今までと同様に存在し、いつまでも同じ社会構造を繰り返すのは、滅亡への道だとされている。

滅亡しない最強の生物は何か。大きいものか。力強いものか。はたまた頭の良いものか。

正解は『環境に即座に対応し、変化するもの』である。したがって、子供が三十代になった頃を想定すべきだし、想定自体が難しければどんな状況になっても生き残れる能力獲得を目指すべきであろう。

普遍的生存能力とは、①問題発見力　②情報収集力　③問題解決力　と考える。

学校では明治以来の記憶中心の学習でなく、事例に基づくディベートを中心にすべきだ。また人間社会で生きていくうえで重要なのはいわゆるＥＱ（感情指数）で、どうしたら他人の気持ちをつかんで自己を表現し、チームとして機能するかである。年齢が離れ文化も異なる子供が一緒に生活するボーディングスクールが、最も適していることは自明でしょう。

そういうわけで僕は、自分の娘たちのためにスイスのボーディングスクールを選んだ。英語やコンピューターは、所詮は道具であって、目的ではない。身につけて欲しいと願っているのは、普遍的生存能力なのである。

フロム　ダッド　（父より）

［特別寄稿］

LDと才能・個性について

松村　暢隆

この本の読者のなかには、お子様がLD（学習障害）だと言われたり、LDではないかと心配されている方もいらっしゃるかもしれません。この本に登場された聖さんの場合は、LDではという疑いにご両親は苦闘しながらも、運よくそのラベルを捨ててしまうことができました。それを読まれて、「LDという診断なんていい加減だ」とか「LDだと言われても無視していいのでは？」といった印象をもたれるかもしれません。さらには外国留学がLDにも効く万能薬ではないかと期待をかけられるかもしれません。

しかしLDは、専門的な診断を経ているなら、きちんと認識して適切に対処する必要があります。日本では最近、LD児の教育が大きく変わりつつあり、この先数年でLDだと診断される子供の数は急に増えていくでしょう。保護者も学校の先生も、LDを正しく理解することがますます大切になってきます。

これまで特殊（障害児）教育が対象としてきた重度の障害（盲、ろう、知的障害、肢体不自由、

病弱）だけでなく、それに含まれなかった「軽度発達障害」も対象にする新しい教育制度が二〇〇七年から本格的に始まりました。文部科学省は特殊教育を「特別支援教育」と呼び改め、児童・生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じて適切な教育的支援を行うことを目ざしています。

その軽度発達障害には、ＬＤ、ＡＤＨＤ（注意欠陥多動性障害）、高機能自閉症などがあります。二〇〇二年の文科省全国調査では「知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で著しい困難を示す」と担任教師が回答した児童・生徒の割合は六・三％にもなります。つまりふつうのクラスにＬＤやＡＤＨＤと呼ばれる子供たちが二人ほどいることになります。

ＬＤは、もともと教育学的な概念で、ことばや計算の特定の学習能力の障害を指していました。同じＬＤという用語を使っても、人によって、あるいは国によってその使い方がかなりずれることがあります。

イギリスでは特殊教育の対象となるかなり広い「学習の困難」（略語は同じＬＤ）という概念に、二割ほどの子供が含まれてしまうこともあります。「聖さんはＬＤでは?」とおっしゃったインターナショナルスクールのイギリス人の先生も、日本語で話すという特定の技能に着目して、これに近い概念を当てはめたのだろうと思われます。

しかし現在日本での教育上の定義では、「全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、

書く、計算する、または推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態」を指します（医学的定義では、読む、書く、計算する能力のうちいずれかの障害）。そして他の障害や環境的要因が直接の原因ではなく、中枢神経系の何らかの機能障害が原因だと考えられています。

その診断基準と照らし合わせると、聖さんがＬＤであったとはどうにも考えられません。この点では、はるばる訪ねて診断を受けられた東京の病院の発育相談所の「ＬＤとはいえない」という評価は、専門的に正当なものであったといえます。

ＬＤやＡＤＨＤは見分けが難しかったり、症状が合併することもよくあるのですが、まず何よりも専門家ができるだけ正確に診断を行う必要があります。

その上でもしＬＤと診断されたなら、学習に個別に配慮する必要が生じますし、学校は適切に支援してくれるはずです。この時点で障害というラベルづけを嫌って「ＬＤではなく個性なのだ」と勝手に思いこむと、かえって適切な対処の機会を逃してしまいかねません。従来の特殊教育が対象としてきた障害もそうですが、障害のラベルは本人・家族にも周囲の人たちにも、その人の全人格に丸ごと貼り付けられたかのように思われがちです。しかし障害は、生活上の適応が困難になる個別の行動について指摘されるのであって、障害をもつといわれる人もそうでない人も、誰でも日常のさまざまな活動についてちがった領域でちがった程度

に不便さを覚えるのだといえます。

障害が個別の行動ごとに多様なのは、私たちはみんな多様な能力をもっているからです。最近の心理学の知能理論でも、そういう考え方が受け入れられるようになり、たとえばガードナーというハーバード大学の教授は、人間の能力は大きく分けて八つの知能から構成されているという「ＭＩ（多重知能）理論」を提唱しました。芸術や運動や対人交渉などに関する人間の多様な文化的活動の各領域で、それぞれ個別の知能が独自の組み合わせで働いているというのです。

そう考えると、どんな人でも、うまくできる活動（長所）とそうでない活動（短所）、才能を働かせられる部分と障害を感じる部分が同時に存在して当然です。だからこそ最近アメリカでは、とくに優れた才能と障害を併せもつ「二重に特別な」子供たちの存在が注目されてきています（またアインシュタインやエジソンのような天才がＬＤだったといわれるのも何の不思議もありません）。軽度発達障害の子供たちのなかにも、計数、空間認知、絵画、音楽などで異常に優れた能力を示す者がいて、「サバン」と呼ばれることがあります。そしてそういう子供たちも含めて個性化教育実践にＭＩ理論を生かすと、得意な知能を伸ばし、それを困難な学習の補助道具に利用できます。

「ＬＤは障害ではなく個性だ」と考えるよりも、「ＬＤという障害も何かの才能もあるのが

個性だ」と考えるべきです。どの行動でどういう才能・障害をどれだけ示すのかを多面的に理解して、学習に必要な個別の特別支援をうまく用意できれば、親や先生、子供たちは気持ちを楽にして、前向きに独自の学習活動に取り組めることでしょう。

（まつむら・のぶたか　関西大学文学部教授）

あとがき

二〇〇五年五月に、この本の前作となる『五歳六歳スイス留学大作戦　～ボーダレスな世界で生きられる子供たちに～』を出版しました。

方向性が時代の波に合ったのか徐々に読者が増えるとともに、講演に呼ばれたりメディアからの取材が舞い込んだりするようになりました。元・外交官の原田武夫氏が主宰なさっている原田武夫国際戦略情報研究所が発行する『教育投資通信』をはじめ、メールマガジンやコラムを執筆させていただいたりする機会が与えられたりもしました。

二〇〇六年十月には、（株）アルクのご提案により、同社のホームページであるスペースアルクにて、『若草まやの国際子育てのススメ』というブログ連載をスタートし、現在も続けています。

『高学歴ノーリターン』（光文社・刊）のご著者で知られる兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科准教授の中野雅至氏は、二〇〇七年六月にソフトバンク新書から出版された『格差社会の世渡り　努力が報われる人、報われない人』の本文で、我が子を低年齢で海外のボーディングスクールに留学させる動きを「若草現象」と名付け、「何かのきっかけで燃え上がるかも？」

と論じてくださいました。また、ニューズウィーク日本版が二〇〇七年九月十二日号で組んだカバー特集『十歳からの留学』で、私どものケースが取り上げられ、反響を呼んだりもしました。

そんな中、拙著の初版が完売し、重版を検討する局面に差し掛かったとき、前作出版社である（株）かんぽうの担当編集者から思いがけず、「柚ちゃんと聖ちゃんのスイス留学後を加筆して、改訂版として新たに出版しましょうよ」という大変ありがたいお申し入れが示されました。そのご好意を受け、このたび、『完全版！　五歳六歳スイス留学大作戦』としてリニューアルし、世に出させていただく運びとなりましたことを、とても嬉しく光栄に存じます。

この本の前半の本編部分は初版の原稿をほぼ丸ごと使いましたが、一部に人名など細かい記載を修正した箇所があります。これは、子供の口からこぼれ出る折々のエピソードを聞き取りながら書き留めるという地道な作業において、前作の執筆から年数を経て娘たちが幼児から中学生へと成長するにつれ、彼女たちの話す中身が、具体的・客観的なものへと変化し、より正確を期すことができたためとご理解ください。

実は私は、前作『五歳六歳スイス留学大作戦』の読まれ方として、私が当初、想定していなかった反応が起きているのではないかと、最近ひしひしと感じています。

スイスへの低年齢留学を実践した我が家に対して、どのような切り口で情報を発信することが求められているか、また、それを読者がご自身のご家庭での子育てにどういった形で生かしたいと考えていらっしゃるかについて、何となく新しい輪郭が浮かび上がってきた気がするのです。読者や講演視聴者から次のような異口同音の感想が寄せられるにつけ、私はますます確信を深めつつあります。

それは、『五歳六歳スイス留学大作戦』の中で読むべき章は、エピローグの「フロム・ダッド」であった、あそこに自分の思いが全て集約・代弁されていた、というものです。

「フロム・ダッド」とは、拙著の本編の最後に夫が付け加えた、締めくくりの付録みたいな短い一章で、今回の『完全版！』にも収録しておりますが、要約するとこんな内容です。

「子どもには、獲物を与えるより、獲物のとり方を教えろ」と、どこかで読んで共感を覚えた。近未来の日本は、我々親の世代の学歴信仰や年功序列は通用せず、問題発見力・情報収集力・問題解決力の三つからなる『普遍的生存能力』に長けた者が、リーダーとして、人の上に落下傘みたいに降り立つ社会になるだろう。それらの能力を獲得するには、年齢も文化も異なる子ども同士が切磋琢磨しながら一緒に育つボーディングスクールの教育環境が、最も適していると考えた。だから僕は、娘たちのためにスイスのボーディングスクールを選んだ。英

語やコンピューターは、所詮は道具であって、目的ではない。身につけて欲しいと願っているのは、『普遍的生存能力』である。

戦後エリート教育を徹底的に排し平等教育へとまっしぐらに向かった日本の学校事情は、空前のボーダレス社会を迎えた今、ある種の親たちにとっては不安と不満が渦巻く結果を招いています。では、ある種とはどういう親でしょうか？

拙著の多くの読者や講演視聴者のバックグラウンドに、共通する特徴があります。それは、ご夫婦とも（特に母親）が高学歴・高所得・高社会的地位、すなわち今盛んに言われるところのパワーズカップル（パワーズマザー）であり、またご夫婦のうちどちらか（特に母親）或いは両方が十代のころに海外への長・短期留学やサマースクールを経験していること。つまり、ご自分の世代で日本のお受験に成功していて、なおかつ海外をご自分の目で見て知っている親たちです。

どうやら、こういう層が次世代（我が子）の子育てに求めているのは、他の子供と平等に受ける教育の中で一人抜きん出てトップに昇り詰めることではないらしいのです。「幼少時から他の子供とは違う特別の教育を受けてリーダーとなるべく経験豊かに育まれ、長じて人の上に落下傘で舞い降りるような人間になってもらいたい」と願い、それを実現するには、日本国内の学校は

あまりにも選択肢がなさ過ぎるため、低年齢の海外留学に目が向いている、というわけです。

賛否はともかく、格差社会の到来が叫ばれる昨今、このような考え方をする親が、まだ一握りではあるものの実際に生まれていることは、一種の社会現象として広く認識されるべきではないかと思い、あえて付記しました。お受験に代表される従来の学歴信仰の一角は、もはや確実にほころび破綻し始めたのだと感じます。

ところで私は、本編の、「かつて日本にもあった」と題した章で、旧制高校全盛時代に日本で行われていたリーダー教育について触れております。戦後、「教育の平等」を重んじるあまり、旧制高校に代表されるようなユニークな学制を、日本はあっさりと切り棄て、現実には平等でない社会で生き抜く術を子供に教える教育内容ではなくなってしまったのではないか。ひいてはそれが、今日の日本の国際競争力の低下に結びついているのではないか、と書いたのです。

少数精鋭のリーダー育成から各種技能や生産技術の実務指導まで、かつては選択肢が多岐に渡って用意されていた日本の教育・学校制度は、戦後、平等教育へと大きく方針転換されました。その結果、総ての子どもが最低限の義務教育を受けることを保証され、国全体としての教育水準が上がったのは偉大な功績であった反面、より伸びたい伸ばしたい能力を秘めた個人が、集団から抜け出してぐんぐん伸びるための方策や受け入れ先を、学校現場に求めることはもはや至難の業となりました。

「みんな同じ」平等教育の枠の中では、出る杭とならず、かといって落ちこぼれることもなく、学校では足並みを揃えてついていかなければなりません。そこで、どんどん先へ進みたい余力のある子供にとっても、逆に後れを取りがちな歩みの遅い子供にとっても、塾が頼みの存在として台頭するようになったのです。

学校と塾のダブルスクール構造に親子そろって巻き込まれ振り回される日常では、リーダーとなる人に必須の「プラスアルファの教養」を身につけられる余裕など生まれません。さらに近年は、ゆとり教育の導入により、「みんな同じ」平等の最低保障ライン自体が著しく低下し、戦後教育の功績の部分までが揺らいで迷走し始めました。一定の水準以上を求めるためには、各家庭レベルでのオプションによる教育力が必要と言われています。この点が、格差社会において、階層を固定化する誘因となるのではないかと、憂慮されているところです。

私の亡父は、旧制高校で青春を謳歌した世代の最後のほうでした。取り立てて裕福な家に生まれたわけではありませんでしたが、父が十代を過ごした日本には、頑張れば報われる教育システム（「教育内容」の平等ではなく、「教育機会」の平等が守られた制度）が整備されていたことが、父にとっては幸いでした。頑張る人は、社会全体の宝として高く評価され、手厚い処遇が為されました。そうして享受した恩恵を、将来、人びとのお役に立つことで社会に還元するという、尊い精神も養いました。

生前の父が語る学生時代の思い出は、その後進学した大学より、旧制高校のころのものがはるかに多く、私は幼少時からそれらの話を繰り返し聞かされて育ちました。かくして自分が親となり、我が子の教育問題に直面したとき、私の脳裏には、（私自身は実際に経験してもいないのに）日本ではとうの昔に失われてしまった旧制高校への郷愁がよぎり、娘たちを海外のボーディングスクールに留学させるのにも抵抗が少なかったという背景があるかもしれません。

旧制高校や旧帝大で、「真のリーダー教育」をたたき込まれた父の世代が、どんどん高齢化してしまう現在、彼らがその時分の教育への愛着を熱っぽく語るのを目の当たりにして大きくなったわれわれの年代が、たとえ微力であってもその良さを語り継がなければ、そして、混迷する日本の教育を「何とかしなければ！」という焦りにも似た強い危機感が、私にはあります。けれども、我が子の世代が大人になって二十一世紀の世界をたくましく渡って歩くための大切な礎となる教育システムを、新たに日本で確立することは、もはや途方もなく困難な作業に思えて、残念でなりません。

せめてもの攻防を即、試みたい人の間では、旧制高校ならぬ海外のボーディングスクールを活用する方法が、にわかに注目されています。

ボーディングスクールの「同じ釜の飯効果」のもとで育った人間関係が織り成す絆の深さ（強固な国際的人脈、結束力）に着眼し、「海外のボーディングスクールに留学して帰国した

子供たちは、これからの日本の国力を取り戻す一助となるのではないか」と指摘する人が出てきました。さらには、「半ば公的に日本につなぎ止めるためのネットワークを国家戦略として早急に作る」ことや、「海外のボーディングスクールで学ぶ機会を、親の経済力の多寡にかかわらず、どの子にも平等に与え得るよう、優秀な生徒を選び国が学費を肩代わりしてでも留学させる」ことなどを提唱する人まで現れました。これらはいささか極論に過ぎるとしても、従来の日本のパラダイムではくくれない多様な教育環境で育成された人材を柔軟に受け入れ活用すべき曲がり角に来ていることだけは間違いないでしょう。

海外の名門ボーディングスクールには、世界中から、共通語である英語（グローバルイングリッシュ）でつながる優秀な教師や生徒、そしてその兄弟姉妹や両親が集まり、地球をフラットな舞台に変えてグルグル回っています。これらの人脈が、独特の一大コミュニティーを形成し、卒業後もさまざまな分野で秘かに機能していることを、言語鎖国を頑なに貫き極東郡日本村の中でだけ平穏に暮らしているつもりになっている大半の日本の学校の先生や生徒やご家族は、想像だにしていないと思います。

このようなコミュニティーに、日本人がこれまであまり積極的に加わってこなかったことが、空前のグローバル時代を迎えた今、日本の国力に翳りがささやかれる現状を招いた一端であるような気がして、『完全版！　五歳六歳スイス留学大作戦』では、ボーディングスクー

ルのそういった存在意義をも知ってもらえるよう、後半の「検証」を加筆しました。

最後に、前作に引き続き、ＬＤ（学習障害）について、言及しておかなければなりません。私は本編を、あくまでも我が子の成長の記録として書いたわけですが、読者の中には、一般論に当てはめて読まれる方もいらっしゃるかもしれないということが、特にＬＤに関する記述において、心に掛かっておりました。

例えば、幼少時の聖と同様、ＬＤの疑いのあるお子様をお持ちのご両親が、あたかもスイスの寄宿舎学校がＬＤ全般に対して非常に優れた治療効果をもたらすかのような錯覚を、早計に抱かれて、低年齢のスイス留学に過度の期待や多大な望みを賭けられたり、その結果、それぞれのお子様に最適な教育を受けるチャンスやタイミングを逆に逸してしまったり、かえって遠回りする羽目になったり、といった弊害が生じてはならないと、懸念していました。

その旨を、関西大学文学部教授・松村暢隆先生にご相談しましたところ、ＬＤという概念についての正しい理解をうながすために、研究者の眼差しでわかりやすく書かれた解説を、拙著の巻末にご寄稿いただけることになりました。松村先生は、京都大学大学院博士課程を修了され、教育・発達心理学がご専門ですが、アメリカでも研鑽された才能教育研究の第一人者で、『アメリカの才能教育』（東信堂・刊）のご著書もあります。

松村先生と私のご縁は、スイス留学期間が三年を満了するころ、娘たちの進路を決める上での参考書として、前述のご著書を私が買い求めたことから始まりました。

聖のこれまでの経緯を説明すると、先生は力を込めておっしゃいました。

「聖ちゃんは本当は、決してＬＤではなかったのだと思います。現在の学校にちゃんと適応して、読み書き重視の課題を十分にこなしているのですから、この先どこの学校に進むにあたっても問題ないでしょう。以前に英語と比べて日本語が少したどたどしかったことが、今後の彼女の学習にどれだけ影響しますか？　それをＬＤと名付けるなら、学習のどこでＬＤが現れますか？　その点を学校の先生に、説明しようがなかったり心配を表明しようがなかったら、もはやＬＤという概念のラベルは聖ちゃんから消滅しています。むしろご両親がＬＤの呪縛から解放され、入念に進むべき道への準備をしながら、でも肩の力を抜いて、聖ちゃんと一緒に喜んだり褒めたり、楽しく過ごされますように」

私はそのとき、目からウロコがポロリと落ちるのを感じました。かえりみれば確かに、神戸のインターナショナルスクールでイギリス人の女性校長から「セイはＬＤではないか？」という疑いを指摘されはしたものの、その後駆け込んだ東京の専門病院では「ＬＤとは言えないのでは？」と否定され、併設の発育相談所の報告書にも、「日本語による理解力が普通より劣っている」との記載はあっても、はっきりとＬＤという診断名が書かれていたわけではありません。

われわれを長い間苦しめた聖のＬＤのラベルは、親の私たちのほうで、先入観や思い込みが嵩じて一方的に貼り付けていただけのものだったのかもしれないと、私は初めて気が付きました。

娘たちが十二歳と十三歳に成長した現在でも、子育ては迷いの連続です。我が家のケースが吉と出るかどうかは、柚と聖が大人になるまでわからないと、私は考えています。

けれども、小さな子供にでもここまでやれるのだという事実を広くお伝えすることで、今やグローバルな観点において、かつてないほどアイデンティティーが揺らぎ生き方を見失いつつある日本人に、生きる力を取り戻すための、一つのヒントにしてもらえれば、と願っております。

未筆ながら、前作に続き、『完全版！　五歳六歳スイス留学大作戦』の出版をご決断くださいました（株）かんぽうの桐生敏明部長と、装丁ご担当の仁井谷伴子様、ならびに表紙の水彩画を描いてくださった大槻ゆり様に、深くお礼申し上げます。そして、本業の合間を縫っての苦しかった執筆活動を、常に励まし支え続けてくれた、唯一無二の戦友である夫に、心からの感謝をささげます。

二〇〇八年春

若草まや　拝

巻末資料

低年令のスイス留学Q＆A
寄宿舎学校ラ・ガレン 留学参考資料

ラ・ガレンの仲間たち

低年令のスイス留学Q＆A

Q. スイスのボーディングスクールに問い合わせのメールを送る場合は日本語でも大丈夫ですか？
A. スイスのボーディングスクールでは、日本語は通じません。メールやファックスは英語で書いてください。

Q. Q. スイスの低年齢向けボーディングスクールの学費は年間いくらかかりますか？
A. 45000 ～ 53000SFR（スイスフラン）が目安です。学校によって、また学年によっても、幅があります。スイスでも、もっと大きい生徒（中高生）が対象のボーディングスクールだと、63000 ～ 80000SFR ほど必要になります。

Q. サマースクールの期間と費用はどのくらいですか？
A. だいたい、３～６週間で 5500 ＳＦＲ前後です（往復の航空運賃などは別途必要）。

Q. いきなり正規の留学生活を送れるかどうか、心配です。
A. 自信がない方は、まずサマースクールでプチ留学を体験して様子を見てはいかがでしょう。

Q. サマースクールは、いつ、どうやって申し込めばいいですか？
A. 申し込み時期は一般に１～３月頃、希望する学校に直接、英文のメールを送って申し込みます。学校によっては、

ホームページに質問・申し込み送信用の簡便なフォームがリンクされていますので、それを利用してもいいでしょう。近年、スイスのサマースクールは参加希望者が増加しており、人気のある学校ですと２月中に定員に達することもあるようです。お早めにお問い合わせなさるのが無難かもしれません。

Q. 正規留学は、いつ頃申し込めばいいですか？

A. A. スイスのボーディングスクールの新学年は、９月上旬から始まります。その直前の６～８月は、アドミッション（入学選考）担当者が夏休みで留守になる場合もありますし、実際に留学するとなると準備期間も必要ですから、９月から正規留学を希望するのであれば、１～４月頃には学校に連絡を取りたいですね。

Q. 出願するには、どんな書類が必要ですか？

A. A. 出願の際に必要な提出書類は、アプリケーションフォーム（入学願書）とヘルスフォーム（健康状態申告書）、これらはたいてい学校ごとに書式が決まっているので、あらかじめアドミッションオフィスに請求して入手し、所定の用紙に英語で記載します。他に、在籍校の成績証明書（数年分を要求される場合あり）や、高学年ではまれに、本人が英文で書いたエッセイの提出を義務付けられることがあります。

Q. 出願してから合否判定までは、どんな流れで進みますか？

A. 出願後は、学校の指定日にインタビュー（面接）に出向かなくてはなりませんが、低学年ではサマースクールで代用できる学校も多いです。或いは、電話インタビューで済ませられる場合もありますし、特に面接を要しない学校もあります。合否判定までの期間はまちまちです。出願時に、インタビューの日程と合否結果通知の時期や方法について、アドミッションオフィスに確認しておきましょう。

Q. インタビューは、どんな内容ですか？

A. 出願の動機や将来的な進路の志望を尋ねられたり、集団生活に馴染めるか、勉学意欲があるか、語学力がどの程度か、を主にチェックされます。また、特に低年令の生徒に関しては、親の教育方針や、何故この時期にその学校に入学させたいのかなど、親への面接も重要視される傾向があります。学校によっては、インタビューの際に簡単な基礎レベルの学力考査（英・数）を本人に対して行うケースもあります。

Q. ジュネーヴへは、日本からどうやって行くのですか？

A. 意外と知られていませんが、日本からジュネーヴへの定期直行便はありません【※注　2008 年 3 月現在】。成田からでも関空からでも、どこかで乗り継ぎが必要となります。一般的には、チューリヒか、パリ・ロンドン・フランクフルト・アムステルダム・ミラノなど、ヨーロッ

パの各都市で乗り継ぎますが、変わった手としては、香港やバンコク、モスクワで乗り継ぐ方法もあります。あれこれルートを考えてみるのも楽しいですよ。

Q. 送り迎えには大人が付き添った方がいいですか？

A. ＹＥＳ！　理由は、ヨーロッパの空港は広くて構造が複雑な上、乗り継ぎ便の出発ゲートの案内板の位置が高いため身長が小さい低年令の子供にとっては見にくく、子供だけでは乗り継ぎが難しいからです。また、アクシデントが発生して急にフライトがキャンセルされ、乗り継ぎ地のホテルで１泊しなければならないような非常事態（私どもは実際にパリとロンドンで経験しました）とか、チケットやスーツケースの紛失などのトラブルも予想され、特に語学力が不十分なうちは、大人が付き添った方がいいでしょう。

Q. 毎回、親が付き添わなければなりませんか？

A. 信頼してお任せできる大人の方がいらっしゃれば、必ずしも毎回、ご両親のどちらかが付き添う必要はありません。でも、見学を兼ねて、１度はご両親が学校まで送って行かれたほうがいいと思います。

Q. スイスには観光ツアーで行ったことがありますが、自分で電車に乗ったことはなく、学校まで送るのは不安です。

A. 多くの学校はジュネーヴ空港で生徒をピックアップしてくれますから、電車に乗るのが不安でしたら、学校まで送らなくても、空港で学校関係者にお子さんを預ける

ことができます。しかし、スイスの電車の乗り方はとても簡単なので、トライされてはいかがでしょうか。スイスの鉄道駅には改札口がありません。その代わり、電車の中で何度も検札に来るので、切符は目的地までなくさずに保管しましょう。

Q. ホテルヴィクトリアを予約したいのですが。

A. 下記の連絡先に、英文のメールかファックスで、宿泊希望の日程・人数・代表者の氏名・住所・電話番号・連絡用のメールアドレスかファックス番号を明記してお送りください。数日後に折り返し、予約確認書が返信されます。初めての宿泊の場合は、予約の段階で、代表者のパスポート番号やクレジットカードのデータが必要になることがあります。ホテル・ヴィクトリアへは、最寄鉄道駅のモントルーで下車してタクシーか登山電車に乗ります。ジュネーヴ空港から２時間弱かかりますから、長距離移動日の宿泊には適しません。

ホテルヴィクトリア

〈Hotel Victoria Glion〉
所在地： sur Montreux, Switzerland
ＴＥＬ：＋41　21　962　8282
ＦＡＸ：＋41　21　962　8292
E-mail： victoria@worldcom.ch

Q. スチューデントビザを取るにはどうしたらいいですか？

A. 正規留学するには、スイスのスチューデントビザが必要となります。申請方法など詳細につきましては、下記へお問い合わせください。
〈スイス大使館〉
〒 106-8589　東京都港区南麻布 5-9-12
ＴＥＬ：03-3473-0121
〈スイス総領事館〉
〒 530-0003　大阪市北区堂島 1-2-5 堂北ダイビル 7 階
ＴＥＬ：06-6344-7671

Q. 学校選びや送り迎えを自分でするのは自信がないし、時間的にも難しいです。サマースクールも、パックツアー形式の方が参加しやすいのですが。

A. 有料となりますが、学校の紹介から面倒な出願手続きやツアーのアレンジまで、代行してくれる会社があります。英語が苦手な方でも安心です。私のお奨めは、次ページの３社です。

〈(株) ＦＥＳスイス留学センター〉

2007 年 3 月より、私（若草まや）がスイス留学センターの所長をつとめております。『低年齢』『スイス』『ボーディングスクール』に重きを置いた留学理念を掲げ、正規留学やサマースクールに確かな実績を上げています。我が子のスイス留学を考える親の視点から、「こんなサポートがあればいいな」と私が感じたポイントを、どんどん取り入れて具体化する企画力を備え、単なる留学業務のみにとどまらず、スイスにおける各種サービスのご紹介も含めたトータルなサポートを手掛けています。スイスのことなら何でもご相談いただける、スイスに強い会社です。

〒 106-0031　東京都港区南麻布 3-13-10
パークサイドセピア 7 階

ＴＥＬ ： 03-5770-7280

ＵＲＬ ： http://f-e-s.co.jp/

〈アルク・グローバルパートナーズ　ジュニア留学センター〉

2006 年 10 月より、『若草まやの国際子育てのススメ』http://kokata.alc.co.jp/maya/ をホームページにて連載させていただいております、(株) アルクの関連企業です。留学会社の草分けとしてのキャリアを生かし、幅広い顧客層のニーズに合わせた多彩なプランを、常時ご提案しています。

〒 163-0210　東京都新宿区西新宿 2 - 6 - 1
新宿住友ビル 10 階

ＴＥＬ ： 03-5381-7087
ＵＲＬ ： http://jr.alc-gp.jp/

〈ボーディングスクール父母らの会〉

私の友人で Salop & Co. 代表・石角友愛さんのお父上であり、『アメリカのスーパーエリート教育』のご著者である、石角完爾氏が主宰されています。数ある留学形態の中でも、『ボーディングスクール留学』のジャンルに早期から着目し、第一人者としてその魅力を提唱なさってこられました。アメリカをはじめ世界各国のボーディングスクールに独自のパイプを持たれ、セミナーや講演も活発に行われています。

〒 100-0005　東京都千代田区丸の内 3 - 1 - 1
国際ビル 811 丸の内スクエア
ＴＥＬ：03-5252-5252
ＵＲＬ：http://school.chiyodakokusai.co.jp/

Q. 低年齢の留学や教育を考える上で、参考文献がありますか？

A. 私が読んで参考になった本や雑誌を、９冊挙げておきます。

『アメリカのスーパーエリート教育』 石角完爾著／ジャパンタイムズ

『ニューズウィーク日本版　2007 年 9 月 12 日号　10 歳からの留学』／阪急コミュニケーションズ

『選択　2008 年 2 月号　留学生「世界的争奪戦」の激烈』

／選択出版株式会社
『**日本は没落する**』　榊原英資著／朝日新聞社
『**レイコ＠チョート校**』　岡崎玲子著／集英社
『**東大よりハーバードに行こう !?**』　森田正康著／アルク
『**５歳からはじめるハーバード留学準備**』　森田正康著／アルク
『**アメリカの才能教育**』　松村暢隆著／東信堂
『**プレップ・スクール**』　田中義郎編著／C. S. L. 学習評価研究所

さらに、次に挙げる３冊は、留学をテーマに書かれたものではありませんが、海外における、低年齢の子供の異文化や言語の習得の過程、学校の雰囲気、先生の気質などがうかがわれ、とても役に立ちました。物語としても楽しく読める、素敵な本だと思います。
『**My name is ･･･**』　大迫弘和著／影書房
『**しあわせになれるパリ幼稚園物語**』沼口祐子著／光人社
『**オーストラリアの小学校に子どもたちが飛び込んだ ―― 子連れ移住のトホホとワハハ**』　柳沢有紀夫著／スリーエーネットワーク

Q.　小さい学年でスイスに出すと、将来の進路はどうなりますか？

A.　留学させる時点で、そのまま海外の中学・高校や大学への進学を想定しておられるご家庭が大半ですが、もし途中で日本に帰国した場合は、日本の私立小学校に帰国

子女枠で編入したり、滞在年数が３～４年以上であれば日本国内のインターナショナルスクールに受け入れてもらえるケースが、実例としてはあるようです。

Q. 本文に登場するスイスの低年齢向けのボーディングスクール３校を教えてください。

A. ３校のうち１校は、私の印象ではあまりお奨めとは言えません。その１校を除外した残りの２校のみ、学校名とＵＲＬを記します。

La Garenne	http://www.la-garenne.ch/
Pré Fleuri	http://www.prefleuri.ch/

Q. 日本にいながら、スイスみたいなボーディングスクールライフを過ごせる低年齢対象の学校はありませんか？

A. あります！　近年、日本でも寄宿制の学校が注目されつつあります。私が知る限り、最もスイスのバイリンガルボーディングスクールに近い形態で運営されている寄宿舎小学校は、千葉県木更津市にある暁星国際学園小学校（私立・共学）です。私は 2007 年７月にこの小学校にお邪魔し、たっぷり数時間かけて、インターナショナルコースの授業や下校時の風景までを見学させていただきました。その際の感想は、「素晴らしい」のひと言に尽きます。「日本人の生徒ばかりを相手に、ここまでやれるとは！」と、うなってしまいました。英語で進められる理科や算数のみならず、インターナショナルコースの必修科目であるフランス語の授業も、かなりハイレベルの

内容でした。寄宿舎では、生徒と同じフロアに校長先生が寝泊りしておられます。校長先生は、若かりし日にスイスへの留学経験をお持ちで、スイスのボーディングスクールをよくご存知でいらっしゃいました。それが反映してか、日本国内でありながら見事にスイスに似た雰囲気がかもし出されています。敷地も広く、伸び伸びできそうです。小学校１年生から、ボーダー（寄宿生）を受け入れています。数年前にスタートした小学校のインターナショナルコースから、将来どんな日本人が巣立つか、とても楽しみです。

〈暁星国際学園小学校〉
〒292-8565　木更津市矢那１０８３
ＴＥＬ：0438-52-3291
ＵＲＬ：http://www.gis.ac.jp/

Q. 我が子はもはや低年齢留学のタイミングを逸し、中学生になりました。海外の一流大学に進学したいと言い出し、親の私は戸惑っています。

A. スイスには、高学年のお子さん向けに、こんな学校もあります。

Aiglon College	http://www.aiglon.ch/
Beau-Soleil College	http://www.beausoleil.ch/
Institut Monte Rosa	http://www.monterosa.ch/
Institut Le Rosey	http://www.rosey.ch/

また最近、海外の一流大学を目指す動きが、日本の中学生・

高校生の間で出てきています。その流れを受けて、先に掲載した参考文献のうち『東大よりハーバードに行こう』『５歳からはじめるハーバード留学準備』のご著者でハーバード大学ご出身の森田正康氏が、（株）ベネッセとのコラボレートで展開するプロジェクトを始動させ、ハーバードなど海外の一流大学への進学をサポートするプログラムを提供する組織を創りました。

〈√H〉

powered by Benesse x hitomedia

ＵＲＬ：http://harvard.hitomedia.jp/

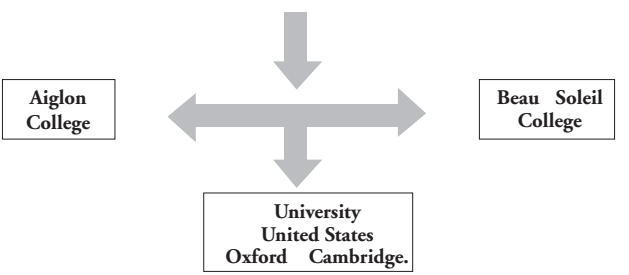
寄宿舎学校ラ・ガレン 留学参考資料

各国別該当学年対比表

Comparison of Different Educational Systems

The children's grouping is decided by their birthday and where it falls as from September 1st of each year.

Age	La Garenne and France	UK	USA	Switzerland	Spain
4-5	2e Maternelle	Reception		1re nfantine	
5-6	12e 3e Maternelle	Year 1		2e enfantine	
6-7	11e (CP)	Year 2 (End of Key Stage 1)	1st	1re primaire	Primario 1
7-8	10e (CE1)	Year 3	2nd	2e	Primario 2
8-9	9e (CE2)	Year 4	3rd	3e	Primario 3
9-10	8e (CM1)	Year 5	4th	4e	Primario 4
10-11	7e (CM2) Key Stage 2)	Year 6 (End of	5th	5e	Primario 5
11-12	6e	Year 7	6th	6e	Primario 6
12-13	5e	Year 8	7th	1re C.O	ESO 1



各学期の開始日と終了日
〈３つの学期とも初日はジュネーヴ空港に集合〉

ACADEMIC SCHOOL YEAR 2007 / 2008

1st Term

Sunday 9th September	The children may be met at Geneva airport. Arrival of new pupils before 17h00
Monday 10t September	The school starts at 08h30.
	The pupils (day pupils & boarders) will be on holiday from Friday 19th October at 15h45 until Monday 29th October at 08h30 a.m.
Wednesday 12th December	The school ends at 12h00.
Thursday 13th December	Departure with the parents.

2nd Term

Sunday 13th January	The children may be met at Geneva airport. Arrival of boarders before 17h00
Monday 14th January	The school starts at 08h30.
Wednesday 19th March	The school ends at 12h00.
	Departure with the parents. (From 12h00)
Thursday 20th March	Departure to Geneva airport.

3rd Term

Sunday 13th April	The children may be met at Geneva airport. Arrival of boarders before 17h00
Monday 14th April	The school starts at 08h30.
Wednesday 18th June	The school ends at 12h00.
	Departure with the parents.
Thursday 19th June	Departure to Geneva airport.
	Apart from the Monday of Pentecote (Monday 12th May 2008), there are no other holidays during the school year.

正規の時間割

A Typical Weekly School Timetable

	Monday	**Tuesday**	**Wednesday**	**Thursday**	**Friday**
8h30 - 9h15	Mathematics	Mathematics	Mathematics	Mathematics	Mathematics
9h15 - 10h00	English	English	English	English	English
10h00 - 10h20	B	R	E	A	K
10h25 - 11h30	Geography	Science	History	Music	Computers
11h30 - 12h	Handwriting/ reading	Science	Handwriting/ reading	Music	Computers
12h -13h20	L	U	N	C	H
13h25 -14h15	Foreign Languages	Foreign Languages	Study	Foreign Languages	Foreign Languages
14h15 - 15h45	Art	Design and Technology		Art	Handwriting /reading

Sports activities are from 16h30 – 18h30.

持ち物リスト

SCHOOL YEAR CLOTHING LIST

IMPORTANT

The school will provide numbers which should be sewn onto all of the student's clothes. They should have their names attached to their luggage (suitcase and bags).

Boarders Day-Student

6 Pairs of underwear School
4 Cotton vests
3 Thermal vests 1 Pencil case (complete)
10 Pairs of socks (cotton, sports, wool) 1 School Bag
2 Pairs of Bermuda shorts 1 Packet of tissues
3 Pairs of jeans 2 Pairs of slippers
1 Pair of trousers (corduroy)
1 Pair of grey trousers or grey skirt Sport
1 Dress
1 White long sleeve shirt 1 Pair of ice skates
3 T-shirts 1 Rucksack for swimming
2 Zip-up turtle neck long sleeve shirts (cotton) (towel, swimming costume, shampoo, 2 Sweat shirts goggles)
2 Warm pullovers 1 Sun cream
1 Dressing gown 2 Pairs of sports shoes
2 Pairs of pyjamas 1 pair with non-marking soles for indoor sports
2 Bath towels (shower & swimming)
2 Pairs of slippers Winter
1 Pair of smart shoes
1 Warm anorak 2 Pairs of ski socks
1 Complete toilet bag 2 Pairs of ski gloves(toothbrush + toothpaste + shampoo + 1 Ski helmet with chin protection hair brush + conditioner + moisturising 1 Back protection cream + deodorant + Vitamin C + Arnica) 1 Pair of sun glasses
3 Pairs of thermal tights 1 Pair of ski goggles

Sport

2 Swimming costumes
2 Pairs of sports shoes

1 pair with non-marking soles for indoor sports
1 Rucksack
1 Cap
2 Pairs of ski socks
2 Pairs of ski gloves
1 Pair of ski goggles
1 Back protection
1 Pair of sun glasses
1 Ski helmet with chin protection
1 Ping pong racket
1 Tennis racket (if needed)

サマースクールの時間割
Summer School Weekly Timetable

	Monday - Friday	Saturday and Sunday
8h - 9h	Wake up, wash, tidy rooms and breakfast	
9h - 12h	Language classes.	Sports and cultural activities.
12h - 1h30	Lunch	
1h45 - 16h	Sports activities and excursions.	
16h - 16h30	Snack	
16h30 - 18h30	Continuation of sports activities	
18h30 - 19h30	Dinner	
19h30 - 21h	Organised activities	
21h - 21h30	Showers and bedtime	

サマースクールの持ち物リスト

SUMMER SCHOOL CLOTHING LIST

IMPORTANT

The school will provide numbers which should be sewn onto all of the student's clothes. They should have their names attached to their luggage (suitcase and bags).

Boarders Day Pupils

6 Pairs of underwear
4 Cotton Vests 1 Pair of slippers
8 Pairs of socks (cotton / sport) 1 Thermal coat
2 Pairs of Bermuda shorts 1 Bag for the swimming pool
3 Pairs of jeans (towel, costume, shampoo, goggles)
1 Dress 1 Sun cream
3 T-shirts 1 Pair of walking shoes
2 Long Sleeved Sweat Shirt 2 Pairs of sports shoes
1 Jumper (One pair with non marking soles for indoor sports)
1 Dressing gown 1 Pair of sports trousers
2 Pairs of pyjamas 1 Waterproof jacket
2 Bath towels (shower and swimming pool)
1 Pair of slippers
1 Pair of shoes (for town)
1 Warm anorak
1 Complete toilet bag (toothbrush + toothpaste + shampoo +hair brush + conditioner + moisturising cream + deodorant + Vitamin C + Arnica)
1 Waterproof coat
1 Fleece

Sport

2 Swimming costumes
2 Pairs of sports shoes (One pair with non marking soles for indoor sports)
1 Pair of walking boots
1 Cap
1 Ruck Sack
1 Pair of sunglasses
1 Ping pong racket
1 Tennis racket (optional)
1 Pair of sports trousers

若草まや

低年齢留学コラムニスト／医師。東京女子医大卒。結婚７年目にして生まれた我が子のために最良の教育をさがし求めた結果、世界の名門ボーディングスクールに魅せられ、2001 年、ふたりの娘たちを５歳と６歳でスイスに留学させる。それまで日本ではほとんど知られていなかった、スイスの低年齢向けボーディングスクールでの素晴らしい留学生活を、より広く伝えたいと考え、本業の傍ら、低年齢留学に関する執筆・講演活動を行ってきた。現在、㈱アルクのホームページにて、『若草まやの国際子育てのススメ』を連載している。

http://kokata.alc.co.jp/maya/